creative commons

COMMONS DEED

저작자표시-비영리-변경금지 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.

다음과 같은 조건을 따라야 합니다:

저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.

비영리. 귀하는 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 없습니다.

변경금지. 귀하는 이 저작물을 개작, 변형 또는 가공할 수 없습니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

**저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.**

이것은 이용허락규약(Legal Code)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

Disclaimer

dCollection

[UCI]I804:21031-000002236949

文 学 碩 士 学 位 論 文

# 小林一茶の俳句におけるオノマトペ

PUKYONG NATIONAL UNIVERSITY
부경대학교

2016年 2月

釜 慶 大 学 校 大 学 院

日 語 日 文 学 科

竹 下 知 佳

文 学 碩 士 学 位 論 文

# 小林一茶の俳句におけるオノマトペ

指導教授　崔　建　植

이 論文을 文学碩士 学位論文으로 提出함.

2016年 2月

釜 慶 大 学 校　大 学 院

日 語 日 文 学 科

竹　下　知　佳

竹下知佳의 文学碩士 学位論文을 認准함.

2016 年 2 月

委員長　文学博士　孫東周 (印)

委　員　文学博士　朴榮淑 (印)

委　員　文学博士　崔建植 (印)

# 目次

Ⅰ. 序論 ..... 1

1.1 研究目的 ..... 1

1.2 研究対象と研究方法 ..... 2

Ⅱ. 先行研究の検討 ..... 3

2.1 先行研究の検討 ..... 3

2.1.1 道本武彦(1977) ..... 3

2.1.2 大西芳郎(1993) ..... 4

2.1.3 田守育啓, ローレンス・スコウラップ(1999) ..... 5

2.1.4 角岡賢一(2007) ..... 6

2.2 オノマトペの範疇に関する問題について ..... 8

Ⅲ. 本論 ..... 11

3.1 年度別オノマトペ使用例数と割合 ..... 11

3.2 一茶の俳句におけるオノマトペに関する考察 ..... 15

3.2.1 音韻的考察 ..... 16

3.2.1.1 清濁交替 ..... 16

3.2.1.2 母音・子音交替 ..... 19

3.2.1.3 拗音化 ..... 21

3.2.1.4 摩擦音～破擦(裂)音交替 ..... 23

3.2.2 形態的考察 ..... 25
3.2.2.1 一茶俳句におけるオノマトペの形態的特徴 ..... 25
3.2.2.2 リ接辞型 ..... 28
3.2.2.3 促音「ッ」・撥音「ン」・長音「ー」 ..... 29
3.2.2.4 反復型 ..... 34
3.2.2.5 交替型 ..... 36
3.2.2.6 語基型 ..... 37
3.2.2.7 漢語オノマトペ ..... 39
3.2.3 統語的考察 ..... 43
3.2.3.1 複合名詞 ..... 43
3.2.3.2 名詞的用法 ..... 46
3.2.4 意味的考察 ..... 47
3.2.4.1 鳴き声の掛詞 ..... 47
3.2.4.2 「新しい使い方」のオノマトペ ..... 49

Ⅳ. 結論 ..... 51

参考文献 ..... 55
＜付録＞小林一茶の俳句におけるオノマトペ一覧 ..... 58

# 小林一茶의 하이쿠에 나타난 오노마토페

다케시타 치카

부경대학교 대학원 일어일문학과

## 요약

의성어・의태어와 같은 어휘군의 총칭인 오노마토페는 신문이나 논문 등 무엇인가를 객관적으로 논해야 할 상황에서는 별로 사용되지 않지만, 만화나 광고와 같이 직관적으로 뭔가를 표현하려고 할 때에는 많이 사용된다. 그 중에서도 5・7・5 의 17 글자로 세상의 모든 것을 표현하려는 하이쿠에서는 종합적인 표현이 가능해 정보량이 많은 오노마토페를 근・현대 하이쿠작가들이 즐겨 써왔다.

본 논문은 근세 3 대 하이쿠작가 중 한명이며 근대이후의 하이쿠작가들에게 큰 영향을 준 고바야시 잇사의 하이쿠에 나타난 오노마토페에 대해서 조사하고 고찰한 것이다.

우선 잇사가 평생을 걸쳐서 창작한 약 2 만구의 하이쿠 중에서 오노마토페가 사용되는 비율에 대해 조사하였다. 이런 조사는 이미 선행연구에서 마츠오 바쇼, 요사 부손과의 비교라는 관점에서 조사가 이루어지긴 했지만 본 논문에서는 연도별로 오노마토페의 사용율을 산출해서 잇사가 항상 일정한 비율로 오노마토페 하이쿠를 만든 것이 아니라, 그의 인생에 있어서 어떤 계기가 있을 때 즉 정신적 고통이나 고독감이 완화될 만한 사연이 생겼을 때 오노마토페를 사용하는 비율이 높아지는 경향이 있다는 것을 밝혔다.

다음으로 오노마토페를 음운적 측면에서 봤을 때에는 하이쿠에 표현하려고 하는 장면이나 심리적 묘사에 맞춰서 음운교체를 하고 있다는 것을 알게 되었다. 때때로 일반적이지 않은 오노마토페를 사용하기도 했지만, 그것 역시 음운적인 특징을 살린 표현이 되어있으며 잇사의 언어에 대한 섬세한 감각을 엿볼 수 있었다.

형태적 고찰에서는 잇사의 하이쿠에 나타난 오노마토페를 형태적  오노마토페 표식에서의 고찰뿐만

아니라 어기형 오노마토페나 한어 오노마토페라는 관점에서도 조사 및 고찰을 하였다. 그리고 하이쿠라는 짧고 제한된 표현형태 속에서는 어기형 오노마토페라는 오노마토페 표식을 접속하지 않은 형태를 사용함으로써 더욱 심오한 세계를 표현해내려고 한 것을 알 수 있었다. 그리고 한어 오노마토페에 관해서는 고유어 오노마토페와의 관계로 인해 한어라는 의식이 약해지면서 고유어 오노마토페의 경우처럼 형태적인 변화를 하게 되었다는 것을 알게 되었다.

통어적인 측면에서는 오노마토페는 보통 부사로 사용되는 것이 일반적이며 본 논문에서도 부사용법을 중심으로 고찰을 하였지만, 잇사의 하이쿠 중 하나의 특징이라고 볼 수 있는 복합명사 및 명사용법에 대해서도 언급하였다. 그 결과 오노마토페와 직접적인 관련이 없는 명사 ( 동사가 명사화된 것을 말함 ) 에 접속해서 복합명사를 형성하는 경우가 있었으며, 이런 표현방법은 글자 제한이 있는 하이쿠에 있어서 아주 효과적인 역할을 하고 있다고 생각된다. 또한 오노마토페를 명사적으로 사용하였을 때 특히 의성어에 있어서는 그 오노마토페가 나타내는 "음"과 그 음(소리)과 관련되는 "사물"이라고 하는 이중적인 표현, 즉 청각과 시각이라는 중층적인 표현이 가능해진 것을 확인하였다.

의미적 측면에서는 자칫하면 평범하고 지루한 느낌을 줄 수도 있는 오노마토페를 잇사가 어떻게 새로운 표현으로 승화시켰는지에 대해서 고찰하였다. 그리고 동물의 울음소리와 다른 어떤 명사(아니면 동사)를 掛詞라는 표현수법으로 표현한 부분에 대해서는 전통적인 수법에서 벗어나 예전과 다른 새로운 표현을 시도하려고 한 노력의 흔적이 보였다. 또한 그 하이쿠에서 표현하려는 명사와 전혀 맞지 않은 뜻을 가진 오노마토페를 일부러 접속해서 하이쿠를 더 인상적인 것으로 만들려고 한 면도 보여서 잇사가 오노마토페를 사용하는 데에 있어 여러가지 노력을 했던 것을 알 수 있었다.

하이쿠도 단카도 "어떤 명사를 핵심으로 둘 것인가가 관건이 된다"고 현대 단카작가인 사사키 유키츠나는 말했지만 이런 생각은 아마 잇사가 살던 에도시대 부터 있었을 것이다. 그리고 잇사는 하이쿠의 핵심내용인 명사에 맞춰서 오노마토페를 자유자제로 변형시키면서 사용하였으며, 어떨 때는 오노마토페를 음운적, 형태적으로 변화시켜서 그 하이쿠 속에 그려진 세계를 섬세하게 묘사하고, 또 어떨 때는 그 명사와 전혀 상관없는 것처럼 보이는 오노마토페를 사용함으로써 하이쿠가 주는 인상을 더 높이거나 하면서 아주 자유롭게 세상의 여러 사물들을 표현했다는 점에서 잇사의 탁월한 능력을

알 수 있었다. 오노마토페 하이쿠의 선구자라고 불리는 이유가 바로 여기에 있지 않을까 생각된다.

PUKYONG NATIONAL UNIVERSITY
부경대학교

# Ⅰ．序論

## 1.1　研究目的

小林一茶は松尾芭蕉、与謝蕪村と共に「近世三大俳人」と呼ばれ、後世の俳人らに多大な影響を及ぼした俳人である。彼は幼い頃から継母との軋轢や貧困等により苦しい生活を送ったが、生涯にわたり約二万句にも及ぶ俳句を創作した。

一茶の俳句の特徴としては様々な比喩表現による「平明素朴さ」「野人的な泥臭さ」「率直さ」[1]などが挙げられるだろう。中でもオノマトペと呼ばれる擬音語・擬声語の類の多用はいわゆる一茶俳句最大の特色であり、現代俳人の坪内稔典（2001：71～72）は「オノマトペを使うことが一茶のシンボル、しるし」であると称し、福永法弘（2006：103）も「（オノマトペ俳句の）先人と言えば、誰より小林一茶である」と述べるほど強いインパクトを与えている。この「オノマトペの多用」という特徴を道本武彦（1977：57）は「用語の未昇華による一面もある」と指摘しているが、一茶の俳句におけるオノマトペの使い方は非常に多彩かつ技巧的であり、むしろ言葉を自由に操った結果としての多用であると考えた方がよいのではないだろうかと考えられる。

本稿では一茶が創作した俳句約二万句を対象に、まず年度別のオノマトペ使用状況についてまとめ、その傾向について調査した。そして俳句の中で使われているオノマトペを音韻的・形態的・統語的・意味的な面から分析し、一茶がなぜオノマトペ俳句の代表的人物と呼ばれるようになったのか、その理由について数字の面だけでなく表現効果の面からも考察することにした。

---

[1] 三谷栄一・山本健吉編（1982）『日本文学史辞典（古典編）』p.405

## 1.2 研究対象と研究方法

本稿は、一茶の俳句約 18700 句が収蔵されている『一茶全集／第一巻 発句』(信濃毎日新聞社、1979 年)と、この索引集である『一茶発句総索引』(信濃毎日新聞社、1994 年)に付載されている新資料(198 句)を底本として研究を進めている。またインターネット上に公開されている「一茶の俳句データベース」には底本刊行以降に発見された文献から収集した句等を含む 22057 句が掲載されており(2014 年 1 月 5 日付)、これも参考にしながら類似句を含めた全ての俳句を調査対象とした[2]。

本稿で類似句まで含めて調査する理由は、これらの中に全く同一の形式を持ちながらオノマトペの部分のみが変化している句や、テーマを同じくしているが用いられているオノマトペが違う句などの例があるからである。どのような語彙がその句に最も相応しいかを考え、語彙を入れ替えているということは、それだけ一茶がオノマトペを重視していたということにもなり、一茶がオノマトペの効果的な使用を意識していたということの裏づけになるであろうと考えられる。

研究方法としては、まず『一茶発句総索引』からオノマトペと考えられる語彙を抽出し、その数や形態、用法、意味、作句年を調査してデータ化した。そしてこのデータを元に年度別例数の算出、形態的な特徴による分類・集計、更に個々のオノマトペの表現効果について考察を行い、多角的なアプローチによって一茶の俳句に現れるオノマトペを考察することにした。

---

2 ただし本稿では、同じ句形で末尾が「かな」と「哉」のように表記のみが異なるものは同一句とみなしている。

# Ⅱ. 先行研究の検討

## 2.1 先行研究の検討

### 2.1.1 道本武彦(1977)

道本(1977:54)は十七字という制約のある俳句において大きな現象・思想を表現するには、必然的に[主語]+[述語]と言う最も単純な文章型がとられることになると述べている。しかしそれだけでは十七字に及ばないため、以下のように[修飾語]が用いられることになる。

(1) ①[修飾語][主語]+[述語]

「どのやうな何が」+「どうなる(する)」

②[主語]+[修飾語][述語]

「何が」+「どのやうにどうなる(する)」

そしてこの基本型②の述語を修飾する語=副詞が俳句には多く用いられるとして、芭蕉・蕪村・一茶各人の俳句について副詞の数を調査し、特に情態を表す副詞である擬声・擬態語の割合に注目して詳細な考察を行っている。

ところが道本のまとめた分類表を見ると、「オノマトペは連濁しない」という基本的な定義から外れた語彙である「ほのぼの」「こりごり」はオノマトペと認めているが、同じく連濁のある「つくづく」は除外するという事例が見受けられる。また「えいやっ」「えいさらえい」のような掛け声と考えられるものをオノマトペ語彙として扱う一方、「うっすり」「しっかり」などのいわゆるリ延長強勢擬容語は除外するなどの例もあり、彼がどの

ような基準で擬声・擬態語を類別したのかという選定基準は曖昧で、その分類には多くの疑問が残る。

更に道本は「情態の副詞を無造作に多用することは、語の昇華が果たされてゐないと言ふこともでき（中略）他の表象法を探索しないで、安易に擬声・擬態語を用ゐることは、用語に無関心であると言へば言ひ過ぎであらうか」（同：56）とも述べている。しかし、果たして作句をする上で擬声・擬態語は安易に用いられているのか、擬声・擬態語の多用を用語に無関心であるとしてよいのか、という点も疑問である。

### 2.1.2　大西芳郎（1993）

大西（1993：108）は近現代の俳句におけるオノマトペの表現形式について言及し、俳句という短い表現形式においてオノマトペが使われる場合、①感覚の生きたオノマトペを模索し、独自のオノマトペを生み出す、②一般に使われるオノマトペの新しい使い方を発見する、③オノマトペの本来持っていた感覚を十分に生かした使い方をするという三点に心を注ぎ、ともすると陳腐な表現となりがちなオノマトペを効果的に用いるために俳人らが努力してきた跡が至る所に見えると述べている。

またオノマトペだけではなく俳句全体を見渡して、他の語との音の響き合いという観点からその効果を考察している点も注目すべきところであろう。例えば、「簗打ちやささらささらと波の花」という阿波野青畝の句においては十七字中十二字がア段音という構成となっており、それゆえに明るく爽やかな印象の句に仕上がっていると指摘している（同：99）。

このことから、俳句という様々な制約のある短い表現形態においては、オノマトペを他の語との関連性から考察することも必要であるとことが読み取れる。よって本稿でもこの点に留意しながら、考察を行うことにする。

### 2.1.3　田守育啓, ローレンス・スコウラップ（1999）

田守・スコウラップ（1999：19）は日本語オノマトペの音韻形態について、おおよそ 1 モーラないし 2 モーラの語基にまとめることができるとしている。そしてその語基に微妙なニュアンスを付加するオノマトペ標識を伴う点が日本語オノマトペの音韻・形態的な特徴であると述べ、各々のオノマトペ標識が表す意味について以下のようにまとめている（同：26～30）。

(2)「り」[3]：ゆったりした感じ、完了

促音：（語末にて）瞬時性、スピード感、急な終わり方、（語中にて）強調

撥音：（語末にて）共鳴、（語中にて）強調[4]

長音：強調

反復：音や動作の繰り返しないしは連続

現在のオノマトペ研究において（2）の意味区分は、多少の違いはあれども多くの研究者らがほぼ同意しているところである。しかし語中に促音・撥音が挿入される場合はいずれも強調の意味を持つと述べるだけで、両者の違いが十分に説明されていない点には疑問を感じる。

一方オノマトペの統語的特徴については、ほとんどすべての日本語オノマトペは様態副詞をはじめとする副詞として機能するが、動詞、名詞、形容詞/形容動詞とし

---

[3] 角岡（2007：85）によると 1 モーラの語基には「い」、2 モーラの語基には「り」が接続するが、この理由として 2 音節語基は「い」より「り」の方がオノマトペ標識として目立ちやすいことなどを挙げている。また山口（2002：38～39）は奈良時代から「AB ラ」「AB ロ」型オノマトペが見られたが、鎌倉・室町時代には語末に「ラ」をとる語が栄えた語としている。そして現代語の「しっとり」「うっとり」が「しっとら」「うっとら」と表されていたところから、「り」との関連性が示唆されている。

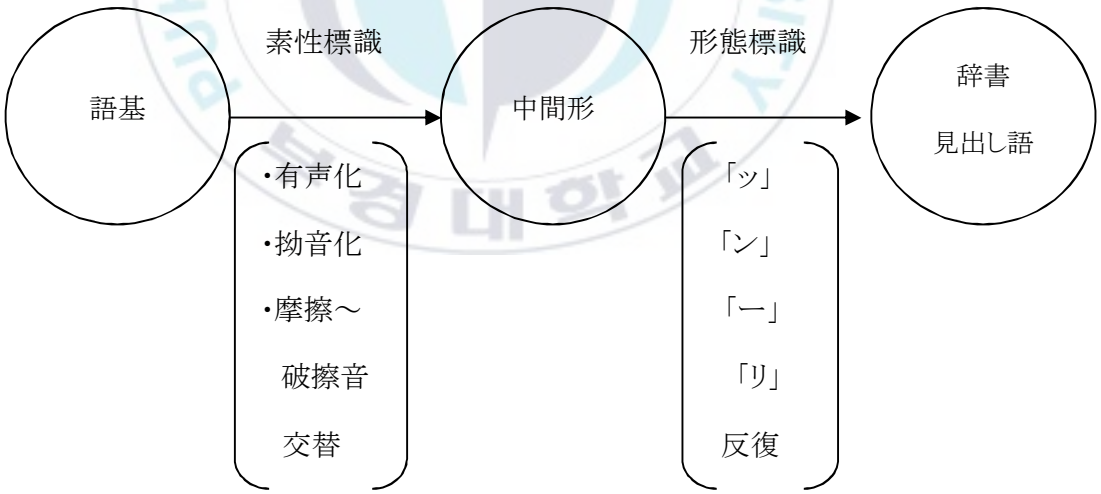
[4] 田守・スコウラップ（1999：28）は「ぼんやり」「げんなり」に「*ぼやり」「*げなり」という撥音を含まない対応形が存在しないため、語中の撥音は強調の挿入辞とみなさない方がよさそうだと述べている。しかし浜野（2014：55）は接中辞「ッ／ン」両者に「運動に強い力が加わっていること」、あるいは「状況が著しい」という意味があるとしている。

て働くこともできるとしている(同:47)。よって本稿でも主に副詞としてのオノマトペについて考察を進めることにするが、一茶の俳句には芭蕉や蕪村の句に比べてオノマトペ複合名詞が多く見られるという点も特徴の一つと考えられるため、複合名詞を含む名詞用法についても調査・考察の対象に含めることにする。

### 2.1.4　角岡賢一(2007)

角岡(2007:106～107)は語基を/CV/と/CVCV/という2パターンに分け、これらが有声化や拗音化などの「素性的オノマトペ標識[5]」によって中間形に変形し、その後形態標識である「オノマトペ標識」を接辞することで辞書見出し形となると述べている。

(3)[6]




[5] 角岡(2007)は素性的オノマトペ標識を「有声化」「硬口蓋化」「摩擦音/破擦音交替」と設定している。しかし「硬口蓋化」の実際の用例を見ると「かた～かちゃ」のように渡り音〔j〕を挿入した拗音化を意味しており、また「硬口蓋化」と設定すると「ワ行拗音化」についての言及ができないため、本稿では「硬口蓋化」ではなく「拗音化」と設定する。
またサ行音とタ行音の交替を表す「摩擦音/破擦音交替」についても、一茶の俳句には「がさり～がたり」という破裂音との交替も見られるため、本稿では「摩擦音～破擦(裂)音交替」と表記する。ここで「～」を使用したのは双方向というニュアンスを示すためである。

[6] 角岡(2007:106)を一部修正

そしてこの逆の作業を経ることで、辞書見出し形からオノマトペの語基を抽出することができるが、オノマトペ標識のない形ではこれらの語基の表現している様態は具体性を持っていないという点も指摘している(同:60)。

しかし一茶の句には「ちとの間の名所也けり夕祓」(文政 3 年)のように1モーラ語基のみで用いられ、その意味を具体的に表している例もある。よって本稿では語基型オノマトペについても考察を行うことにする。

ところでオノマトペの形態的特徴を観察する中で問題になるのが、2 モーラからなるオノマトペの 2 モーラ目が「ん」や「っ」である場合である。例えば「でん」は一音節のオノマトペ「で」にオノマトペ標識「ん」が接続した形なのか、それとも 2 モーラのオノマトペ「でん」という語基見出し形なのか、判断するのは容易ではない。

これについて角岡は「N」と「Q」を置き換えできるかどうかで判断できると述べている。例えば上記の「でん」の場合、「ん」をオノマトペ標識と捉え「でん」を「*でっ」に置き換えようとすると、「でん」の有する意味が全く消えてしまう(同:65)。よって「でん」はこのままの形で語基となるのであり、本稿でもこの考えに基づいてオノマトペの分類を行っている。

他にも先行研究として山口仲美(2002)によるオノマトペの歴史的変遷についての研究、藤田万喜子(2009)による種田山頭火の俳句におけるオノマトペの研究、玄榮美(2014)による二葉亭四迷の小説におけるオノマトペの研究や浜野祥子(2014)による音韻形態や意味拡張に関する研究など、多くの研究を挙げることができる。これらについては本論において適宜紹介することにし、ここでは取り上げない。

以上のように多岐に渡り細分化されてきている先行研究だが、どこまでをオノマトペとして取り扱うかという視点が研究者によって異なる点や、一茶の俳句におけるオノマトペに関する研究においては数量的な面ばかり取り立たされ、個々の表現の観察にまで及んでいない点などは問題として挙げられるであろう。

よって次項で本稿の調査におけるオノマトペの範疇についての定義を行い、第三章において一茶俳句におけるオノマトペの特徴に対する総合的な観察を、四つの観点（音韻・形態・統語・意味）に分けて行っていこうと考える。

## 2.2 オノマトペの範疇に関する問題について

オノマトペとはどのような言葉なのか、という命題に対する答えはおおよそ「オノマトペは音と意味とが結びついている」、つまり音象徴性を持つ言葉であるという点で各研究者とも一致している。しかし、オノマトペはどこまでをオノマトペであると言いうるかという命題になると、研究者の間でも判断に揺れが見られるというのは前節で既に確認したことである。

野間秀樹（2001：12）はこのオノマトペの境界画定に関する問題について、「共時的な平面の中で考えるのか、それとも通時的な時間の流れの中で考えるのかによって異なってくる」と述べているが、この考え方から更に進んで通時的な区分と共時的な区分とを融合させたのが角岡（2007：15～17）であると考えられる。

角岡は「オノマトペ的語感」のある語彙であっても、語源をさかのぼってみなければ客観的に判断することは難しいとし、語の成立当初から擬音語・擬態語であった語彙を「真正オノマトペ」、動詞・形容詞・形容動詞・名詞という実詞に語源を持つ一般語類の中で「オノマトペ的語感」を有するものを「境界オノマトペ」として区別している。

そしてオノマトペ語彙に多く見られる反復の形態について、一般語彙にも反復型は見られるが、その意味合いは異なると指摘している。例えば名詞であれば「それぞれの」という意味合いがあり（例：ひと→ひとびと、木→木々など）、形容詞であれば

描写される様態の度合いが高いこと(例:くろい→くろぐろ、あかい→あかあかなど)が示される。これに対し、オノマトペ語彙においてはその様子が「繰り返される」、つまり「反復」という形式に沿った意味を有しているのである。

この指摘も結局のところ「オノマトペは音象徴性を持つ語彙群である」という基本意義に立ち返るものである。ではなぜ「はるばる」「ほのぼの」は形容動詞の語幹から派生した語であるにも関わらず、オノマトペ語彙と感じられるのであろうか。

ここで筆者が注目したのは、「人」などの名詞や「黒」などの形容詞の語幹は反復しても本来の意味から逸脱しないが、形容動詞や動詞由来のオノマトペは本来の意味範囲から外れた、より広い意味への拡張が見られるという点である。

例えば「ほのぼの」は形容動詞「ほのかだ」から生じた語彙であり、「くろぐろ」同様連濁を起こしてはいるが、反復によってほのかさの度合いが強まり「よりほのかである」という意味合いになっているわけではない。むしろほのかさゆえの「穏やかさ」や「温かみ」を表現しており、「ほのか」という目に見える具体的な意味が「雰囲気・周りの空気の温度や様子」という抽象的な意味へ転じている。つまりこのような抽象化という意味拡張により、「ほのぼの」はよりオノマトペらしい語彙になっているのではないかと考えられるのである。

このような意味拡張は動詞由来のオノマトペ「つくづく」(動詞「尽く」の終止形の重なったものか[7])にも言える。一般的に「底が尽きた」という物理的な意味で使われるこの動詞を、心の底の「尽きた」ところで感じる、つまり心に深くしみこむ様という抽象的な意味に転化させたものであると考えることができるのである。

浜野(2014)はメタファー(隠喩)及びメトミニー(換喩)による意味拡張により、日本語オノマトペには複数の意味を有する語彙が数多くあると指摘している。例えば「言葉」を「刃物」と捉えるメタファーにより、刺すことに関連するオノマトペが「チクチクと嫌みを言う」「グサッと皮肉を言う」というような表現が可能になる(同:75)。また本来

7 小野正弘編(2007)『日本語オノマトペ辞典』「つくづく」p.271

は「硬い丸い物が回転する状況」を表す「コロコロ」が、「丸」に焦点を当てたメトミニーにより「コロコロと丸い」、「コロコロと太っている」というように意味が拡張していくという例も提示している(同:81)。

このことからオノマトペは意味拡張という現象と切り離せない面を持っており、特に境界オノマトペは語源となる語彙からの意味拡張によって、オノマトペ語彙になり得たのではないかと考えられる。

よって本稿で扱うオノマトペ語彙は、「オノマトペ的語感」を有する副詞を中心とするが、連濁する語彙であっても語源となる語の具象的な意味が拡張し、抽象化した語彙についてはオノマトペとして認めることにしている。

また「ろくろくに(>ろくに=まともに)」のように反復前と反復後とで意味的に大差のない語は除外しているが、漢語由来のオノマトペについては漢字自体の持つ意味が反映されるため、別途項目を立てて検討することにする。

加えて前節で述べたように、一茶の句においてはオノマトペ複合名詞が多く用いられているという点も一つの特徴であるため、オノマトペ複合名詞とオノマトペ自体が名詞として働く名詞的用法についても調査・考察の対象に含める。

# Ⅲ. 本論

## 3.1 年度別オノマトペ使用例数と割合

小林一茶は宝暦 13 年(1763)5 月 5 日信濃国水内郡柏原(長野県上水内郡信濃町柏原)に生まれる。3 歳で母親を亡くし祖母に愛育されたが、8 歳の時に迎えた継母とは折り合いが悪く、弟の仙六の誕生によって継子のひがみも加わり更に反感を募らせていく。14 歳で祖母が亡くなると継母との対立はますます激化し、翌年春に父は一茶を江戸に出す。その江戸では奉公生活に辛酸をなめたが、天明 5 年(1785)23 歳頃から俳諧を習い覚え、その道に糊口を求めるようになったという[8]。

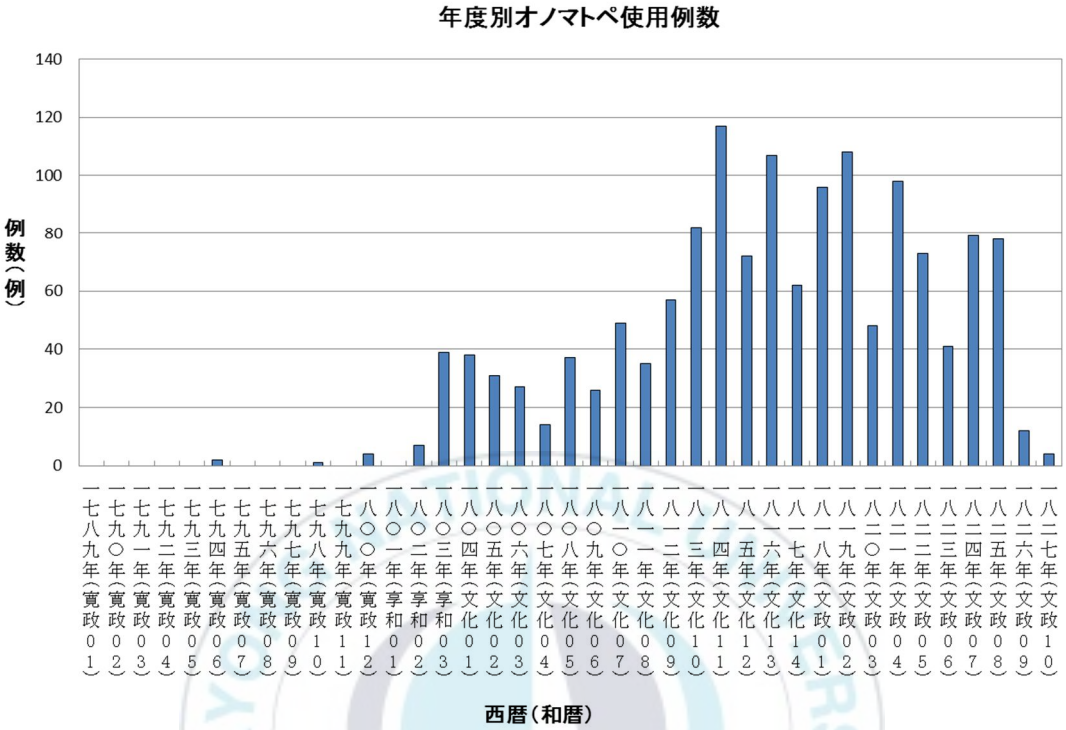
こうして俳諧師となった小林一茶が生涯にわたって創作した俳句は約 22000 句にも及ぶが、この中で使用されているオノマトペの数は本稿の調査によると、異なり語数で 561 語、延べ語数は 1705 語にのぼる。そしてオノマトペを使用した俳句のうち、それが作られた年の判明しているものは 1444 句あり、それを年度別に集計したものが＜表 1＞である。

一茶は数えで 15 の年に江戸に出され、天明 7 年(1787)には二六庵竹阿に師事していたが、寛政 2 年(1790)の竹阿没後自ら二六庵を継ぎ、その 2 年後には西日本へ俳諧行脚の旅に出ている。この頃から自らを一茶と称して自筆の句帳も遺しているのだが、＜表 1＞を見ると文化年間以降文政 10 年に自らが没する前まで、オノマトペ俳句が絶えず作られ続けていることが確認できる。

---

8 一茶の略歴については『日本古典文学大辞典(第一巻)』(1983:184～185)、丸山一彦(1990:371～373)等を参考にしている。

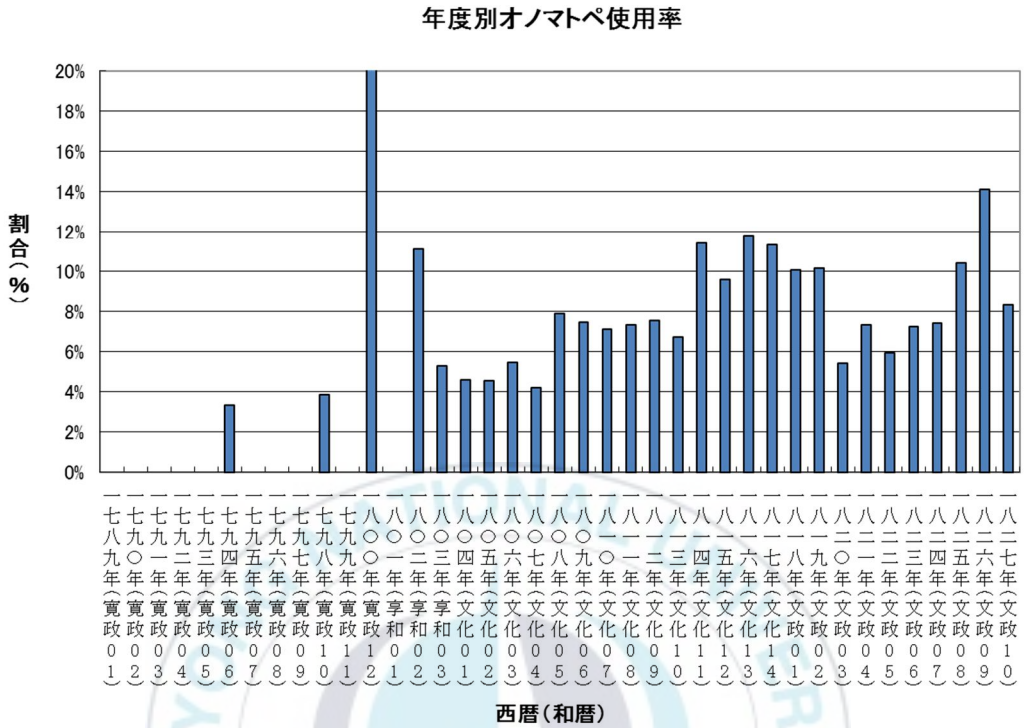
＜表1＞




ただし＜表 1＞を見ると、ある年にオノマトペ使用例数が増加しているかと思うと、その翌年には減少しているなど起伏が激しく、オノマトペを使う年と使わない年とがあるような錯覚に陥ってしまう。そこで一茶が作句した年の判明している俳句の総数を年度別に集計し、そこからオノマトペ俳句率を割り出したのが次ページの＜表 2＞である。

＜表 2＞を見ると、寛政 12 年（1800）、享和 2 年（1802）はオノマトペ俳句の出現率が高くなっているが、これはこれらの年に作られたと判明している作品の総数自体が少なく、分母が小さいために割合が高くなってしまったということであると推察される。この点を除くと、この表からはいくつかのまとまりが見受けられるのではないだろうか。

＜表 2＞




＜表 2＞を見ると、文化 5 年（1808）と文化 11 年（1814）にはオノマトペ俳句の割合が底上げされていることが分かる（4.2%→7.9%、6.7%→11.4%）。また文政 3 年（1820）にはオノマトペ俳句の割合がぐっと下がり、それ以降 7%台を前後しているが、一茶の没する文政 10 年の前 3 年の間はまた 8%～14%に盛り返していることも確認できる。

ではなぜこのような変化が生じたのであろうか。筆者はこれを、一茶自身の私生活と密接に関係しているのではないかと考える。実は文化 5 年（1808）は亡父の遺産分配で揉めていた異母弟・仙六との間にある程度の折り合いがついた時期、文化 11 年（1814）は一茶が初めて妻を娶った時期なのである。

一茶は享和元年（1801）に父を亡くしているが、それ以来遺産相続の件で仙六と揉め続けていた。一茶は江戸に奉公に出されてから俳諧を覚え、この時期には既に弟子に指導を施す立場にあったが生活は常に困窮しており、苦しくなると裕福な弟

子の家を訪れるなどして生計を立てていたという。そのような一茶にとって弟との和解に向けた合意は、肩の荷が下りるような出来事であったはずである。

一茶の俳句は文化前期に個性的な、「いわゆる一茶調の原型となるものがほぼ出揃ってくる」(丸山 1990:381)と言われているが、文化 5 年(1808)にようやく肩の荷が下りた、その安堵の息吹が作句にも影響を及ぼし、軽みのあるオノマトペ俳句の頻出につながったのではないだろうか。

更に一茶は文化 10 年(1813)に仙六と最終的な和解に達して帰郷し、翌年には 52 歳という年に生涯で初めて妻(しかも 28 歳という若妻)を娶って、これまで以上に旺盛な作句活動を繰り広げている。そしてこの時期の一茶の心身ともに安定した状態が俳句の円熟に結びつき、一茶調の一大特徴であるオノマトペ俳句が最高潮の時期を迎えたのではないかと考えられる。

しかし彼の結婚生活は必ずしも順調なばかりではなかった。最初の妻きくとの間にもうけた長男千太郎は文化 13 年(1816)生後 1 ヶ月足らずで夭逝し、二人目の子であり一茶最愛の娘であった長女さとも、文政 2 年(1819)に生後わずか一年でその生涯を終えてしまう。更に同年きくが次男石太郎を授かるが翌年には亡くなり、その後すぐに自らも脳卒中で半身不随となるという不幸が重なってしまう。この不遇な境遇により文政 3 年(1820)以降一茶のオノマトペ俳句はすっかり影を潜めてしまっている。

文政 6 年(1823)には 10 数年連れ添ったきくが亡くなり、翌年 2 度目の結婚に至るが約 2 ヶ月で離婚。文政 8 年(1825)の 3 度目の結婚を機に再びオノマトペ俳句の割合が増えたところを見ると、一茶の心がまたここで落ち着いたということになるのではないか。

笑いやユーモアというのは、人の心が落ち着き、安定して、余裕が生まれた時に生み出されるものであろう。特に継母との軋轢から追われるように江戸に出て以来苦しい生活を続けていた一茶にとって、弟との和解の合意や自らの結婚は精神面での

支えを得るきっかけになったと考えられる。一茶調と呼ばれる俗語やオノマトペを自由に操って生み出されるユーモア溢れる俳句の数々は、一茶の心の軽さと比例して増減したのではないだろうか。

## 3.2 一茶の俳句におけるオノマトペに関する考察

近世三大俳人の俳句におけるオノマトペ出度率は、道本(1977)の調査によると芭蕉が 83.25、蕪村が 100.00 であるのに比べ、一茶は 13.39 と「実に十三～四句に一例は用ゐられてゐる」(同:55)点で他の二人に比べて群を抜いて高い。本稿の調査においても総俳句数の約 7.7%、つまり道本の調査結果とほぼ同じ割合で出現していることから、やはり数量的に際立っている点が確認できた。

ただしこの割合は常に一定であった訳ではなく、一茶の人生の転機となる年と呼応するように徐々に変化していったという点は前節で明らかになったことである。

ところで一茶はこの多大な数のオノマトペをどのように駆使し、効果的に用いていたのであろうか。本節では一茶の俳句に現れるオノマトペを第 2 章で検討した諸先行研究を参考に、A. 音韻的側面、B. 形態的側面、C. 統語的側面、D. 意味的側面の四つの観点に分けて観察し、一茶俳句におけるオノマトペについて多角的・総合的な視点から考察していくことにする。

### 3.2.1 音韻的考察

#### 3.2.1.1 清濁交替

オノマトペの音韻交替の代表例としては清濁交替が挙げられるが、角岡(2007:91)は「有声化」を「素性的オノマトペ標識」と定め、これもオノマトペ語彙を他の一般語彙との差異を際立たせる特徴の一つであるとしている。

一茶の俳句にはこの清濁(半濁)のペアが 38 例見られるが、ここでは反復などのいわゆるオノマトペ標識を除いた語基型で記すことにする。これは、語彙によっては必ずしも形態的に対応するペアがあるわけではないからである[9]。

(4) かさ～がさ　かた～がた　から～がら　かり～がり　く～ぐ　くす～ぐす　くる～ぐる　くゎら～ぐゎら　けそ～げそ　けら～げら　こて～ごて　ころ～ごろ　さく～ざく　さ～ざ　しく～じく　すい～ずい　そ～ぞ　そろ～ぞろ　たら～だら　ちょぽ～ちょぼ　てく～でく　とか～どか　とろ～どろ　とぷ～(どぷ)[10]　とん～どん　はた～ぱた～ばた　はら～ぱら～ばら　ふく～ぶく　ぷつ～ぶつ　ふら～ぶら　へた～べた　ぺちゃ～べちゃ　へら～べら　ぺん～べん　ほく～ぽく～ぼく　ぽた～ぼた　ほつ～ぽつ～ぼつ　ほろ～ぼろ

上記に挙げたペアには両語の間に共通する意味を有していないもの、例えば相手にへつらって笑う様子を表す「へらへら」と、止まることなくしゃべる様子を表す「べらべら」のようなペアも存在する。これらは濁音になることで重い、暗いなどのニュア

9 例えば「かさ～がさ」ペアの場合、一茶の俳句には「かさりかさり」という形は現れるが「がさりがさり」の形はなく、「がさがさ」「がさり」という形態しか見られない。よってここでは形態的な対応関係にはこだわらず、語基の形で表示することにした。

10 「とっぷり」と対になる「どっぷり」は一茶の俳句には現れないが、ここではペアとなる形式を提示するため括弧書きで掲載した。以降オノマトペのペアにおいて括弧書きで表したものは、これに準じるものとする。

ンスが加味されているわけではないので、角岡の述べる有声化とは別の物だと考えるべきだろう。このようなペアについての考察はここでは取り扱わず、今後の課題とする。

では以下で有声化の例をいくつか取り上げ、検討してみることにする。

(5) a. 能因が雨もはらはら蛙哉 （文化 6 年）

b. 夕立は是切とぱらりぱらり哉 （文化 11 年）

c. 朝ぐせのばらばら雨や桐一葉 （文化 3 年）

語基「はら」から派生したオノマトペ「はらはら」は、今回の調査において 37 例出現し、一茶の俳句において最も使用例数の多い語彙である。中でも雨の降る様子[11]を形容する例が 7 例[12]と最も多く、「はらはら」と聞いて我々が容易に想像する桜の散る様子や雪の降る様子（各 5 例）を上回っている点は興味深い。

またこの「はら」に対応する「ぱら」「ばら」にも雨の降る様子を形容する句がある。(5)b、c の句はその例を示したものだが、これらはいずれも雨の降る様子をあるがままに描写しており、清音は静かに降る様子、半濁音は小ぶりになってきた様子、濁音は勢いよく降る様子を示した一般的な用法であると言えよう[13]。

---

11 小野正弘編『日本語オノマトペ辞典』(2007:347)によると「雨がはらはら(と)降る」は非文となっている。

12 「はらはら」が雨の降る様子を形容する俳句 7 例は以下の通りである。
山焼くや眉にはらはら夜の雨（文化 2）、能因が雨もはらはら蛙哉（文化 4）、雨はらはら荒鵜の親よ朶に鳴（享和 2）、古草のはらはら雨やなく蛙（遺稿）、夕陰のはらはら雨に団扇哉（文化 2）、夕顔やはらはら雨も福の神（文化 5）、はらはらと誰が出代のなみだ雨（文政 2）

13 阿刀田稔子・星野和子編『擬音語擬態語使い方辞典（第二版）』(1995:vii)によると、清音は「弱い・小さい・早い・軽い・滑らか・柔らかい・快い」などの意味を持つのに対し、濁音は「強い・大きい・鈍い・重い・荒い・堅い・不快」などの意味を持ち、半濁音は清音と類似した意味を持つが「鋭さ・弾力・愛らしさ」なども表現する点で清音とは異なる。

(6) a. 一村はかたりともせぬ日永哉（文化 6 年）

b. がたりともせぬや日永の御世の町 （文政 8 年）

上の二句はいずれも春の日永の静けさを表現しているが、aは「村」、bは「町」の風景であるところが異なっている。そして閑散とした「村」の静けさは「かたりともせぬ」と表されているが、しっかりとした造りの家が立ち並ぶ「御世の町」の静けさは「がたりともせぬ」と表現されている。同じ状況を表す場合でも、その句に据えられた名詞に合わせて清濁交替がなされているということである。

(7) a. 乙鳥やぺちやくちやしやべるもん日哉 （文政 9 年）

b. 乙鳥や小屋の博奕をべちやくちやと （文化 9 年）

上の二句はいずれも乙鳥が鳴く様子をおしゃべりに見立てて擬人化した句であるが、a の句は小屋でこっそり博打をうっている様子を見てツバメが騒ぎ立てている、いまいましい奴め、という心情が「べちゃくちゃ」という語に表れている。一方、b の句はもん日（祝いや祭りが行われる特別な日。遊里で定めた特別な日のことも指す）の明るい様子に合わせ「ぺちゃくちゃ」という半濁音の明るい音で表現されている。

つまりツバメの鳴き声は常に変わらないにも関わらず、それを聞く側の心理に合わせて音韻交替という形で書き分けているのである。

これらの例から、一茶は句に詠もうとする風景やそれに伴う心理的側面をより細かに表現するために、オノマトペの清濁を交替させて用いていたことが分かるであろう。現代歌人の佐佐木幸綱は「短歌も俳句も、どういう名詞に興味をもってこの句が出来ているか、この歌が出来ているかというのは、かなり大事なことになってくる[14]」と述

[14] 第 48 回現代俳句全国大会（2011）記念公演「短歌と俳句」より
（http://www.gendaihaiku.gr.jp/session/zenkoku/48/speech.html）

べているが、一茶も俳句の核となる名詞に合わせてオノマトペを変化させていたということになる。

オノマトペは基本的に副詞であり動詞との関連性から論じられることが多いが、一茶の俳句においては名詞との関係によってオノマトペが変化している、という点は興味深い。

#### 3.2.1.2 母音・子音交替

一茶のオノマトペには母音や子音を交替させて微妙なニュアンスの変化を生み出す手法も見られる。まず母音交替については以下の 10 例が挙げられる。

(8) いさくさ～いざこざ　がっかり～がっくり　(がやがや)～ごやごや　ぱかり～ぱくり　ぱっかり～ぱっくり　はらはら～へらへら　へらへら～へろへろ　はらり～ほろり　ほちほち～ほつほつ　ぽちぽち～ぽつぽつ

ここでは、普段あまり聞きなれないオノマトペである「ごやごや」について取り上げ考察することにする。

(9) 雁ごやごやおれが噂を致す哉　(株番)

ここでは雁が集まって「がやがや」騒いでいる様子を「ごやごや」と表現している。この場面で敢えて「ごやごや」という語彙を用いた理由は何であろうか。

筆者はこれを「噂」という名詞との関わりにあるのではないかと考える。「噂」は当事者には聞かれてはならない秘密めいた話である。「こそこそ」隠れて「ごにょごにょ」言うような雰囲気を出すためには「がやがや」ではあまりにも騒々しく、あけっぴろげな感じがする。そこで「ごやごや」という語を使用し、雁の騒がしさと噂の秘密めいた

様子とを結びつけたのではないだろうか。母音/a/の「目立つ」印象と/o/の「目立たない」印象[15]という対照的な特徴を上手く生かした表現となっていると考えられる。

一方で子音交替の例としては以下の 4 例が挙げられる。

(10) うらうら[16]～ゆらゆら　くいくい～すいすい　げたげた～げらげら　ゆさゆさ～ゆらゆら

先ほど母音交替の例として「いさくさ～いざこざ」[17]を挙げたが、両語間の実質的な意味にはそれほど変わりがない。子音交替の「うらうら～ゆらゆら」も意味の相違がそれほど感じられず、しかも現代語において「いさくさ」「うらうら」があまり使われていないことから、発音する上で言いやすいように音が変化したものであろうと考えられる。これはあくまでも推測であり、詳しい考察については今後に譲ることにするが、これに対してオノマトペの子音を意図的に交替させて用いていると考えられるのが次の例である。

(11) a. 負角力むりにげたげた笑けり（文政 4 年）

b. 投られて起てげらげら角力哉（文政 4 年）

上の 2 句はいずれも村相撲で投げられ負けた相撲取りの様子を描いている。ここに挙げた「げたげた」も「げらげら」も品のない笑い方であることには変わりはないが、「げらげら」の方が明るい印象を持つ。浜野（2014：40）によると CVCV タイプの語基における第二子音の/t/音には「叩く、接触、密着、合致」などの意味があるのに対

15 浜野（2014：46）では母音の意味分析を行っている。これによると母音は、i：線上、細さ、高音、緊張、e：野卑、a：広い、平ら、広範囲、目立つ、o：目立たない、u：突き出る、という意味を持つとされている。

16 本稿ではゼロ子音(/ ’/)を想定し、「うらうら」を/’ura’ura/～/jurajura/の交替とする。

17 このペアは母音交替だけでなく第二・第四子音の有声化現象も伴っている。

し、/r/には「流れるような運動」という意味がある。つまり「げたげた」には粘着質なこびたイメージがあり、直前の「むりに」という言葉とも相まって、卑屈な雰囲気が更に強調されているのに対し、「げらげら」の方にはさらっとした明るい感じが生じるのである。

これらのことから、一茶はその句で表そうとする事柄の心理的な描写や細かいニュアンスを、オノマトペの母音・子音交替をもって表現していたことが分かる。そのため時に一般的でないオノマトペが現れる場合もあるが、これも句の世界をより細やかに描こうとしたためであると言えるだろう。

#### 3.2.1.3 拗音化

角岡(2007)の唱えた「素性的オノマトペ」には「有声化」の他に「硬口蓋化」「摩擦音/破擦音交替」も挙げられているが、本稿では前述の通り「硬口蓋化」を「拗音化」、「摩擦音/破擦音交替」を「摩擦音～破擦(裂)音交替」として扱うことにしている。そして一茶の俳句においては拗音化の例としてヤ行拗音化が 4 例、ワ行拗音化が 5 例挙げられる。

(12) (がくり)～ぐゎくり　からから～きゃらきゃら/くゎらくゎら　がらり～ぐゎらり
がらがら～ぐゎらぐゎら　かんかん～くゎんくゎん　とんちん～どんちゃん
のろり～にょろり　ほちほち～ほちゃほちゃ

拗音化オノマトペ標識は「表現している音や様態が軽い、あるいは当事者の神経に障るというような語感を与える」(角岡 2007:98)が、まずヤ行拗音化の例として、鳴り物などを鳴らしてにぎやかに遊び騒ぐ様子を表す擬音語「とんちん～どんちゃん」のペアについて見てみる。

(13) a. 夕雲雀寺のとんちん始りぬ （文政 1 年）

b. 夕雲雀寺はどんちゃん始りぬ （発句集続篇）

これらは第一子音に清濁交替も見られるが、b の句の方がより広範囲にまで広がる騒がしい音を表すように感じられる。これは「とんちん」が一定の型（t－n）の中で母音のみが交代した、ある程度まとまった音の重なりを表しているのに対し、「どんちゃん」は「どん」という濁音の表す低音に「ちゃん」という拗音の軽い音が重ねられ、表される音に広がりが生まれるからだと考えられる。

(14) a. ほちほちと雪にくるまる在所かな （文政 9 年）

b. ほちゃほちゃと雪にくるまる在所かな （発句集続篇）

この二句はオノマトペの部分以外は全て一致している。『岩波古語辞典』には「ほたほた」という語が掲載されており、「①柔らかでやや重いものが引き続いて落ちるさま。またその音。②うれしそうなさま。また、愛想のよいさま。」を意味している。よって（14）の句における「ほちほち」「ほちゃほちゃ」も雪の降る様子を表す「ほたほた」から派生した語であると想定することができる。つまり「ほちほち」は「ほたほた」よりも更に小さな雪の粒が点々と降って積もる様子、「ほちゃほちゃ」はその雪の降る様子が軽く、まばらである様子がイメージできるのである。

しかし「ほちゃほちゃ」は『日本語オノマトペ辞典』によると「①顔や体つきがふくよかで愛らしいさま。②愛想のよいさま。仲良くするさま。③しつこく催促するさま。④悦にいるさま」という意味があり、ここから（14）においては a の句が村全体を雪にすっぽり覆われた静かな情景を表すのに対し、b の句は男女が情を交わすようなしっとりした状況を匂わせていることが分かる。

これは音韻的に似た形態を持つ二つのオノマトペを全く同じ枠にはめ込んでも、

違う印象を与えることが出来るという例であると考えられる。そしてここから一茶の言葉を操る巧みな手腕、遊び心までもが見えてくるようである。

次にワ行拗音化だが、これには「が～ぐゎ」交替の例が多く見られる。

(15) a. 鈴がらがら虫も願いのあればこそ （文化 9 年）

b. はつ雪やぐゎらぐゎらさはぐ腹の虫 （文化 8 年）

上記二句はどちらも「虫」の音としてオノマトペが使用されているが、aの句は鈴虫の羽音、bの句は腹の虫の鳴る音である。aの鈴虫の声は一般的に「リーンリーン」と表されるが、ここでは神社の鈴の「がらがら」という音にかけて「願いがあるからこそ鳴くのだろう」と詠んでいる。一般的な表現ではないが、「鈴」というキーワードを中心にした面白みのある句ができていると言えよう。

これに対しbの句の腹の虫は普通「ぐーぐー」鳴るはずだが、ここでは「ぐゎらぐゎら」とより騒がしい音を立てている。これはお腹が「カラ」であるという状態にかかっているとも考えられるが、ワ行拗音の「ぐゎ」は「がらがら」よりも音がくぐもった印象を与え、腹の中で響く音としてより的確な表現になっていると考えられる。同じ拗音化であってもヤ行とワ行では音の響きが違うため、表現するニュアンスも変わってくると言えよう。

#### 3.2.1.4 摩擦音～破擦（裂）音交替

「摩擦音～破擦（裂）音交替」とは子音/s/と/c/（或いは/t/）とが交替する現象を言うが、摩擦音が破擦（裂）音化したのか、或いはその逆であるのかについてはここでは取り上げず、「摩擦音～破擦（裂）音交替」としておく。この例としては以下の 8 例が挙げられる。

(16) ごしゃごしゃ～ごちゃごちゃ　がさり～がたり　しくしく～(ちくちく)　しくりしくり～(ちくりちくり)　しょぼしょぼ～ちょぼちょぼ　しょんぼり～ちょんぼり　すいすい～ついつい　むしゃくしゃ～むちゃくちゃ

ここでは「ごしゃごしゃ～ごちゃごちゃ」の例を手がかりに、摩擦音～破擦(裂)音交替による意味の違いを観察してみることにする。

(17) a. ごしゃごしゃと鹿の親子が寝顔哉　(文化 11 年)

b. ごちゃごちゃと鹿の親子が寝顔哉　(句稿消息)

『日本語オノマトペ辞典』によると「ごしゃごしゃ」は「①ものを乱雑にかきまぜたり、丸めたりする音。またそのさま。②ものがひどく入り乱れているさま。③不平や言い訳などをあれこれ言うさま。ごちゃごちゃ。」、「ごちゃごちゃ」は「①多様なものが雑然と集まっているさま。②入りまじるさま。混乱したさま。区別がつかないさま。③乱雑でうるさくて気にさわるさま。」とあり、二つの語の意味が非常に近似していることが確認できる。特に「ごしゃごしゃ」の意味③には「ごちゃごちゃ」と表記されており、二つの言葉の使い分けが難しいことを示している。

しかし摩擦音/s/と破擦音/c/の発声方法から考えてみると、/c/は破裂音の要素があるため空気を出す直前に溜める(＝力が入る)のに対して、/s/は摩擦音のため、息の出口が狭まった間からそっと吐き出されるという違いがある。この違いにより、「ごちゃごちゃ」の方が「ごしゃごしゃ」よりも更に雑然とした印象を与えるのではないかと考えられる。「ごちゃごちゃ」「ごしゃごしゃ」とも語基の第一子音「ご」が濁音であり、かつ第二子音が拗音化しているため雑多なイメージを有してはいるが、a の句の方が「寝顔」と呼応したやや抑えた表現になっているのではないだろうか。また上五句から中七句にかけて「ごしゃごしゃとしかの」というように/s/音を並べ、語調を整え

るという効果も担っていると考えられる。

### 3.2.2 形態的考察

#### 3.2.2.1 一茶俳句におけるオノマトペの形態的特徴

一茶の俳句に現れるオノマトペはその数の多さもさることながら、形態的にも非常に多様である点が特徴的である。ここでまず山口(2002)のオノマトペ形態分類をもとに一茶俳句に現われるオノマトペの形態と各々の例数を整理してみることにする。

山口(2002:33～39)は『日本古典文学大系』(岩波書店)を用いて奈良時代から江戸時代に至るまでの各時代の代表的な作品を対象にオノマトペの調査を行い、時代の変遷に注目しつつ形態別にまとめている。ただし山口では「くるりくるりくるくるくるり」「どたくたぐわったりばったり」のような特殊な形を基本形や派生形に分解して集計しているが、本稿ではこのような複合的な形式のオノマトペを分解せずそのままの形で収集し集計している。

そしてこの結果をまとめたのが下記の＜表 3＞である。この表から、一茶の俳句においていかに多様な形態のオノマトペが現れているかが一目瞭然となるであろう。

＜表 3＞[18]

| 形態 | 異なり語数（語） | 形態 | 異なり語数（語） | 形態 | 異なり語数（語） |
|---|---|---|---|---|---|
| A | 4 | ABA'B | 5 | AイAイAイAイ | 1 |
| A— | 3 | ABA'BCDCD | 1 | Aッ | 24 |
| AA | 5 | ABABCDリ | 1 | AッA | 6 |
| A—A— | 3 | ABABCDリン | 1 | AッA' | 1 |
| AAAA | 1 | ABACDB | 1 | AッAッ | 2 |
| A—ABC— | 1 | ABCA—BC | 1 | AッB | 3 |
| A—BA—B | 6 | ABCABC | 2 | AッBAB | 1 |
| A—BAB | 2 | ABCB | 21 | AッBAッB | 2 |
| A—BABAB | 2 | ABCBABCB | 1 | AッB— | 1 |
| A—BABABAB | 1 | ABCBDB | 1 | AッB—AッB— | 1 |
| A—Bリ | 1 | ABC— | 1 | AッBC— | 2 |
| A—BリA—Bリ | 1 | ABCD | 2 | AッBCDッB | 1 |
| A—BリABリ | 1 | ABCDAB | 1 | AッBラ＋接尾辞 | 1 |
| AAッB | 1 | ABッCABッC | 1 | AッBリ | 43 |
| AAッB— | 1 | ABラABラ | 1 | AッBリ＋接尾辞 | 1 |
| AAッB—AAッB— | 1 | ABリ | 50 | AッBリABリ | 4 |
| AAラ | 1 | ABリ＋接尾辞 | 1 | AッBリAッBリ | 1 |
| AAラBAラ | 1 | ABリA—Bリ | 1 | Aン | 3 |
| AAリ | 1 | ABリABAB | 1 | AンA | 3 |
| A—ンA—ン | 1 | ABリABリ | 42 | AンA' | 1 |
| AB | 41 | ABリABリABリ | 1 | AンAン | 3 |
| AB＋接尾辞 | 3 | ABリCBリ | 5 | AンB | 1 |
| ABAB | 190 | ABリン | 1 | AンBAンB | 1 |
| ABAB＋接尾辞 | 2 | ABロCBロ | 1 | AンBリ | 6 |
| ABABA—B | 1 | ABン | 1 | AンBリABリ | 1 |
| ABABA—BA—B | 1 | ABンABン | 1 | 接頭辞＋AA | 1 |
| ABABAB | 3 | Aイ | 6 | 接頭辞＋AAン | 1 |
| ABABABAB | 2 | AイAイ | 4 | 接頭辞＋AB | 1 |
| ABABABリ | 1 | AイAイAイ | 1 | 接頭辞＋Aン×2 | 2 |
| | | | | 特殊型 | 3 |

＜表 3＞を見ると、全 561 語のうち ABAB 型が 190 語（約 33.8%）と群を抜いて多く、次いで AB リ型の 50 語（約 8.9%）、A ッ B リ型の 43 語（約 7.6%）が続く。更に AB リ型の反復した形である AB リ AB リ型が 42 語（約 7.4%）、語基だけの形である AB 型が 41 語（約 7.3%）出現している。

18 ＜表 3＞における「特殊型」とは、聞きなしによる特殊な形式のオノマトペ「のりつけおほんおほん」「のりつけほほん」「のりつけほほんほほん」の 3 つである。

ここで、一茶俳句に頻出するオノマトペの形態上位5位までと、角岡(2007:71)の辞書の見出し語調査[19]におけるそれとを＜表 4＞にて比較してみたい。

＜表 4＞

| | 一位 | 二位 | 三位 | 四位 | 五位 |
|---|---|---|---|---|---|
| 一茶調査（本稿） | **ABAB 型**（190 語、約 33.8%） | **AB リ型**（50 語、約 8.9%） | **A ッ B リ型**（43 語、約 7.6%） | **AB リ AB リ型**（42 語、約 7.4%） | **AB 型**（41 語、約 7.3%） |
| 辞書調査（角岡） | **完全反復型**（696 語、約 42.1%） | **「ッ」接辞型**（274 語、約 16.5%） | **「リ」接辞型**（141 語、約 8.5%） | **リ延長強勢擬容語**（133 語、約 8.0%） | **「ン」接辞型**（127 語、約 7.6%） |

これを見ると両者とも完全反復型、すなわち ABAB 型が圧倒的に多い点で共通しており、ABAB 型が日本語オノマトペの最も基本的な形態であることが確認できる。

その一方で、一茶の俳句において語基型が上位に入っている点は注目すべき特徴だと言える。一般的に「オノマトペは語基だけで語彙として用いられることは稀」(田守 2008:42)であり、角岡の調査でも語基型オノマトペは A 型、AB 型含めて 19 語(1%強)しか見られない。しかし一茶の俳句においては AB 型のみで 41 語、A 型まで含めると 45 語(約 8.0%)と出現率の高い形態であることが認められる。

また一茶の俳句においては、「リ」の接辞するオノマトペが上位5パターン中3パターン(AB リ型、A ッ B リ型、AB リ AB リ型)、異なり語数にして合計 135 語(約 24%)あり、ABAB 型に次いで高い割合を占めている。これは角岡の調査において、「リ」接辞型とリ延長強勢擬容語[20]を合わせても ABAB 型の半分にも満たない点から見て

---

19 角岡は Kakehi et al.(1996)*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese* において見出し形となっているオノマトペ 1634 語に対して独自に加筆を行い 1652 語をデータベース化した。

20 角岡は「ぐい」のような A イ型(14 語)もリ接辞型に含めており、また「A ン B リ」型と「A ッ B リ」型を含めてリ延長強勢擬容語としている。一茶の俳句においてこれと同じ基準を適応

も、特徴的であると言えるだろう。

ところで角岡の調査で二位を占めていた「ッ」接辞型は、一茶の俳句においては 24 語しか現れず、しかもそのいずれもが「A ッ」という形で一モーラ語基オノマトペにのみ接続している。この理由については山口(2002:39)が指摘しているように、「Aッ」型オノマトペが鎌倉・室町時代には既に使用されていたのに対し、「ABッ」型は明治時代以降に現われた新しい形であり、一茶の生きた時代にはまだ使われていなかったためであると考えられる。

では「AB ッ」型が生まれるまでは 2 モーラ語基において「急激・唐突な終わり」は表現されなかったのであろうか。棘にふれた瞬間に感じる「チクッ」という感覚は昔も今も変わらないはずであり、また「A ッ」型が鎌倉・室町時代から既に存在していることを考えると、「AB ッ」という形も出来上がっていても不思議ではないと考えられる。それにも関わらず「AB ッ」型が近世以降の形態であり、一茶の俳句にも一つも認められないという点は興味深いところである。「リ」や「ン」という言葉がこれらの感覚までカバーしていたのか、或いは語基型オノマトペがそのような意味を担っていたのか、この点は更に考察すべきところであり今後の課題としたい。

#### 3.2.2.2 リ接辞型

一茶のオノマトペ俳句においては、AB リ型とその派生形オノマトペが ABAB 型オノマトペに次いで多く、この点がオノマトペ辞書に掲載されている見出し語オノマトペの場合と異なっているということを前項で確認した。そこでまずこの「リ」の効果について検討してみることにする。

---

すると、「リ」の接辞する形は 147 語(約 26.2%)となる。

(18) a. からからと下駄をならして桜哉 （文化 8 年）

b.下駄からりからり夜永のやつら哉（文化 10 年）

下駄を鳴らす音として「からから」「からりからり」という二つの表現が用いられている。「からから」からは桜を見ようと足早に「下駄を鳴らして」歩く音が想像できるのに対し、それよりも遅くゆっくりとした足音が「からりからり」と表現されていると考えられる。ただこの「リ」は実際の音としてそう聞こえるわけではなく、その動作が完了しているという状態、ある程度音が響いているという語感を表現[21]しているだけであり、この点で実際の物理的音響と関連している語末のオノマトペ標識「ン」とは違う働きをしていると言える。よって「からんからん」であれば音の響きの大きい、大股の勇ましい歩き方が想像できるが、「からりからり」にはそのような力強さは感じられず、ただ音の響きだけが余韻として残るイメージがある。よって一茶の俳句に「リ」接辞型オノマトペが多用されたのも、この余韻という効果を狙ったためではないかと考えられる。

またｂの句では「夜永」という秋の季語と呼応させて用いられることで、秋の夜長を楽しむゆっくりとした歩みと、「からり」とした夜の空気までもがイメージできる。「リ」を据えたことでオノマトペに重層的な広がりが生じた例だと言えるであろう。

#### 3.2.2.3 促音「ッ」・撥音「ン」・長音「ー」

「促音（ッ）」「撥音（ン）」「長音（ー）」は先行研究（田守など）で明らかにされているように、オノマトペの語末に接続してそれぞれ「瞬時性、スピード感、急な終わり方」、「共鳴」、「強調」の意味を表すとされる。一茶の俳句においてオノマトペの語末に接続する「促音（ッ）」「撥音（ン）」「長音（ー）」には以下の例が見られる。

---

21 角岡（2007：88）「語源的に、『り』が古語の完了助動詞『けり』から派生したという議論があるので、『完了』という含意にはその語源が反映されている可能性もあろう。」

(19)《促音》きっ　きゃっ　ぎょっ　くっ　ぐっ　くわっ　さっ　ざっ　じっ　ずっ　そっ　ぞっ　ちっ　ちょっ　つっ　どっ　にょっ　ぬっ　はっ　ぱっ　ふっ　ほっ　ぽっ　むっ

《撥音》えへんえへん　きょん　こんこん　すぽん　ずん　ずんずん　ちょん　ちょんちょん　ちんちんころりん　にゃんにゃん　のほほん　ぶらりん　ぽかんぽかん

《長音》かっこー　かっこーかっこー　ごーごー　しゃーしゃー　そー　ててっぽー　ててっぽーててっぽー　どー　はっくしょう　ぴーぴー　ほー　ほけきょー　ほっけきょー　ほーほけきょー

(19)において語末に長音が接続したオノマトペは、そのほとんどが音や声を表すが、促音が後続したオノマトペには擬態語の方が多く、特に「ぎょっ、ぞっ、はっ、ほっ、むっ」のような擬情語と呼ばれる語彙が含まれる点が特徴的である。また同じ語基「そ」を持つ語でも「そっ」「そー」という派生形は存在するが「*そん」という語はないなど、三者が完全に対応関係にあるわけではないことも確認できる。

ここで語末に促音・撥音が接続する場合の意味的相違について考察しておく。

(20) a. はつ蝉や馬のつむりにちよつと鳴　（文化 11 年）

b. 菜の花にちよんと蛙の居りけり　（文化 12 年）

a の「ちょっ」は現在では助詞「と」を含めて程度副詞「ちょっと」と捉えられることが多い。しかし「かざり餅仏の膝をちよとかりる（文政 4 年）」に現れる 1 モーラ語基型オノマトペ「ちょ」から派生した形であることは、共通した意味を有することからも容易に推測できる。

ただし「ちょっ」の方が「ちょ」よりもその程度がごくわずかで、瞬間的であるという意

味がより明確になると考えられる。よって a の句は「ちょっ」というオノマトペの効果により、蝉が馬の頭に止まって短く鳴き、その後すぐにまた飛び立つであろうというところまで想像することができる。

他方 b の「ちょん」には、一定時間留まるニュアンスが感じられる。浜野(2014:53)は「ン」が CV タイプのオノマトペに後続する場合、「音や運動が余韻ないしは反動、跳ね返りを伴うこと」を意味するとしているが、この句における「ちょん」には反動の意味は感じられない。むしろ角岡(2007:80)の提示する「相対的に動作・様態が相対的に長い、あるいは持続している」という意味で捉えた方がよさそうだが、「ン」には「共鳴」という意味もあり、語基によって「ン」の示す意味合いは変わると考えられる。

一方で「促音」「撥音」「長音」の接中辞としての用法には以下の例が挙げられる。

(21)《促音》あさり～あっさり (*がかり[22])～がっかり (*きかり)～きっかり (ぎくり)～ぎっくり (△ぎしり)～ぎっしり (きちきち)～きっちきっち (*きぱり)～きっぱり (*くく)～くっく (*ぐく)～ぐっく (ぐぐ)～ぐっぐ (*げくり)～げっくり げそり～げっそり (*こきり)～こっきり こそり～こっそり ざくり～ざっくり (*さぱり)～さっぱり ざぶり～ざっぷり (*しくり)～しっくり (*すかり)～すっかり すくり～すっくり (*ずくり)～ずっくり (すぱり)～すっぱり ずぶ～ずっぷり (*たぷり)～たっぷり ちょぽちょぽ～ちょっぽり てくてく～てっくてっく どさり～どっさり (どしり)～どっしり (*とぷり)～とっぷり にこにこ～にっこにこ (*ぬぽり)～ぬっぽり (*のぺり)～のっぺり ぱかり～ぱっかり ぱくり～ぱっくり ばたり～ばったり ぱたり～ぱったり (ぽくり)～ぽっくり (むくり)～むっくり

[22] ＊印はこのような表現がない、△印は表現としてはあるが、対応する語とは別の意味であるという意味である。

《撥音》(*さざ)～さんざ　(ざざ)～ざんざ　(ざぶり)～ざんぶり　(*ずぐり)～ずんぐり　ちょぼちょぼ～ちょんぼり　なむなむ～なんむなんむ

《長音》くゎらくゎら～くゎーらくゎーら　さらさら～さーらさら　しんしん～しんしんしーん　(じりじり)～じーりじーり　ずんずん～ずーんずーん　ちびちび～ちーびちーび　ついつい～つーいつーい　(どんどん)～どーんどーん　ひやり～ひーやり　(ひそひそ)～ひーそひそ　ひよろ～ひーよろ　ふわりふわり～ふーわりふわり　(みんみんみん)～みんみんみーん

この中で特に注目したいのは、「ざぶり」というオノマトペに「ざっぷり」「ざんぶり」という二通りの派生形が現われていることである。これらの語は語基「ざぶ」に「リ」を接続した「ざぶり」から派生しており、撥音を挿入した場合は「ざんぶり」となるが、促音を挿入した場合は「ざっぶり」の発音が難しいため「ざっぷり」と半濁音に変化したと考えられる。そしてこのような促音型と撥音型という二つの派生形が見られるのは「ざっぷり～ざんぶり」「ちょっぽり～ちょんぼり」の二つだけである。

(22) a. 一文がざぶり浴るや寒の水　(文政 4 年)

b. ざんぶりと一雨浴て蝉の声　(文化 12 年)

c. 竹の雨ざつぷり浴て猫の恋　(文化 14 年)

これらの句はいずれもオノマトペ表現が「浴びる」という動詞にかかる構造になっているが、a の「ざぶり」は寒の水(寒中の水はその冷たさから神秘的な力を持つと信じられていた)をたらい等に汲んで一度に多量に浴びた音(さま)を示している。これに対してbの「ざんぶり」は一雨という「ざぶり」より更に大量の水を浴びた状況を表すが、どこかゆったりとした響きがある。またcの「ざっぷり」はb同様雨という大量の水を

浴びてはいるが、ざんぶりのようなゆったりした響きは弱まり、逆に勢いの方に焦点が当たっているように感じる。

つまり「ざんぶり」「ざっぷり」は接中辞「ン」「ッ」の挿入により、「ざぶり」よりも更に量が多いという強調の意味を持ちつつ、ニュアンスの点で微妙な差があるのである。

同様に「ちょっぽり～ちょんぼり」についても見てみる。

(23) a. 大天狗の鼻からちよつぽりかたつむり（文政 7 年）

b. ちょんぼりと不二の小脇の柳かな （文化 11 年）

この二つはどちらも大きな景色（大天狗の鼻、不二）にくっついて見える小さなもの（かたつむり、柳）との対比を描いた句であるが、かたつむりが大天狗の鼻から顔を出す様子は「ちょっぽり」と表されているのに対し、柳は「ちょんぼり」と富士の景色に寄り添っている。大天狗の像（或いは面か）の鼻からひょっこり顔を出すかたつむりの様子はより小さな感覚を表す「ッ」で、富士の小脇に見える柳はそのゆったりとした動きに合わせて「ちょんぼり」と表現されていると言えよう。

接中辞に関しては浜野（2014:54）が CVCV タイプの語基において $C_2$ つまり第二子音が無声阻害音（破裂音・破擦音・摩擦音）の場合には促音、$C_2$ が有声阻害音、鼻音または接近音の場合は撥音となると述べている。ただ意味についてはいずれも「運動に強い力が加わっていること」「状況が著しい」と述べているだけで、両者の意味的な違いについては特に言及されていない。

しかし上記（22）（23）の例を観察した結果、そこには音声的制約を受けた単なる音韻上の違いだけではない、微妙な意味的差異が感じられる。よって「ッ」と「ン」は接中辞として働く時も語末に接続する時と同様に何らかの、つまり強調以上の細かな意味的ニュアンスの違いを示しうるのではないかと考えられるのである。

#### 3.2.2.4 反復型

既に触れたが、オノマトペ語彙のうち最も代表的な形と言えるのが完全反復型、つまりABABという形を取る語形である。一茶のオノマトペ俳句でも例に漏れずこのABAB型が最も多く190語出現する。

(24)いそいそ うかうか うきうき うじうじ うすうす うそうそ うらうら うろうろ うんうん おろおろ がさがさ かたかた かちかち がつがつ がやがや からから がらがら がりがり かんかん きたきた きゃらきゃら きょろきょろ きらきら きりきり くいくい くしゃくしゃ くすくす ぐすぐす くよくよ くりくり くるくる くわらくわら ぐわらぐわら くわんくわん くんくん げたげた けらけら げらげら けろけろ けんけん こうこう ごしゃごしゃ こせこせ こそこそ ごちゃごちゃ こつこつ こてこて ごてごて ごやごや ころころ ごろごろ こんこん さくさく ざくざく さばさば ざぶざぶ さらさら ざわざわ しおしお しくしく じくじく しとしと しぶしぶ しゃんしゃん しょぼしょぼ じろじろ しんしん すいすい ずかずか すたすた すやすや するする すれすれ ぞくぞく そこそこ そよそよ そろそろ ぞろぞろ だぶだぶ たよたよ たらたら だらだら ちくちく ちびちび ちょちょ ちょうちょう ちょこちょこ ちょぼちょぼ ちょぽちょぽ ちょろちょろ ちらちら ちんちん ついつい つかつか つくつく つぶつぶ つやつや つらつら つるつる てかてか てくてく でくでく てらてら てんてん とうとう とかとか どかどか とくとく どさどさ どたどた とちとち とぼとぼ とろとろ どろどろ なむなむ にこにこ にょきにょき ぬくぬく のうのう のさのさ のらのら のろのろ ばさばさ はたはた ぱちぱち はつはつ はらはら ばらばら ぱらぱら ぴかぴか ひたひた ひやひや ひょうひょう ひょろひょろ ひらひら ひりひり ひわひわ

ふくふく　ぶくぶく　ふさふさ　ぶつぶつ　ぷつぷつ　ふわふわ　ふやふや　ふらふら　ぶらぶら　ぶんぶん　べそべそ　へたへた　へなへな　へらへら　べらべら　へろへろ　べんべん　ぺんぺん　ほかほか　ほくほく　ぼくぼく　ぽくぽく　ぼたぼた　ぽたぽた　ほちほち　ほちゃほちゃ　ぽちぽち　ほつほつ　ぼつぼつ　ぽつぽつ　ほろほろ　ぼろぼろ　まごまご　まじまじ　まんまん　みりみり　むくむく　むざむざ　むしゃむしゃ　むつむつ　めそめそ　めらめら　ゆうゆう　ゆさゆさ　ゆらゆら　ゆるゆる　ようよう　よちよち　よろよろ　らくらく　りんりん　わやわや　わんわん

反復型は一般的に「ある動作や状況の連続、くり返し」を表すとされている。

(25) a. とぶ蚤のひょいひょい達者じまん哉　（文政 8 年）

b. 蚤ひょいひょいひょいひょい達者じまん哉　（文政 8 年）

aの句は一般的なABAB型「ひょいひょい」、bの句は上五句から中七句にわたって「ひょいひょいひょいひょい」という長い形式のオノマトペが用いられている。「ひょいひょい」はこれだけでも身軽に飛ぶ動作の連続という意味を表しうるが、それをbの句で敢えて 4 度も反復させた理由は何であろうか。

aの句とbの句の違いは「とぶ」という動詞の有無にある。aの句は上五句を受けて「ひょいひょい」が蚤の飛ぶ軽快な様子を描写している一方、bの句は動詞が全くない分オノマトペにフォーカスがあたり、いつまでも「ひょいひょいひょいひょい」飛び続けているという時間的な長さまで感じることができる。つまり反復による語の長短が、動作の反復を越えて時間の長短まで表していると言えるのではないだろうか。

一茶は他にも長いオノマトペを度々使っており、

(26) 雉うろうろうろうろ門を覗くぞよ　（文化 9 年）

（27）梧一葉後はくわらくわらくわあらくわあら （文政 8 年）

のように、句の半分以上がオノマトペという例がいくつかある。「うろうろうろうろ」は（25）同様時間的な長さを表し、「くわらくわらくわあらくわあら」は梧一葉を残して後は全て散ってしまったという様子を、くり返しによる量的なイメージへと転化させていると考えられる。更に長音を挿入することによりこれが強調されていると言えるだろう。

このような句は一見するとあまりに安易で幼稚なものに見えなくもない。しかし坪内稔典（2001：76）が「俳句はたくさん詰め込んだりしたらだめだ、無内容がいい」と述べているように、「うろうろ歩きながら」のように動詞などを入れて状況説明をすると、逆にやぼったくなるものである。これらの句はあえて他の一切の状況を説明せず、ただオノマトペを重ねることでその周辺の状況に対する想像力をかきたたせるという点で優れた句であると言えるのではなかろうか。

このことから、道本の指摘した「オノマトペの多用」は決して稚拙な句に結びつくものではなく、用言の未熟さによるものでもないということが理解できよう。

### 3.2.2.5 交替型

オノマトペの最も代表的な形態である ABAB 型には、それに対応する交替の形、いわゆる ABCB 型という形も見られる。一茶のオノマトペにもこのような例がいくつか見られるが、ここでは ABAB 型との対比という観点から観察してみることにする。

（28）（いじいじ）―いじむじ しんしん―しんかん どたどた―どたばた のらのら―のらくら ふらふら―ふらしゃら むしゃむしゃ―むしゃくしゃ わやわや―わやくや

ここでは砧打ちの音を写し取った「どたどた」「どたばた」について考察する。

(29) a. どたどたは婆ゝが砧よいとしさよ（文化 14 年）

b. どたばたは婆ゝが砧としられたり（文化 12 年）

上の句はどちらも「婆」の打つ砧の音を織り込んで詠んだ句だが、「どたどた」には「いとしい」感情が、「どたばた」には「しられたり」、裏を返せば本当は知りたくなかったという感情が込められていることが分かる。

「どたどた」は/d//t//d//t/という歯茎破裂音の子音が繰り返されており、決して軽い音ではないが一定のリズムで叩かれるその心地よい音が「いとしさ」へとつながっている。一方「どたばた」は「どたどた」との間に第三子音における/d/～/b/の交替が見られ、その分音に大きなうねりが生じる。よって多少騒々しくも感じられ、ただの砧打ちではなく砧の杵で誰かをいさめ、叩いているような様子の描写になるのである。

二つの類似したオノマトペを同じテーマの中で用いつつ、その内容を全く別のものにするという手法は前述の(14)「ほちほち～ほちゃほちゃ」の例でも見られたが、一茶らしい遊び心はここにも見られると言えるだろう。

#### 3.2.2.6 語基型

田守(2001:42)も指摘しているように、一般的にオノマトペは語基だけで語彙として用いられることは稀であり、常に何らかのオノマトペ標識を伴うことで具体的な意味のある表現ができると考えられている。角岡(2007:71)の調査結果においても語基型オノマトペは19 語しかなかったが、一茶の俳句にはオノマトペ標識を伴わずに使用される語基型オノマトペが 45 語も見られる。

(30) うか かあ から かん きつ きょろ ぐす ぐる けん こそ ごろ ざぶ しゃん しょぼ しん ずぶ そ そよ たん ち ちゃん ちょ ちょう ちん つい つん とん のら びく ひた ひや ひょく ひら ぴん ふ ふわ ぶん へた ぼて ぼろ ぽん むく よろ りん わん

これらのうち純粋に音・声のみを表す語は9語（下点線で表示）あるが、それ以外は擬態語や擬態的要素を含む擬音語となっている。そしてこれらは「と」という助詞を伴う形で、あるいは後ろに名詞を伴って複合名詞の形で使用されていることが分かる。この語基型オノマトペを用いた俳句についても考察してみよう。

(31) うかと来て我をかがしの替哉 （文化 11 年）

「うか」は何の目的もない様や気が抜けて注意が不足している様を表す「うかうか」や「うっかり」の語基だが、ここでは反復などの形態変化を伴わない形で用いられている。一般的に「*うかとしていられない」「*うかとこぼしてしまった」という表現はあまり見られず違和感もあるが、俳句においては語基型「うか」が違和感なく据えられ、しかも「何の目的もなく」という意味を表している。これは語基「うか」が、それだけで具体的な意味を持っている証であると言えよう。

ではなぜ一茶の俳句において、このような語基型オノマトペが多用されているのだろうか。筆者はこれを俳句という特殊な形式によるものではないかと考える。俳句は五・七・五の十七文字の中に多くの情報を書き込まなければならない。よって一つ一つの言葉はよりシンプルになり、無駄なものはそぎ落とされていく。この過程の中で語基型オノマトペというのは、短いながらも凝縮された意味を持つ点で有効であり、俳句に奥行きを与える重要な語彙となったのではないだろうか。

語基型は辞書では見出し語になりにくい。角岡の調査結果もしかり、『日本語オノ

マトペ辞典』での扱われ方[23]もしかりである。もちろんCVCVタイプのオノマトペ語基全てが具体的な意味を持っているわけではなく、「ずんぐり」の語基「ずぐ」からは具体的な意味を感じることはできないなど、抽象・具象の程度には差がある。しかし具象度の高い、つまり具体的な意味を持つオノマトペ語基については特に俳句などの短詩においてその真価を発揮するものでもあり、もっと注目されるべき語彙群なのではないだろうか。

#### 3.2.2.7 漢語オノマトペ

前節で見た語基型オノマトペには実は「りん（凛）」「ちょう（丁）」のような漢語由来のオノマトペ、いわゆる漢語オノマトペが含まれている。漢語オノマトペと和語（真正）オノマトペはどちらも形態的にABAB型が非常に多く、また漢語由来であっても一般的に仮名で表記されるためにその起源が意識しにくくなっている場合もある[24]。

金田一（1978：12～14）は漢語オノマトペを大きく漢字の文字数によって分類しており、また田守・スコウラップ（1999：30～31）においては反復型の語彙が和語由来か漢語由来かを区別する手段として四つの視点を提示している。これによると反復型漢語オノマトペは①助詞「と」を義務的に伴う（煌煌{＊φ/と}輝く、炎々{＊φ/と}燃える、など）、②強調形「Q」の付加・挿入ができない（*煌煌っと、*ちゃっくちゃく、など）、③「低高高高」アクセントになる（煌煌〔こうこう〕と輝く、炎々〔えんえん〕と燃える、など）、④語基を3回以上反復できない（*煌々々と輝く、*楽々々と勝った、など）という特徴がある。

では一茶の俳句に現れる漢語オノマトペ 25 語について見てみることにする。以下

---

23 『日本語オノマトペ辞典』では語基型を「オノマトペのもと」というコラムの形で紹介してはいるが、見出し語のほとんどはオノマトペ標識を伴った形となっている。

24 角岡（2007：17）は漢語由来のオノマトペを「擬似オノマトペ」、漢語由来だが仮名で表記されることが多く、語源が日本語話者にとって辿りにくくなっている語彙を「かな擬似オノマトペ」として分類しているが、本稿では二つをあわせて「漢語オノマトペ」としている。

では漢字表記を括弧書きしているが、複数の漢字表記を持つものについては代表的なもののみ掲載している。

(32) あくせく(齷齪) けんけん(喧喧) こうこう(皓皓・煌煌) こつぜん(忽然) こんこん(滾滾) しゃーしゃー(洒一洒一) しんかん(森閑・深閑) しんしん(深深・森森)[25] ぞくぞく(続続) ちち(遅遅) ちょう(丁) ちょうちょう(喋喋) とうとう(蓼蓼) ひょうひょう(飄飄) べんべん(便便) べんべんだらり(便便～) まんまん(満満・漫漫) もうもう(濛濛) ゆうゆう(悠悠) ゆうぜん(悠然) ゆうゆうぜん(悠悠然)[26] ようよう(洋洋) らくらく(楽楽) りん(凛) りんりん(凛凛)

全体を通して見てみると、先行研究でも指摘されている通りそのほとんどが ABAB 型であるが、ここで注目したいのは漢語オノマトペ「もうもう(濛濛)」である。

(33) 牛<u>もうもうもう</u>と霧から出たりけり (文化 13 年)

この句に現われる「もうもう」は、「牛」の鳴き声「モウモウ」と「霧」が「濛濛」と立ち込めている様子とを掛けた言葉である。しかし上五句から中七句にかけて「もうもうもう」と 3 回反復しており、田守・スコウラップが述べる「漢語オノマトペは 3 回以上反復しない」という規則から外れている[27]。

---

25 「しんかん」「しんしん」の語基として AB 型の「しん」が考えられるが、それが和語由来か漢語由来か確定しにくい。よって(32)には入れないが、「しんかん」「しんしん」と形態的・意味的に通じるところがあり、＜付録＞には語基型として入れておくことにする。

26 「忽然」「悠然」「悠悠然」に含まれる「然」は小野正弘(2007)『日本語オノマトペ辞典』「漢語オノマトペ編」(p.512)において「(忽)焉」「(凛)乎」などと共に修飾語を作る接尾辞として扱われている。よって本稿でもこれを漢語オノマトペにおける接尾辞と認める。

27 俳句のリズムに関して五味太郎(1994:24)は、一見五・七・五に見える句にも別のリズムがある場合があり、必ずしも五・七・五で読み分ける必要はなさそうだと述べている。例えば

劉玲（2003：135）はこの「濛濛」が「颯颯」「悠悠」「茫茫」と並んで中世文献にて仮名表記されている、つまり一次化（和語化）されていると指摘している。このことから一茶の時代に「濛濛」は既に漢語オノマトペという意識がなくなっており、それゆえに「もうもうもう」と 3 度も反復する形で用いることができたのであろうと考えられる。

ところで山口（2002：180～181）によると「モウ」は江戸時代、牛の声を表すだけでなく掛詞として、或いはダジャレとして大いに活躍したという。例えば「もう来ぬ」のように、牛の鳴き声と副詞「もう」とを掛けた短歌などが多くあったようだが、「濛濛」との関係についての言及はされていない。

このことから筆者は、「モウ」が副詞「もう」との掛詞として定着していた江戸時代において、一茶が提示した「濛濛」というオノマトペと掛けるという手法は、陳腐になりがちなオノマトペ掛詞の新たな形式を提示したものではなかったかと考える。逆に言うと掛詞として言葉遊びができるほど、「濛濛」が自分の言葉、つまり和語として定着していたとも言えるであろう。

(34) a. べんべんと何をしなのの冬の蠅　（自筆本）

b. 藪梅の散もべんべんだらり哉　（浅黄空）

a の「べんべん」は何もしないで時間を持て余す様子を表すが、蠅の羽音「ぶんぶん」を彷彿とさせる響きがあり、掛詞的な用法を帯びていると考えられる。

更に『日本語オノマトペ辞典』「漢語オノマトペ編」を調べたところ、ある漢語オノマトペが意味の類似する別の漢語オノマトペを接続して一語となる例（喧々囂々、悠悠閑閑など）はいくつか見受けられる。しかし漢語に和語が接続して一つの語を形成

---

「春の海終日のたりのたりかな」（蕪村）は「はるのうみ／ひねもす／のたりのたりかな」とも「はるのうみ／ひねもすのたりのたり／かな」とも読めるとしており、(33) の句も「牛もうもうもうと／霧から／出たりけり」とオノマトペの部分を一つのまとまりとして捉え、考察することが可能である。

しているのは、この「べんべんだらり」のみであった。

「べんべん」は室町時代の辞書『文明本節用集』に既に収録されており、また「べんべんだらり」も安土桃山時代に書かれた狂歌説話集『遠近草』に見られる[28]。一方、これに類似する意味を持つ語に「のんべんぐらり」があるが、これは江戸中期に編纂された俗語辞典『志不可起』に「のんは軟の字にて軟免偶然（ノンベングラリ）ならん」と記されている。（『日本国語大辞典（第二版）』第 10 巻 p.895）

「べんべんだらり」と「のんべんぐらり」の相関関係については上の調査だけでは不明確であり更なる考察が必要となるが、中里（2008：104）が「漢語は古くから浸透しており、和語系オノマトペに与えた影響も大きかったと考えられる」と述べている点を踏まえても、両者に全く関連性がないとは考え難い。よって前述の「濛濛」同様、「便便」も漢語という意識が消えて和語の中に取り込まれたため、「べんべんだらり」という和語の付加した言葉を派生させることができたのではないかと推測できる。

また一茶の俳句には「ぞくりぞくり（続続）」、「しんしんしーん（深深・森森）」のようなオノマトペ標識が付加した漢語オノマトペも見られ、これらの例から漢語オノマトペの和語化という現象についての考察も可能であろう。いずれにしろ一茶は「濛濛」で見たように、これまでの慣用化された用法を脱したオノマトペ掛詞を生み出しており、ここに彼の言葉に対する挑戦意識を垣間見ることができると考えられる。

[28] 大野晋他編（1974）『岩波古語辞典』「べんべん」p.1154

### 3.2.3 統語的考察

#### 3.2.3.1 複合名詞

オノマトペは基本的には副詞に属するが、先行研究でも言及されていたように動詞や形容詞になったり、名詞的に用いたり、或いは名詞に接続して複合名詞となったりする場合もある。特に複合名詞は松尾芭蕉の句には全く現われず、蕪村の句においても「春雨や同車の君がさざめ言」などごくわずかしか見られないが、一茶の句においては多くの例が見られる点で特徴的である。前節で語基型オノマトペについて触れたが、一茶の俳句には語基型オノマトペ複合名詞として 14 例が挙げられる。

(35) きょろ目　ぐす寝　ぐる寝　こそ酒盛　ごろ寝　しょぼ濡　ずぶ濡　ずぶさしつい通り　のらこき　ぼて腹　むく犬　むく起　よろ法師

また ABAB 型オノマトペ複合名詞として、以下の 42 例が挙げられる。

(36) くすくす鳥　くりくり子　くりくり坊主　くるくる舞　けんけん時　げたげた笑い　ごてごて実　ころころ犬　ごろごろ寝　ざぶざぶ汐　ざぶざぶ水　しぶしぶ咲　しぶしぶ鳴　すたすた坊　たらたら下　だぶだぶ酒　だらだら下り　ちびちび舞　ちょろちょろ川　ちょろちょろ滝　ちょろちょろ水　ちんちん鴨　はらはら雨　はらはら時　はらはら星　はらはら雪　ばらばら雨　ぴいぴいうり　ひたひた汐　ひたひた水　ひょろひょろ山　ひらひら紙　ふさふさ餅　へらへら雪　へらへら神　へろへろ神　ぺんぺん草　ぼたぼた雪　ほのぼの明　ほろほろ雉　ほろほろ雨　ぼろぼろ衣

ところで田守(2008:76)は「きりきり舞い」や「よちよち歩き」のように、動詞の名詞化したものに接続する2モーラ反復型オノマトペは様態副詞として機能している一方、結果副詞として機能するオノマトペが複合名詞化する場合は「びしょ濡れ」「ごちゃ混ぜ」のように非反復型になると述べている。

しかし一茶の句において「寝る」という動詞が名詞化した「ごろ寝」「ごろごろ寝」とを比較すると、必ずしもこの説が当てはまるわけではないことに気付く。

(37) a. 夕立に足を打せてごろ寝哉 (文政8年)

b. 暑き日や爰にもごろりごろごろ寝 (文政1年)

これを見ると、aの「ごろ寝」もbの「ごろごろ寝」もオノマトペが「寝る」様子を表す様態副詞として機能している。つまり一茶の俳句においては、複合名詞におけるオノマトペの形が、必ずしも副詞の性質を規定しているわけではないということになる。

ところでこれまで述べてきたように、俳句は十七文字という制限のある中で広い世界を描かなければならないため、冗長な説明は避けなければならない。それにも関わらず「ごろ寝」でその様子を表現しうるところを、敢えて「ごろごろ寝」という長い形態で表現したのはなぜだろうか。

前述(25)で筆者は「ひょいひょいひょいひょい」という長い形態のオノマトペが時間的な長さまで表すようだと述べたが、複合名詞においてもこれが同様に適用されると考えられる。つまりaの句は一時的に休む様子を「ごろ寝」で表現し、bの句は一日中横になっている様子を「ごろごろ寝」という反復型によって表現したということである。

一方、「ごろ寝」と同じ形態をしていても、「ぐす寝」「ぐる寝」は「ごろ寝」とは名詞化する過程がやや違うようである。

(38) 傘持は葵かけつつぐす寝哉 （文政 5 年）

(39) とし玉の上にも猫のぐる寝哉 （文政 4 年）

(38)に現われる「ぐす」は鼻をすする時の音「ぐすぐす」の語基であり、「ぐす寝」は「鼻をぐすぐすとすすりながら寝る」様子を名詞化したものである。また(39)の「ぐる寝」も「体をぐるっと丸めて寝る」様子を名詞化したものであり、「ごろごろ寝る」のようにオノマトペが「寝る」様子を直接的に表すわけではない。つまり「ぐす寝」や「ぐる寝」は、オノマトペが「寝」を間接的に形容してはいるが、直接結びついてはいないケースだと言える。それにも関わらずこのように複合名詞として一語に集約できるという点も、字数制限のある俳句においては有用であると言えるだろう。

また、一茶のオノマトペ複合名詞には「水」に関わる複合名詞（水・雨・雪・川・滝・汐）[29]が多い点も特徴の一つとして挙げられる。

(40) 水：ちょろちょろ水　ひたひた水

雨：はらはら雨　ばらばら雨　ほろほろ雨　ざんざ雨　じゃじゃ雨

雪：はらはら雪　へらへら雪　ぼたぼた雪

川：ちょろちょろ川

滝：ちょろちょろ滝

汐：ざぶざぶ汐　ひたひた汐

水に触れて「濡れる」様子を表す「しょぼ濡」「ずぶ濡」まで含めるとオノマトペ複合名詞全 121 語中 16 語（約 13.2%）が水に関わるものであることが確認できる。金田一（1988：168）は「日本の自然の中で特色をなすものの一つが『水』」であり、一般語彙の中にも水・水勢・雨などに関わる言葉が豊富にあると述べている。一茶の俳句

[29] 「酒」を液体＝水に関わるものと考えると「だぶだぶ酒」というオノマトペ複合名詞も抽出できるが、ここでは自然の「水」だけを対象としたので除外した。

においてもやはりこれに関連する語が一般語彙を含めて多く見られ、更に(40)のようにオノマトペを清濁交替や母音・子音交替させることによって細かく描写していることが確認できる。

### 3.2.3.2 名詞的用法

前項で見たようにオノマトペには名詞を伴って複合名詞化する場合がある一方、オノマトペ自身が独立して名詞として用いられている場合もある。一茶の俳句においては、以下の 18 例が挙げられる。

(41) いさくさ いざこざ がらがら ぐるり しゃしゃり どたどた どたばた どんど のらのら のらくら はたはた ぱちぱち ぴいぴい ぶらり ぶらりんほかりほかり よろよろ わやくや

これらのうち「いさくさ・いざこざ・わやくや」は完全に名詞として定着しているものだが、「どんど」は「どんど焼き」を省略したもの、「のらくら」は「のらくら者」を省略したものであり、複合名詞から名詞が脱落したものと考えられる。

また「どたどた・どたばた・はたはた・ぱちぱち」は、「～という音」という説明的な部分を省略して(或いは含んで)名詞化したものだが、「がらがら・ぴいぴい」は「～という音を出す道具」というより具体的な物を表している。つまり同じ「音」を表す名詞でも、「音」のみを表すものと「音を出す道具」まで表すものとがあるということである。

(42) がらがらやぴいぴいうりや梅の花 (文化 14 年)

上の句は擬音語の「がらがら」「ぴいぴい」というオノマトペをまず音で受け止め、

中七句の「うり」という語からそれらを物として把握し、それらを売る光景まで連想することができ、梅の花見の賑わいを聴覚・視覚の両方から味わうことができる。オノマトペの持つ重層的な意味は、このように句の世界を広げる点で有効であると言える。

一方、一茶の俳句においては一般語彙を用いるところにオノマトペを置き、掛詞的に使用している例もある。

(43) 寒ごりや首のぐるりの三日の月 (文政 9 年)

寒ごりとは寒中に冷水を浴びて心身を清め、神仏に祈願することを言う。また「ぐるり」は一茶の句において、「爺が家のぐるりもけふはわかな哉」(文政 5 年)のように「周り・あたり」という意味で使用されている。

よって中七句を「首のあたりの」としても句全体の意味はあまり変わらないように思われる[30]が、寒ごりの「ごり」を肩こりの「こり」に見立てると、寒くてこわばってしまった首を「ぐるり」と回した、という意味にも解釈できる。ここにもまた一茶独特の軽妙さが現われていると言えるのではないだろうか。つまり(43)の句もまたオノマトペの持つ重層的な意味を効果的に用いた例だと考えられるのである。

### 3.2.4 意味的考察

#### 3.2.4.1 鳴き声の掛詞

前述したように俳句は掛詞を用いることによって、その句で描こうとする世界を広げることができる。これは一茶の俳句のみに限らず、古く和歌の時代から受け継がれ

30 一茶門下の宋□(□=希に鳥)が編纂した『一茶発句鈔追加』(天保 4 年、1833 年)には「寒垢離や首のあたりの水の月」として掲載されている。

てきたものであり特に目新しいものではない。例えば山口（1989、2002）には鶯の鳴き声「ホケキョー」と「法華経」を掛けた例や、ツクツクボウシの「ボウシ」を「法師」「惜し」に掛けた例など多くの掛詞的用法が挙げられているが、一茶の俳句においても、

（44）ほけ経と鳥もばせうの法事哉　（文政 3 年）

（45）行秋やつくづくおしと蝉の鳴　（文政 5 年）

というような慣習的な用法から逸脱していない例も見られる。

しかし、和歌の時代から掛詞として数多く用いられてきた鹿の鳴き声については、それまでの用法とは違った様相を帯びている例が見られる。

（46）鹿の子やきつといふから人ずれる　（文化 13 年）

山口（2002：88～89）によると鹿の鳴き声は哀切で物悲しく響き、短歌の時代からその声に恋する切ない思いを乗せて「ひひ・ひよ」或いは「かひよ（＝甲斐；成果だよ）」という形で歌人達が好んで用いていたと言う。一方で子鹿の鳴き声については「こんよ」という例が挙げられているが、一茶の句においても「きつ」という/k/音[31]の甲高さを表すオノマトペが用いられているという点で共通している。

しかし一茶の句には、鹿の声に切ない思いを託すというそれまでの常套手段は用いられていない。むしろ「きつ」に「来つ（来た）」という動詞をかけて、「鹿の子が『（誰かが）来た』と言うから、それを聞いた人は驚いてちょっと横にずれた」というコミカルな描写がなされており、使い古された表現からの逸脱を試みようとする態度が現われている。

31 「鹿の子のきやつといふから人ずれる」（句稿消息）においても子鹿の鳴き声は/k/音を含む拗音/kj/で表されている。

前節(33)で見た牛の鳴き声「モウモウ」を漢語オノマトペ「濛々」に掛ける例も、他の俳句作品には見られない独特の表現であったが、これらの例から一茶が使い古された掛詞に対し、常に挑戦的な意識で臨もうとしていたことが分かるのではないだろうか。

### 3.2.4.2 「新しい使い方」のオノマトペ

大西(1993:99)によるとオノマトペは使われていく間に元の新鮮な感覚が失われ、ありふれたものになっていくものだという。だが近代俳人らは新しいオノマトペを開発したり、新しい使い方をしたりして独自の世界を構築し、オノマトペを十分に生かすための努力をしていた。

しかし大西が新しいオノマトペとして例に挙げた「簗打ちやささらささらと浪の花」(阿波野青畝)の「ささら」は一茶の句において「一夜さにさくらはささらほさら哉」(浅黄空)という形で既に使われている。また新しい使い方のオノマトペとして提示した「ひらひらと月光降りぬ貝割菜」(川端茅舎)の月の光を表す「ひらひら」も、平家物語にて既に同様の使い方がされている(『岩波古語辞典』p.1110)。よっていずれも通時的な観点から見ると新しい語、新しい使い方とは言えまい。

では一茶の俳句にはオノマトペが新しい使い方をされている例があるのだろうか。ここで一茶の俳句二句について考察してみたい。

(47) 世の中は蝶も朝からがつがつと (自筆本)

(48) 石川をざぶざぶ渡る雉哉 (文化 11 年)

それぞれの句において注目すべきは、(47)「蝶」と「がつがつ」、(48)「石川」と「ざぶざぶ」という名詞に相反するイメージのオノマトペが結びついている点であろう。藤

田（2009：64）が「今まで試されなかったオノマトペを措辞することで、意外性が生まれ、新しい世界を作り出すことができる」と述べている通り、このようなギャップは読み手の感覚から外れ意外性を生み出す。

しかし優雅な「蝶」までもが朝から「がつがつ」しているこの世の中、「石川」なのに「ざぶざぶ」と音を立てそうなくらいの勢いで渡る雉、というギャップは、新しい世界を生み出すというよりも、意外性や斬新さによりその句を読む（聞く）相手に強烈な印象を与え、耳目を集めるために必要だったのではないだろうかと筆者は考える。

オノマトペをそれと関連のない語とが結びついている句として、大西も「をりとりてはらりとおもきすすきかな」（飯田蛇笏）を挙げている。しかしこれも新しい世界を生み出すというよりは、折り取ったすすきのかすかな手ごたえを印象付けるための表現だったのではないかと考えられるのである。

句の表現効果を上げてその世界をより印象深いものにするために、オノマトペに音韻的・形態的な変化を与えて目を引くのではなく、その句に据えられた名詞と相反するオノマトペを使用するというギャップによって意味的な側面からアプローチしているのが、上の例であると言えるのではないだろうか。

# Ⅳ. 結論

本稿は江戸時代の俳人である小林一茶の俳句 2 万余句を対象に、彼の句に現れるオノマトペの数を調査し年度別の使用率を割り出し、また音韻的・形態的・統語的・意味的側面からの観察を行うことで、一茶俳句におけるオノマトペの様相を多角的に考察したものである。本稿において明らかになった事柄についてまとめると、以下の通りになる。

**1. 一茶の俳句におけるオノマトペ使用率**

今回の調査によると一茶の俳句におけるオノマトペ使用率は全体の約 7.7%となり、これは先行研究とほぼ同一の結果であった。そしてこの数値は芭蕉や蕪村の俳句におけるオノマトペ使用率がそれぞれ 1%台であることに比べると群を抜いて高く、これが「オノマトペ俳句といえば小林一茶」と言われる理由の一つであることを確認した。

ただし一茶の俳句においては、常に一定の割合でオノマトペ俳句が出現するのではなく、ある年を基点にその割合が上下していることが分かった。特に文化 5 年(1808)の亡父の遺産問題に関する弟との合意、それから文化 11 年(1814)の初めての結婚は一茶の精神的な重荷が軽減される出来事であり、この年を基点としてオノマトペ使用率が引き上げられている点は注目すべきところである。また結婚後の不幸の連続によって一時期その割合が低下したが、三度目の結婚によりまたオノマトペ使用率が上がるなど、彼の生涯において何らかの契機となる出来事に対応するようにオノマトペ俳句の出現率が増減していることが明らかになった。

よって一茶の心の余裕、精神的な安定がオノマトペという形で俳句に反映されていたのではないか、という点が本稿の調査から推測されることである。

2. 音韻的考察

一茶は俳句において自分の詠もうとする風景、或いは心的描写にあわせてオノマトペを音韻的に変化させていたことが分かった。特に俳句の核となる名詞に合わせてオノマトペを変化させている場合が多く、例えば同じ春の日永の静けさを詠んだ句においても、「村」は「かたりともしない」が「町」は「がたりともしない」というように、句に詠まれる名詞に合わせてオノマトペを使い分けている例が見受けられた。これは、副詞として動詞との関連性に主眼が置かれがちなオノマトペ研究において、注目すべきことであると考えられる。

更に「がやがや」よりも秘密めいた印象を持たせるために、「ごやごや」という特殊なオノマトペを用いるなど、音の持つ微妙なニュアンスの差を巧みに利用して句の中に描こうとする世界を細やかに表現していたことも明らかになった。

3. 形態的考察

先行研究で既に言及されてきたようにオノマトペのニュアンスの差を生み出す役割は「オノマトペ標識」が担っている。一茶のオノマトペ俳句においてもこれが効果的に用いられていたが、特に「リ」接辞型が多い点は特徴的であった。これは「リ」の持つ余韻という意味と関連があると考えられる。

一方で一茶の俳句には、オノマトペ標識によるニュアンスを一切排除した語基型オノマトペが多い点も注目すべきところであろう。一般的な文章ではあまり使われることのない語基型は短いながらも凝縮された意味を持つという点で、俳句という制限された表現形式において非常に有用であると考えられる。

また「漢字の意味＝意味内容」であるため音象徴性が消えてしまったとされる漢語オノマトペについても、「濛濛」のように漢語という意識が薄れたものは和語オノマトペのような形態変化が可能となり、何度も反復したり、和語オノマトペを伴って一語となったりする例が見られた。また掛詞として用いられるという点も、漢語オノマトペの和語化の程度が高いということになると考えられる。

4. 統語的考察

一茶が俳句という字数制限のある文章形態において、重層的な意味を持つ複合名詞や名詞的用法を非常に効果的に用いていることを明らかにした。特に「ぐす寝」のようにオノマトペが直接「寝」に係らない場合でも集約が可能である点や「がらがら」という擬音語が名詞的に使われることによって聴覚と視覚という重層的な表現が可能である点は、俳句の世界を広げるのに有効であると考えられる。

5. 意味的考察

一茶は、短歌の時代から使われ続けていた虫や鳥、獣の鳴き声を掛詞にするという常套手段に対し、それまでの用法から脱した新しい表現を試みるなどして、ありきたりな表現になってしまいがちなオノマトペ掛詞に新しい方法でアプローチしようとしていたことが明らかになった。このような点からは一茶の言葉に対する挑戦的な意識が垣間見える。

もちろんこのような新しい使い方は掛詞だけに限定されるものではなく、「蝶」の形容に「がつがつと」というような全く相反するオノマトペを用いるという表現にも見られる。これは近代俳人らに先駆けて一茶が行っていたことであるが、このようにギャップを作ることで意外性・斬新さをもたらし、読み手（聞き手）に対し強烈な印象を残すことに一役買ったのではないかと考えられる。

一茶が音韻的・形態的に一般的でないオノマトペを用いて強い印象を与えるという方法以外に、句に据えた語彙同士のギャップという面からその俳句を印象深いものにしようとしていた点も、今回の考察において明らかになったことである。

本稿では小林一茶の俳句におけるオノマトペに対する多角的な考察を行ったが、オノマトペに関する一般論をなぞるに留まっている部分もあり、この点は反省すべきところである。

また一茶の俳句に用いられている音韻・形態的変化を経た特殊なオノマトペが、

彼特有のものだったのか、それともその時代に普遍的なものであったのかという点を考察するためには、一茶と同時代を生きた人物らの韻文や散文などの書物を調査する必要があるだろう。特に堀切実(1985a:37)の述べる「一茶の時代に大流行し、一茶の俳風にも多大の影響を与えた川柳」との関係については、注意しなければならない。

また本稿では近代俳人の用いる「新しいオノマトペ」が、既に一茶の句の中に同じ用法で現われていたことを指摘したが、そのオノマトペが更に古い時代に既に使われていたかもしれないことを考えると、時代を遡っての検証も必要だろう。

他にも形態的考察の節で指摘した「AB ッ」型オノマトペに関する時代的考察や、漢語オノマトペと和語オノマトペとの関わりなど、本稿で生じた疑問点は多いが、これらは今後の研究課題としたい。

PUKYONG NATIONAL UNIVERSITY 부경대학교

# 参考文献


**【辞典類】**

阿刀田稔子・星野和子編(1995)『擬音語・擬態語使い方辞典(第二版)』創拓社

天沼寧編(1974)『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版

大野晋他編(1974)『岩波古語辞典』岩波書店

小野正弘編(2007)『日本語オノマトペ辞典』小学館

日本国語大辞典第二版編集委員会編(2001)『日本国語大辞典(第二版)』小学館

日本古典文学大辞典編集委員会編(1983)『日本古典文学大辞典』岩波書店

三谷栄一・山本健吉編(1982)『日本文学史辞典(古典編)』角川書店

山口仲美編(2003)『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社

**【論文・資料】**

石黒圭(2008)「オノマトペとは」『國文學―解釈と教材の研究―』第 53 巻 14 号 學燈社

王雅夢(2013)「オノマトペを含む複合名詞の造語法についての研究」『日本語と日本語教育』41 慶應義塾大学日本語・日本語文化教育センター紀要

大西芳郎(1993)「オノマトペの表現効果―俳句の中の用法―」『学苑』638 昭和女子大学近代文化研究所

筧寿雄(2001)「“変身”するオノマトペ」『言語』第 30 巻 第 9 号 大修館書店

金田一春彦(1978)「擬音語・擬態語概説」『擬音語・擬態語辞典』角川書店

黒川伊保子(2008)「ことばの力」『國文學―解釈と教材の研究―』第 53 巻 14 号 學燈社

玄榮美(2014)「二葉亭四迷의　作品에　나타난　오노마토페에　관한　考察」東義大学校大学院博士論文

斎藤正幸(2006)「名句遍歴―芭蕉・蕪村・一茶―」『禅』(21) 人間禅出版部

田守育啓(2001)「日本語オノマトペの語形成規則」『言語』第30巻 第9号 大修館書店

_____(2008)「オノマトペの体系性」『國文學―解釈と教材の研究―』第 53 巻 14 号 學燈社

坪内稔典他(2001)「対談 オノマトペの楽しさと難しさ」『俳句』50(9)～50(11) 角川学芸出版編

中里理子(2008)「漢語系オノマトペをどう考えるか」『國文學―解釈と教材の研究―』第53巻 14号 學燈社

野間秀樹(2001)「オノマトペと音象徴」『言語』第30巻 第9号 大修館書店

_____(2008)「音と意味の間に」『國文學―解釈と教材の研究―』第53巻 14号 學燈社

福永法弘(2006)「オノマトペは楽し」『俳句』55(4)～55(5) 角川学芸出版

藤田万喜子(2009)「種田山頭火の俳句におけるオノマトペ表現」『岐阜聖徳学園大学紀要』48号 岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編

堀切実(1985a)「一茶の比喩表現(上)」『文学』53(6) 岩波書店

_____(1985b)「一茶の比喩表現(中)」『文学』53(9) 岩波書店

_____(1986)「一茶の比喩表現(下)」『文学』54(1) 岩波書店

道本武彦(1977)「『芭蕉・蕪村・一茶』発句の副詞について」『国語研究』通号40 國學院大學国語研究会

劉玲(2003)「漢語オノマトペに関する一考察：ＡＡ(ト)型の歴史的概観及びその位置づけ」『筑波日本語研究』第8号 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科日本語学研究室

【単行本】

飯塚書店編集部編(1999)『短歌の技法　オノマトペ』飯塚書店

小野正弘(2009)『オノマトペがあるから日本語は楽しい　擬音語・擬態語の豊かな世界』平凡社

角岡賢一(2007)『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版

金田一春彦(1988)『日本語新版(上)』岩波書店

小池清治(2003)『日本語は悪魔の言語か？―ことばに関する十の話』角川書店

五味太郎(1994)『俳句はいかが』岩崎書店

_____(2004)『日本語擬態語辞典』講談社

田守育啓, ローレンス・スコウラップ(1999)『オノマトペ―形態と意味―』くろしお出版

浜野祥子(2014)『日本語のオノマトペ　音象徴と構造』くろしお出版

丸山一彦校注(1990)『新訂一茶俳句集』岩波書店

山口仲美(1989)『ちんちん千鳥のなく声は―日本人が聴いた鳥の声―』大修館書店

_____(2002)『犬は「びよ」と鳴いていた―日本語は擬音語・擬態語が面白い』光文社

_____(2007)『日本語の歴史』岩波書店

## ＜付録＞小林一茶の俳句におけるオノマトペ一覧

1. 本資料は、『一茶全集／第一巻　発句』及び『一茶発句総索引』付録を底本とし、一茶の俳句に現れるオノマトペを抽出してまとめたものである。
2. 集計したオノマトペは延べ語数で 1705 語、異なり語数では 561 語ある。
3. 各項目は 50 音順に並べたが、同一の語基から派生したと考えられるものについては一段下げて記した。
4. オノマトペの認定基準については本稿第 2 章第 2 節を参照されたい。
5. オノマトペ標識は、諸先行研究を元に「促音、撥音、長音、リ、反復」を設定しているが、角岡や山口（本稿脚注 3）の指摘を踏まえて「イ」「ロ」「ラ」もこれに加えている。
6. 漢語オノマトペには形態の欄に（漢）を付加して表示した。
7. 用法に示した「態」は擬態語、「音」は擬音語、「声」は擬声語を指す。擬音語と擬声語の区分は金田一（1978：5～7）に従った。擬音語は外界の音を写したもの、擬声語は動物や人の声を表したものである。
8. 用法において「声・態」のように「・」で表記されているものは、その語が擬声語と擬態語の二つの意味を含むことを示し、「声/態」のように「/」で表記されているものは、その語が掛詞として擬声語と擬態語の意味を表すことを示している。

| 番号 | 語句 | 形態 | 出現句数 | 用法 | 作句年 | 句 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | あくせく | ABCB（漢） | 3 | 態 | 文政4 | 子もち蜂あくせく蜜をかせぐ也 |
| | | | | 態 | 文化9 | 短夜をあくせくけぶる浅間哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | あくせくと起せば殻よ栗のいが |
| 2 | あさり | ABリ | 1 | 態 | 文政6 | 世の中をあさりとあさぎざくら哉 |
| 3 | あっさり | AッBリ | 6 | 態 | 文政8 | 世の中をあつさりあさぎざくら哉 |
| | | | | 態 | 発句鈔追加 | 世の中はあつさり浅黄ざくら哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | あつさりと春は来にけり浅黄空 |
| | | | | 態 | 文政8 | あつさりとあさぎ頭巾の花見哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | あつさりと朝夕立のお茶屋哉 |
| | | | | 態 | 文化12 | あつさりと浅黄頭巾の交ぞ |
| 4 | あたふた | ABCB | 1 | 態 | 文化1 | あたふたに蝶の出る日や金の番 |
| 5 | あっけらこん | AッBラ＋接尾辞 | 1 | 態 | 文化13 | 女郎花あっけらこんと立りけり |
| 6 | あはは | 接頭辞＋AA | 2 | 声 | 自筆本 | 餅つきの木陰にてうちあはゝ哉 |
| | | | | 声 | 文化10 | 餅花の木陰にてうちあはは哉 |
| 7 | いさくさ | ABCB | 1 | 態（名詞用法） | 文化14 | 白露やいさくさなしに丸く成る |
| 8 | いざこざ | ABCB | 2 | 態（名詞用法） | 文化12 | いざこざをじつと見て居る乙鳥哉 |
| | | | | 態（名詞用法） | 文政6 | いざこざを雀もいふや村しぐれ |
| 9 | いじむじ | ABCB | 2 | 態 | 文化10 | 行としや何をいぢむぢ夕千鳥 |
| | | | | 態 | 希杖本 | 此月に何をいぢむぢ鳴千鳥 |
| 10 | いそいそ | ABAB | 1 | 態 | 文政7 | いそいそと老木もわか葉仲間哉 |
| 11 | うか | AB | 2 | 態 | 文政6 | 小便もうかとはならずけさの春 |
| | | | | 態 | 文化11 | うかと来て我をかがしの替哉 |
| 12 | うかうか | ABAB | 7 | 態 | 文化14 | あはう草うかうか伸な秋が立 |
| | | | | 態 | 文化1 | うかうかと出れば日暮る紅葉哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | 仏ともならでうかうか老の松 |
| | | | | 態 | 名なし草紙 | うかうかと人に生れて秋の暮 |
| | | | | 態 | 文化1 | うかうかと盆も過たる灯ろ哉 |
| | | | | 態 | 文化1 | うかうかと出水に逢し木槿哉 |
| | | | | 態 | 文化7 | うかうかと常正月や池の鴨 |
| 13 | うっかりひょん | AッBリ＋接尾辞 | 1 | 態 | 文化11 | 稲妻やうつかりひよんとした顔へ |
| 14 | うきうき | ABAB | 2 | 態 | 文化3 | うきうきと何の花ぞも蚊やり立 |
| | | | | 態 | 文化1 | うきうきと草の咲そふ瓢哉 |
| 15 | うじうじ | ABAB | 3 | 態 | 文政3 | 逃された草にうぢうぢ火とり虫 |
| | | | | 態 | 文化1 | うぢうぢと出れば日暮る紅葉哉 |
| | | | | 態 | 文化3 | うぢうぢと枯野にかかる跟哉 |
| 16 | うすうす | ABAB | 2 | 態 | 文政1 | うすうすと寝るやこたつの伏見舟 |
| | | | | 態 | 文政8 | ぱぱがつく鐘もうすうす夕霞 |
| 17 | うそうそ | ABAB | 6 | 態 | 文化5 | うそうその雉の立添ふ垣根哉 |
| | | | | 態 | 文化5 | 草家からうそうそ寒くなる夜哉 |
| | | | | 態 | 発句鈔追加 | 御鳥もうそうそ寒き芽さしかな |
| | | | | 態 | 文化11 | 蓑を着てうそうそ寒き瓢哉 |
| | | | | 態 | 文化1 | うそうそと雨降中を春のてふ |
| | | | | 態 | 文化2 | うそうそと人も頼まぬ夜露哉 |
| 18 | うつらうつら | ABラABラ | 1 | 態 | 文化4 | うつらうつら紙衣仲間に入にけり |
| 19 | うらうら | ABAB | 1 | 態 | 寛政6 | 葉うらうら灯影とどかぬ里神楽 |
| 20 | うろうろ | ABAB | 6 | 態 | 株番 | 蝶どももうろうろ欲のうき世哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | 蝶の身もうろうろ欲のうき世哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | 子烏のうろうろととをかかあ哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | 両三度うろうろ下手な火とり虫 |
| | | | | 態 | 文化3 | 庵の蠅何をうろうろ長らふる |
| | | | | 態 | 文化10 | かたつぶりうろうろ夜もかせぐかや |
| 21 | うろうろうろうろ | ABABABAB | 2 | 態 | 文化9 | 雉うろうろうろうろ門を覗くぞよ |
| | | | | 態 | 文化9 | 雉うろうろうろうろ庵を覗くぞよ |
| 22 | うんうん | ABAB | 1 | 声・態 | 文政4 | うんうんと坂を上りて扇かな |
| 23 | えへんえへん | 接頭辞＋Aン×２ | 1 | 声 | 文化13 | 網代守り爰にとゑへんゑへん哉 |
| 24 | おろおろ | ABAB | 2 | 態 | 文化7 | 乞食子がおろおろ拝む雛哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | 迎鐘おろおろ露をならす也 |
| 25 | かあ | AB | 2 | 声／名詞 | 文化11 | 子烏のうろうろととをかかあ哉 |
| | | | | 声／名詞 | 浅黄空 | 子烏のきよろきよろととをかかあ哉 |
| 26 | がくりがくり | ABリABリ | 1 | 態 | 文化13 | 碓のがくりがくりも霜がれる |
| 27 | かさりかさり | ABリABリ | 1 | 音 | 寛政12 | かれ芒かさりかさりと夜明たり |
| 28 | がさがさ | ABAB | 1 | 態 | 文化9 | がさがさと粽をかぢる美人哉 |
| 29 | がさり | ABリ | 2 | 音・態 | 文政8 | おく露やがさりともせぬ今の御代 |
| | | | | 音 | 句稿消息 | 白露やがさりともせぬ今の御代 |
| 30 | かたかた | ABAB | 1 | 音／名詞 | 文化8 | 大寺や片かた戸ざす夕紅葉 |
| 31 | かたり | ABリ | 1 | 音・態 | 文化6 | 一村はかたりともせぬ日永哉 |
| 32 | がたり | ABリ | 1 | 音・態 | 文政8 | がたりともせぬや日永の御世の町 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 33 | がたりがたり | ABリABリ | 2 | 音 | 随斎筆紀 | 冬がれて碓がたりがたりかな |
| | | | | 音 | 文化13 | 霜がれて碓がたりがたり哉 |
| 34 | かちかち | ABAB | 3 | 態/名詞 | 文化3 | かた餅のかちかち山やかんこ鳥 |
| | | | | 音 | 文化13 | 笛ぴいぴい杖もかちかち冬の月 |
| | | | | 音/名詞 | 文化13 | 石切のかちかち山や冬の月 |
| 35 | かちり | ABリ | 2 | 音・態 | 文政6 | 鶯にかちりと茶せんとりし哉 |
| | | | | 音 | 発句集続篇 | 鶯にかちりと茶せんとうじ哉 |
| 36 | がつがつ | ABAB | 1 | 態 | 自筆本 | 世の中は蝶も朝からがつがつと |
| 37 | がっかり | AッBリ | 1 | 態 | 文化11 | ちる花にがつかりしたる小てふ哉 |
| 38 | がっくり | AッBリ | 4 | 態 | 浅黄空 | 夕暮にがつくりしたよ草のてふ |
| | | | | 態 | 自筆本 | 夕暮にがつくりしたぞ草のてふ |
| | | | | 態(複合名詞) | 文政3 | 山風のがつくりおちや門幟 |
| | | | | 態(複合名詞) | 文政8 | 大文字のがつくりぎへや東山 |
| 39 | かっこー | AッBー | 2 | 声 | 文政2 | 我藪のかつかうと鳥鳴にけり |
| | | | | 声(複合名詞) | 文政2 | 我家に恰好鳥の鳴にけり |
| 40 | かっこーかっこー | AッBーAッBー | 1 | 声 | 文政5 | 眠さうや鳥をかつかうかつかうと |
| 41 | がやがや | ABAB | 1 | 音・態 | 文化9 | がやがやと鵜も正月を致す哉 |
| 42 | から | AB | 1 | 態 | 文政6 | 大みかん天からからと降にけり |
| 43 | からから | ABAB | 7 | 音 | 文化9 | 銭からから敬白んめの花 |
| | | | | 音 | 文化8 | からからと下駄をならして桜哉 |
| | | | | 音 | 文政8 | 卯の花や糊看板のからからと |
| | | | | 音 | 文化8 | からからと貝殻庇秋過ぬ |
| | | | | 音 | 文政6 | 雪ちるや軒のあやめのからからと |
| | | | | 音 | 発句鈔追加 | 雪ちるや軒の菖蒲がからからと |
| | | | | 音 | 文化9 | からからと音して亀を引ずりぬ |
| 44 | からり | ABリ | 2 | 態 | 文政1 | 大沼やかりり日破てとぶ蟲 |
| | | | | 態 | 文政1 | 春風やかりりとかはく流し元 |
| 45 | からりからり | ABリABリ | 6 | 音・態 | 文化10 | 下駄からりからり夜永のやつら哉 |
| | | | | 音・態 | 文化2 | 霧晴て胡麻殻からりからり哉 |
| | | | | 音・態 | 文化11 | 石梨のからりからりと夜寒哉 |
| | | | | 音・態 | 文政4 | さいかちのからりからりと夜寒哉 |
| | | | | 音・態 | 文化11 | 鈴ふりがからりからりと冬至哉 |
| | | | | 音・態 | 文化13 | 鉄棒のからりからりやちる霰 |
| 46 | がらがら | ABAB | 2 | 音(名詞用法) | 文化14 | がらがらやぴいぴいうりや梅の花 |
| | | | | 音 | 文化9 | 鈴がらがら虫も願ひのあればこそ |
| 47 | がらりがらり | ABリABリ | 1 | 音・態 | 発句鈔追加 | 鈴がらりがらり蕣ひとつさく |
| 48 | かりりかりり | ABリABリ | 1 | 音・態 | 文政2 | 三ツ子さへかりりかりりや年の豆 |
| 49 | がりがり | ABAB | 2 | 音・態 | 文政8 | 生栗をがりがり子ども盛哉 |
| | | | | 音・態 | 文化8 | がりがりと竹かぢりけりきりぎりす |
| 50 | かん | AB | 1 | 音 | 文政2 | 歯固にかんといはする小粒哉 |
| 51 | かんかん | ABAB | 2 | 音 | 文化13 | 棒突や石にかんかん寒の月 |
| | | | | 音 | 自筆本 | 夜廻や石をかんかん寒の月 |
| 52 | ぎいちょぎいちょ | ABCABC | 1 | 声 | 文化13 | 昼顔に虫もぎいちよぎいちよ哉 |
| 53 | ぎいっちょぎいっちょ | ABッCABッC | 2 | 声 | 文化13 | つまる日を虫もぎいつちよぎいつちよ哉 |
| | | | | 声 | 文化14 | つまる日に虫もぎいつちよぎいつちよ哉 |
| 54 | きたきた | ABAB | 1 | 声/動詞 | 文政5 | よし切や水盗人が来た来たと |
| 55 | きつ | AB | 1 | 声/動詞 | 文化13 | 鹿の子やきつといふから人ずれる |
| 56 | きっ | Aッ | 5 | 態 | 文政8 | 神国や草も元日きつと咲 |
| | | | | 態 | 発句題叢他 | 負菊を仡と見直す独かな |
| | | | | 態 | 自筆本 | きつとして江戸を詠る蛙哉 |
| | | | | 態 | 文政5 | 梅仡と咲くや正月十日様 |
| | | | | 態 | 文政5 | 仡として蚊に喰るるや引がへる |
| 57 | きっかり | AッBリ | 1 | 態 | 発句鈔追加 | きつかりと山は浅黄に秋の暮 |
| 58 | ぎっくり | AッBリ | 2 | 態 | 文化11 | ぎつくりと浅黄の山や秋の暮 |
| | | | | 態 | 文政2 | ぎつくりと浅黄の山やころもがい |
| 59 | ぎっしり | AッBリ | 2 | 態 | 文政1 | 本堂にぎつしりつまる藪蚊哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | 雪の日や堂にぎつしり鳩雀 |
| 60 | きっちきっち | AッBAッB | 1 | 声 | 文化12 | 肩先に泊てきつちきつち哉 |
| 61 | きっぱり | AッBリ | 1 | 態 | 文化2 | 麦の葉のきつぱりとして花の雲 |
| 62 | きゃっ | Aッ | 1 | 声/名詞 | 句稿消息 | 鹿の子やきやつといふから人ずれる |
| 63 | きゃらきゃら | ABAB | 1 | 態 | 文政2 | 子宝がきやらきやら笑ふ榾火哉 |
| 64 | ぎょっ | Aッ | 1 | 声/態 | 文政5 | 鶯がぎよつとするぞよ咳ばらひ |
| 65 | きょろ | AB | 1 | 態(複合名詞) | 文政3 | 蜻蛉も人もきょろきょろきょろ目哉 |
| 66 | きょろきょろ | ABAB | 6 | 態 | 文化12 | 凧きれて犬もきよろきよろ目哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 蜂逃て狙はきよろきよろ眼哉 |
| | | | | 態 | 浅黄空 | 子烏のきよろきよろととをかかあ哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | 蜻蛉も人もきょろきょろきょろ目哉 |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | 蜻蛉も人もきょろきょろ目つき哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | みそさざいきよろきよろ何を落したか |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 67 | きょろきょろきょろきょろ | ABABABAB | 1 | 態 | 文化13 | きよろきよろきよろきよろ何をみそさざい |
| 68 | きょん | Aン | 2 | 態 | 文化13 | つるべ竿きよんとしてあるわか葉哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | つるべ竿きよんとしてある茂哉 |
| 69 | きらきら | ABAB | 1 | 態 | 文政2 | 白山の雪きらきらと暑かな |
| 70 | きりきり | ABAB | 3 | 声・態 | 文化11 | とこ鳴はきりきり致せ鶯よ |
| | | | | 態 | 文化2 | 蛬きりきり死もせざりけり |
| | | | | 態 | 文政5 | 蛬きりきり仕廻へ寒い雨 |
| 71 | きりきりしゃん | ABAB＋接尾辞 | 2 | 態 | 文化9 | きりきりしゃんとしてさく桔梗哉 |
| | | | | 態 | 発句題叢他 | きりきりしゃんで咲く桔梗哉 |
| 72 | くいくい | ABAB | 1 | 音 | 文化11 | 陽炎にくいくい猫の鼾かな |
| 73 | くしゃくしゃ | ABAB | 1 | 態 | 希杖本 | くしゃくしゃと鹿の親子の寝面哉 |
| 74 | くすくす | ABAB | 3 | 声 | 文化4 | 木がらしにくすくす豕の寝たりけり |
| | | | | 声・態 | 文化9 | 梟のくすくす笑ふ衾哉 |
| | | | | 声（複合名詞） | 希杖本 | 鹿の背にくすくす鳥の昼寝哉 |
| 75 | ぐす | AB | 2 | 音（複合名詞） | 文政5 | 傘持は葵かけつつぐす寝哉 |
| | | | | 音（複合名詞） | 文政5 | つつがなく氷納てぐす寝哉 |
| 76 | ぐすぐす | ABAB | 1 | 音・態 | 文化5 | ぐすぐすと蝶の寝ざまを蚊やり哉 |
| 77 | くっ | Aッ | 6 | 声 | 文化4 | 昼此はくつともいはぬ蛙哉 |
| | | | | 声 | 文政1 | はづかしやくつとも云ぬ蝶夫婦 |
| | | | | 声 | 文化7 | 軒の蜂くつとも云ぬくらし哉 |
| | | | | 声 | 文化7 | 巣の崎のくつとも云ぬくらし哉 |
| | | | | 声 | 文化10 | むつまじやくつとも云ぬあじろ守 |
| | | | | 声 | 文政2 | そつと申せばくつと立千鳥哉 |
| 78 | くっく | AッA | 1 | 声 | 浅黄空 | 連もたぬ雁くつくと帰りけり |
| 79 | ぐっ | Aッ | 1 | 態 | 文政2 | はつ雪やぐつと我が家に寝たならば |
| 80 | ぐっく | AッA' | 1 | 態 | 真蹟 | 穀値段ぐつくとさがるあつさ哉 |
| 81 | ぐっぐ | AッA | 1 | 態 | 嘉永版他 | 米値段ぐつぐと下るあつさ哉 |
| 82 | くよくよ | ABAB | 2 | 態 | 文化9 | くよくよと露の中なる栄花哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | くよくよとさはぐな翌は翌の露 |
| 83 | くりくり | ABAB | 13 | 態 | 文化1 | 草山のくりくりはれし春の雨 |
| | | | | 態 | 文化7 | 雪とけてくりくりしたる月よ哉 |
| | | | | 態 | 文化14 | 旅浴衣雪はくりくりとけにけり |
| | | | | 態 | 浅黄空 | 旅浴衣山はくりくり雪とける |
| | | | | 態 | 自筆本 | 門出吉山もくりくり雪とける |
| | | | | 態 | 文政5 | 裏山もくりくり掃て盆の月 |
| | | | | 態 | 文政5 | くりくりと月のさしけり坊主麦 |
| | | | | 態 | 文化6 | くりくりと栗をふみ行流哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | くりくりと笹湯の笹も小春哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | くりくりと立派に枯し堅木哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政10 | 秋風やせどやうらやのくりくり子 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政1 | 一葉づつ終にくりくり坊主哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 希杖本 | 一葉ずつ終のくりくり坊主哉 |
| 84 | くるくる | ABAB | 3 | 態（複合名詞） | 浅黄空 | 切凧のくるくる舞やお茶の水 |
| | | | | 態 | 文政1 | くるくると車備の蛍哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政3 | 猫の子のくるくる舞やちる木の葉 |
| 85 | ぐる | AB | 1 | 態（複合名詞） | 文政4 | とし玉の上にも猫のぐる寝哉 |
| 86 | ぐるり | ABリ | 4 | 態（名詞用法） | 文政5 | 爺が家のぐるりもけふはわかな哉 |
| | | | | 態（名詞用法） | 文政9 | 寒ごりや首のぐるりの三日の月 |
| | | | | 態（名詞用法） | 文政5 | 留守事や庵のぐるりも釣り干菜 |
| | | | | 態（名詞用法） | 文政7 | 葱法度の寺のぐるりや葱畠 |
| 87 | くわらくわら | ABAB | 1 | 態 | 文化11 | 蝶とんでくわらくわら川のきげん哉 |
| 88 | くわーらくわーら | A―BA―B | 2 | 態 | 文政8 | 桐の木や一葉所かくはあらくはあら |
| | | | | 態 | 文政8 | 手廻しや一度に桐のくはあらくはあら |
| 89 | くわらくわらくわーらくわーら | ABABA―BA―B | 1 | 態 | 文政8 | 梧一葉後はくわらくわらくはあらくはあら |
| 90 | ぐわくり | ABリ | 1 | 態 | 文化10 | そとすればぐわくりと炭のくだけけり |
| 91 | くわっ | Aッ | 3 | 声 | 文化11 | そとすればくわつと千鳥の飛にけり |
| | | | | 声 | 梅塵八番 | そつと申せばくはつと立千鳥哉 |
| | | | | 声 | 自筆本 | 村千鳥そつと申せばくわつと立 |
| 92 | ぐわらぐわら | ABAB | 1 | 態 | 文化8 | はつ雪やぐわらぐわらさはぐ腹の虫 |
| 93 | ぐわらり | ABリ | 2 | 態 | 文政2 | 石川はぐはらり稲妻さらり哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | 大水のぐわらりと落てかがし哉 |
| 94 | くわんくわん | ABAB | 3 | 態 | 文政6 | 渡られぬ川や名月くはんくはんと |
| | | | | 態 | 文化13 | 大寺や主なし火鉢くわんくわんと |
| | | | | 態 | 享和3 | くわんくわんと炭のおこりし夜明哉 |
| 95 | くんくん | ABAB | 1 | 声 | 文政4 | 花咲て犬もくんくん嘘哉 |
| 96 | けけら | AAラ | 1 | 声・態（複合名詞） | 文政5 | 盗人のかすんでけけら笑ひかな |
| 97 | けそり | ABリ | 1 | 態 | 自筆本 | おち葉してけそりと立や裸蔵 |
| 98 | げそり | ABリ | 1 | 態 | 書簡他 | 茶屋が灯のげそりと暑へりにけり |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 99 | げっそり | AッBリ | 4 | 態 | 文化3 | げつそりと雁はへりけりよしづ茶屋 |
| | | | | 態 | 文化5 | げっそりと夜寒くなりし小家哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | ほし栗のほしべり立やげつそりと |
| | | | | 態 | 享和3 | げつそりとほしへり立ぬ炭俵 |
| 100 | げたげた | ABAB | 2 | 声・態 | 文政4 | 負角力むりにげたげた笑けり |
| | | | | 声・態（複合名詞） | 梅塵八番 | 負角力むりにげたげた笑ひ哉 |
| 101 | げっくり | AッBリ | 4 | 態 | 文化5 | 花ちりてげつくり長くなる日哉 |
| | | | | 態 | 文化6 | 親竹のげつくり痩て立りけり |
| | | | | 態 | 文化10 | 一祭り過てげつくり寒さ哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | げつくりと四条川原の冬がれぬ |
| 102 | けらけら | ABAB | 1 | 声・態 | 文化11 | 稲妻にけらけら笑ひ仏哉 |
| 103 | げらげら | ABAB | 1 | 声・態 | 文政4 | 投られて起てげらげら角力哉 |
| 104 | けろけろ | ABAB | 3 | 態 | 文化5 | すすはきやけろけろ門の梅の花 |
| | | | | 態 | 文化5 | 秋立や雨ふり花のけろけろと |
| | | | | 態 | 享和3 | けろけろと師走月よの榎哉 |
| 105 | けろり | ABリ | 7 | 態 | 文政4 | 鳴た顔けろりかくして猫の恋 |
| | | | | 態 | 文化13 | 大水や大昼顔のけろり咲 |
| | | | | 態 | 文政2 | はつ雪や上野に着ばけろり止 |
| | | | | 態 | 自筆本 | はつ雪や腹拵へはけろり止 |
| | | | | 態 | 文化9 | 夕立やけろりと立し女郎花 |
| | | | | 態 | 文化13 | 名月にけろりと立しかがし哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | おち葉してけろりと立し土蔵哉 |
| 106 | けろりくわん | ABリ＋接尾辞 | 4 | 態 | 文政1 | 山きじや何に見とれてけろりくわん |
| | | | | 態 | 浅黄空 | 夕雉や何に見とれてけろりくわん |
| | | | | 態 | 文化8 | けろりくわんとして雁と柳哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | けろりくわんとして烏と柳哉 |
| 107 | けん | AB | 2 | 声／慣用句 | 文化11 | 山雉のけんもほろろもなかりけり |
| | | | | 声／慣用句 | 文政2 | 時鳥けんもほろろに通りけり |
| 108 | けんけん | ABAB（漢） | 2 | 態（複合名詞） | 文化14 | 日ぐらしのけんけん時や法花村 |
| | | | | 態 | 文政3 | 日ぐらしのけんけん鳴てやけ木哉 |
| 109 | こうこう | ABAB（漢） | 1 | 態 | 文政2 | くはうくはうと穢太が家尻の清水哉 |
| 110 | ごーごー | A―A― | 1 | 声 | 文政7 | 蚊屋のない家はごうごううまく寝る |
| 111 | ごしゃごしゃ | ABAB | 2 | 態 | 文化11 | ごしやごしやと鹿の親子が寝顔哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | 箕の中に子もごしやごしやと霰哉 |
| 112 | こせこせ | ABAB | 1 | 態 | 文化12 | 雁鴨もこせこせ十夜もどり哉 |
| 113 | こそ | AB | 4 | 態 | 文政6 | 鶯のこそと掃溜栄やう哉 |
| | | | | 態 | 文政6 | 鶯のこそと掃溜せせり哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | あばれ蚊のこそと古井に忍びけり |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政5 | 残物のこそ酒盛や夏坐敷 |
| 114 | こそこそ | ABAB | 4 | 態 | 文政3 | 草庵に来てはこそこそ花見哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 蠅打ば蝉もこそこそ去にけり |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | 蠅打ば蝶もこそこそ去にけり |
| | | | | 態 | 文政2 | 窓の雪つんでこそこそばくち哉 |
| 115 | こそり | ABリ | 5 | 態 | 文化4 | 藪脇にこそり咲けり梅（の）花 |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | 物陰にこそりと咲や小なでしこ |
| | | | | 態 | 発句鈔追加 | くらがりやこそり立ても寒い秋 |
| | | | | 態 | 文政7 | 闇がりやこそり立ても冷い秋 |
| | | | | 態 | 文化9 | けさ程やこそりとおちてある一葉 |
| 116 | こっそり | AッBリ | 12 | 態 | 文政3 | 小幟のこつそり暮る坐敷哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 物陰にこつそり咲や小なでしこ |
| | | | | 態 | 文政2 | 藪菊のこつそり独盛りけり |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | 藪菊のこつそり独さかりかな |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政2 | みそざいこつそり越や大井川 |
| | | | | 態 | 文政5 | 水鳥のこつそり暮す小庭哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | こつそりとしてあそぶ也浅黄蝶 |
| | | | | 態 | 文化11 | こすそりと咲ておじやるぞばばが梅 |
| | | | | 態 | 文政4 | こつそりとあれは浅黄の桜哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | こつそりとしてかせぐ也みそざい |
| | | | | 態 | 文政2 | みそざいこつそりとして渡りけり |
| | | | | 態 | 寛政中 | こつそりと隣を借りて小酒盛 |
| 117 | ごちゃごちゃ | ABAB | 4 | 態 | 句稿消息 | ごちやごちやと鹿の親子が寝顔哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | をじ甥の家のごちやごちや夜寒哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | むつまじき家のごちやごちや夜寒哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | ごちやごちやと痩蚊やせ蚤やせ子哉 |
| 118 | こっきり | AッBリ | 2 | 態 | 文化13 | 几山の天窓こつきりほととぎす |
| | | | | 態 | 文政4 | 猫又の頭こつきり木の実哉 |
| 119 | こつこつ | ABAB | 1 | 態 | 文化1 | こつこつと人行過て花のちる |
| 120 | こつぜん | AB＋接尾辞（漢） | 1 | 態 | 文化11 | 溪の梅忽然と咲給ひけり |
| 121 | こてこて | ABAB | 1 | 音 | 文化1 | こてこてと鍋かけしわか菜哉 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 122 | ごてごて | ABAB | 2 | 態 | 志多良他 | わる赤い花のごてごて苔清水 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政4 | 見事也根のない蔓のごてごて実 |
| 123 | ことり | ABリ | 1 | 音・態 | 文政5 | よし切やことりともせぬちくま川 |
| 124 | ごやごや | ABAB | 1 | 音・態 | 株番 | 雁ごやごやおれが噂を致す哉 |
| 125 | ころころ | ABAB | 14 | 態 | 文政8 | 百旦那ころりころころ御慶哉 |
| | | | | 態 | 享和3 | 七日目にころころもどる猫子哉 |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | 両三度ころころ下手な火とり虫 |
| | | | | 声 | 文化7 | 蟀のなくやころころ若い同士 |
| | | | | 声 | 文化三-八年句 | 蟀のころころ鳴や若い同士 |
| | | | | 声 | 文化11 | 蟀のころころ髭を自慢哉 |
| | | | | 声 | 文政3 | 蟀のころころ一人笑ひ哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | はつ雪やころころけぶるたばこ殻 |
| | | | | 態 | 文政2 | 煤竹にころころ猫がざれにけり |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政2 | 大道にころころ犬の日永哉 |
| | | | | 声 | 文化5 | 昼顔にころころ虫の鳴にけり |
| | | | | 態 | 文政4 | よい秋や犬ころ草もころころと |
| | | | | 態 | 寛政中 | ころころと押やり居る冬瓜哉 |
| | | | | 態 | あつくさ | 蓮の露ころころ分じ給ひけり |
| 126 | こーろころ | A—BAB | 1 | 態 | 文政8 | 親芋や縁からねてこをろころ |
| 127 | こーろこーろ | A—BA—B | 1 | 態 | 文政9 | 計袁呂計袁呂茶の子転る団扇哉 |
| 128 | ころり | ABリ | 12 | 態 | 文化11 | 陽炎や縁からころり寝ぼけ猫 |
| | | | | 声 | 浅黄空 | 雉鳴やころり焼野の千代の松 |
| | | | | 声 | 自筆本 | 山雉やころり焼野の千代の松 |
| | | | | 態 | 文政4 | 白露やちんぷんかんのころり哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 団栗やころり子共の云なりに |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政5 | 栗拾ひねんねんころり云ながら |
| | | | | 態 | 文政2 | 大根引拍子にころり小僧哉 |
| | | | | 態 | 文化8 | 百両の松もころりとやけの哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | ぬり盆にころりと蠅の亡りけり |
| | | | | 態 | 文政5 | 贔負菊ころりとまけて仕廻けり |
| | | | | 態 | 文化14 | 升とりの升にころりと木の実哉 |
| | | | | 態 | 文化5 | 念仏のころりと出たる茸哉 |
| 129 | ころりころり | ABリABリ | 4 | 態 | 文政5 | 露の身のころりころりとあがく哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | 瓜西瓜ねんねんころりころり哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 団栗の寝ん寝んころりころり哉 |
| | | | | 態 | 文政5 | 夕霰ねんねんころりころり哉 |
| 130 | ころりころころ | ABリABAB | 1 | 態 | 文政8 | 百旦那ころりころころ御慶哉 |
| 131 | ごろ | AB | 1 | 態（複合名詞） | 文政8 | 夕立に足を打せてごろ寝哉 |
| 132 | ごろごろ | ABAB | 2 | 態（複合名詞） | 文政1 | 永き日や爰にもごろりごろごろ寝 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政1 | 暑き日や爰にもごろりごろごろ寝 |
| 133 | ごろり | ABリ | 20 | 態 | 自筆本 | 袴着て芝にごろりと子の日哉 |
| | | | | 態 | 文政5 | 正月やごろりと寝たるとつとき着 |
| | | | | 態 | 文政1 | 永き日や爰にもごろりごろごろ寝 |
| | | | | 態 | 文政1 | 暑き日や爰にもごろりごろごろ寝 |
| | | | | 態 | 文政3 | 相伴に我らもごろり涅槃哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 其脇にごろり小僧の寝しやか哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | 笠をきた形でごろりと昼寝哉 |
| | | | | 態 | 文政6 | 夕立や蓑きてごろり大鼾 |
| | | | | 態 | 希杖本 | 人並に猿もごろりと昼寝哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | 蝸牛仏ごろりと寝たりけり |
| | | | | 態 | 文政4 | 蝸牛気がむいたやらごろり寝る |
| | | | | 態 | 文化14 | 下冷の蓑をかぶってごろり哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 寝る連に瓢もごろり菊の花 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政1 | ごろり寝や先は扱茶も一莚 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政2 | ごろり寝の紙帳の窓や三ヶの月 |
| | | | | 態（複合名詞） | 梅塵八番 | ごろり寝や紙帳の窓の三ヶの月 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政1 | ごろり寝の顔にかぶせる扇哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化14 | ごろり寝の枕にしたる真瓜哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政1 | ごろり寝や先はことしも仕廻酒 |
| | | | | 態（複合名詞） | 自筆本 | ごろり寝やことしも無事に仕廻酒 |
| 134 | ごろりごろり | ABリABリ | 1 | 態 | 発句鈔追加 | 暑き日や爰にもごろりごろり哉 |
| 135 | ごろにゃん | ABCD | 1 | 声 | 文政6 | ごろにやんと猫も並ぶや衣配 |
| 136 | こんこん | ABAB（漢） | 2 | 声/態 | 文政1 | 霰こんこん触る狐哉 |
| | | | | 態/動詞 | 自筆本 | 来ん来んと諷へる口へあられ哉 |
| 137 | さくさく | ABAB | 5 | 態 | 文政3 | 水さくさく雨拵て御祓哉 |
| | | | | 音・態 | 文化6 | 鶯がさくさく歩く紅葉哉 |
| | | | | 音・態 | 文化9 | さくさくと飯くふ上をとぶ蛍 |
| | | | | 音・態 | 文政7 | さくさくと栗でぬかるや木曽の山 |
| | | | | 音・態 | 文化14 | さくさくと氷かみつる茶漬哉 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 138 | ざくざく | ABAB | 5 | 音・態 | 文化11 | 五月雨ざくざく歩く烏かな |
| | | | | 音・態 | 文化11 | 五月雨にざくざく歩く烏かな |
| | | | | 音・態 | 文化12 | 雀子がざくざく浴る甘茶哉 |
| | | | | 音・態 | 文政2 | ざくざくと雪かき交ぜて田打哉 |
| | | | | 音・態 | 文政5 | ざくざくと雪切交る山田哉 |
| 139 | ざくり | ABリ | 1 | 態 | 文化14 | 露の玉ざくりと分ンじ給ひけり |
| 140 | ざくりざくり | ABリABリ | 3 | 音・態 | 文化11 | 草刈のざくりざくりや五月雨 |
| | | | | 音・態 | 文化10 | 古笠へざくりざくりとこき茶哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | 痩脛へざくりざくりと丸雪哉 |
| 141 | ざっくり | AッBリ | 1 | 態 | 文政1 | 一しめりざつくり浴し虫の声 |
| 142 | ざっくりざくり | AッBリABリ | 1 | 態 | 文化14 | 拾はれぬ栗がざつくりざくり哉 |
| 143 | ささらほさら | AAラBAラ | 1 | 態 | 浅黄空 | 一夜さにさくらはささらほさら哉 |
| 144 | さっ | Aッ | 8 | 態 | 文化8 | 花の木にさつと隠るる忰哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | 冷汁やさつと打込電り |
| | | | | 態 | 文政4 | 里犬のさつととがめるかがし哉 |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | 里犬のさつととがむるかがし哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | 一祭りさつと過けり草の花 |
| | | | | 態 | 文化7 | 寝莚にさつと時雨の明り哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 一日の祝にさつとしぐれ哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | ぬり樽にさつと散たる紅葉哉 |
| 145 | さっさ | AッA | 13 | 態 | 文化5 | なまけ日をさつさと雲雀鳴にけり |
| | | | | 態 | 文化13 | 立際になるやさつさと帰る雁 |
| | | | | 態 | 随斎筆紀 | 連もたぬ雁がさつさと帰りけり |
| | | | | 態 | 自筆本 | 連のない雁やさつさと帰りけり |
| | | | | 態 | 句稿消息 | 連のない雁もさつさと帰りけり |
| | | | | 態 | 文化13 | 短夜をさつさと露の草ば哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | 短夜をさつさと開く桜かな |
| | | | | 態 | 文化13 | 露の世をさつさと青む田づら哉 |
| | | | | 態 | 文化7 | 人鬼の中へさつさと蛍哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 名月のさつさと急ぎ給ふ哉 |
| | | | | 態 | 文政5 | 秋風やさつさと進む田舎飯 |
| | | | | 態 | 文化10 | 山霧のさつさと抜る坐敷哉 |
| | | | | 態 | 句稿消息 | 山霧のさつさと通る坐敷哉 |
| 146 | ざっ | Aッ | 1 | 態 | 文化10 | 庵のすすざつとはく真似したりけり |
| 147 | さっぱり | AッBリ | 1 | 態 | 文化9 | さつぱりと雁はいなして姫小松 |
| 148 | さばさば | ABAB | 4 | 態 | 文化4 | 雁立てさばさばしたる浦辺哉 |
| | | | | 態 | 文化8 | 夕顔の夜もさばさばなくなりぬ |
| | | | | 態 | 我春集 | さばさばと夕顔の夜もなくなりぬ |
| | | | | 態 | 文化6 | 夕顔や世直し雨のさばさばと |
| 149 | ざぶ | AB | 9 | 態 | 文政3 | わか餅やざぶとつき込梅の花 |
| | | | | 態 | 文化13 | けんどんなつむりにざぶと桜哉 |
| | | | | 態 | 文化8 | 白露にざぶとふみ込む烏哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | 子莚にざぶとまぶせる桜哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | 葬をざぶとぬらして枕哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | 向ふずねざぶと切たる芒かな |
| | | | | 態 | 書簡 | 向ふずねざぶとなぐりし芒かな |
| | | | | 態 | 文化10 | 紅葉葉をざぶと踏へて鰒汁 |
| | | | | 態 | 文化10 | 赤い葉をざぶとかぶつて鳴千鳥 |
| 150 | ざぶざぶ | ABAB | 17 | 音・態 | 文政5 | 鶯やざぶざぶ雨を浴て鳴く |
| | | | | 態 | 文化11 | 石川をざぶざぶ渡る雉哉 |
| | | | | 態 | 文化5 | ちる花をざぶざぶ浴る雀哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | 雀らがざぶざぶ浴る甘茶哉 |
| | | | | 音・態（複合名詞） | 文化9 | 昼顔やざぶざぶ汐に馴てさく |
| | | | | 態 | 文化11 | 露ざぶざぶことしも楽に寝と哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | 露ざぶざぶ愛度御代の印かや |
| | | | | 音・態（複合名詞） | 文化13 | 猫洗ふざぶざぶ川や春の雨 |
| | | | | 音・態 | 文政1 | ざぶざぶと泥わらんじの御慶哉 |
| | | | | 音・態 | 浅黄空 | ざぶざぶと泥わらんじで御慶哉 |
| | | | | 音・態 | 文化14 | ざぶざぶと五月雨る也法花原 |
| | | | | 音・態 | 文政3 | ざぶざぶとばか念入て五月雨 |
| | | | | 音・態 | 文政1 | ざぶざぶと白壁洗ふわか葉哉 |
| | | | | 音・態 | 文政3 | 待宵やまたぬ大雨ざぶざぶと |
| | | | | 音・態 | 寛政中 | ざぶざぶと暖き雨ふる野分哉 |
| | | | | 音・態 | 寛政12 | ざぶざぶと萩起直る夜半哉 |
| | | | | 音・態 | 寛政12 | ざぶざぶと萩のきこゆる夜半哉 |
| 151 | ざぶざぶざぶり | ABABABリ | 1 | 音・態 | 文化11 | 呑め喰へと露がざぶざぶざぶり哉 |
| 152 | ざぶり | ABリ | 5 | 音・態 | 文政2 | 水ざぶり仏なりやこそ天窓から |
| | | | | 音・態 | 文政4 | 一文がざぶり浴るや寒の水 |
| | | | | 態 | 文化11 | 畠打やざぶりと浴る山桜 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 態 | 文化12 | ちる梅をざぶりと浴てなく蛙 |
| | | | | 音・態 | 文化11 | 曲り所やざぶりと思へ初時雨 |
| 153 | ざぶりざぶり | ABリABリ | 2 | 音・態 | 寛政中 | ぬくき雨のざぶりざぶりと野分哉 |
| | | | | 音・態 | 文化2 | 大汐にざぶりざぶりと男鹿哉 |
| 154 | ざぶりざぶりざぶり | ABリABリABリ | 1 | 音・態 | 享和3 | ざぶりざぶりざぶり雨ふるかれの哉 |
| 155 | ざんぶり | AンBリ | 1 | 音・態 | 文化12 | ざんぶりと一雨浴て蝉の声 |
| 156 | ざんぶりざぶり | AンBリABリ | 1 | 音・態 | 文化11 | よい世じやと露がざんぶりざぶり哉 |
| 157 | ざっぷり | AッBリ | 1 | 音・態 | 文化14 | 竹の雨ざっぷり浴て猫の恋 |
| 158 | さめざめ | ABA'B | 2 | 態 | 文化5 | 雪うりのさめざめ立りけさの秋 |
| | | | | 態 | 文政6 | 木々のめの春さめざめと小鳥鳴く也 |
| 159 | さらさら | ABAB | 10 | 音・態 | 文政6 | 吹風のさらさら団扇団扇哉 |
| | | | | 音・態 | 文政7 | 庭竹もさらりさらさら団扇哉 |
| | | | | 音・態 | 文化10 | 鬼蓮もさらさら一ツタ哉 |
| | | | | 音・態 | 文政4 | 朝顔の花やさらさらさあらさら |
| | | | | 音・態 | 文化7 | さらさらときのふは青き簾哉 |
| | | | | 態 | 文化4 | 陽炎にさらさら雨のかかりけり |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化2 | 古草のさらさら雨やなく蛙 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化6 | 夕月のさらさら雨やあやめふく |
| | | | | 音・態 | 文化5 | 蚊の声やさらさら竹もそしらるる |
| | | | | 音・態 | 文化7 | そよげそよげさらさら竹のわかいうち |
| 160 | さーらさら | A―BAB | 2 | 音・態 | 文政7 | さあらさら野竹もわかいげんき哉 |
| | | | | 音・態 | 文政4 | 朝顔の花やさらさらさあらさら |
| 161 | さらり | ABリ | 5 | 音・態 | 文政7 | 庭竹もさらりさらさら団扇哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 石川はぐはらり稲妻さらり哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | 春雨やさらりと抜し正月気 |
| | | | | 態 | 文化8 | 下手次の梅もさらりと咲にけり |
| | | | | 態 | 文化9 | 蕣もさらりと咲て松魚哉 |
| 162 | さらりさらり | ABリABリ | 1 | 態 | 文政8 | 笹の葉に稲妻さらりさらり哉 |
| 163 | ざわざわ | ABAB | 2 | 音・態 | 梅塵八番 | ざわざわと女組やら五十雀 |
| | | | | 音・態 | 文政3 | ざわざわし女組やら五十雀 |
| 164 | さんざ | AンA' | 2 | 態 | 文政4 | 鶯もさんざ遊べよ留守の梅 |
| | | | | 態 | 文政中 | 閑古鳥さんざ鳴たら止まいか |
| 165 | ざんざ | AンA | 3 | 態（複合名詞） | 文化13 | ざんざ雨霞のうらを通りけり |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化1 | 折角の汐の干潟をざんざ雨 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政4 | 雷は夏のとふりぞざんざ雨 |
| 166 | じーりじーり | A―BA―B | 1 | 声 | 文化14 | 鳴蝉の朝からじいりじいり哉 |
| 167 | しおしお | ABAB | 1 | 態 | 文政2 | 雀子のしをしをぬれて鳴にけり |
| 168 | しくしく | ABAB | 2 | 態 | 文化10 | 折々は蚤もしくしく夜寒哉 |
| | | | | 態 | 文化8 | 木がらしにしくしく腹のぐあい哉 |
| 169 | しくりしくり | ABリABリ | 2 | 態 | 文政2 | 一ツ蚊のだまってしくりしくり哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | 一ツ蚊のだまりてしくりしくり哉 |
| 170 | じくじく | ABAB | 1 | 態 | 文化13 | 門の雪じくじくしはいとけざまぞ |
| 171 | じっ | Aッ | 8 | 態 | 文化12 | いざこざをじっと見て居る乙鳥哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | じっとして馬に嗅るる蛙哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | じっとして白い飯くふ暑かな |
| | | | | 態 | 寛政中 | 箸持てぢっと見渡る青田哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | じっとして見よ見よ蝉の生れ様 |
| | | | | 態 | 文政8 | 神の鹿じっとして人になでらるる |
| | | | | 態 | 文政5 | 負菊をじっと見直す独かな |
| | | | | 態 | 文化2 | じっとして雪をふらすや牧の駒 |
| 172 | しっかり | AッBリ | 5 | 態 | 文政4 | 善の綱しっかり蝶がすがりけり |
| | | | | 態 | 文化11 | 迷子のしっかり掴むさくら哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 親しらず蠅もしっかりおぶさりぬ |
| | | | | 態 | 文政2 | しっかりと蠅もおぶさる九十川 |
| | | | | 態 | 文政2 | うら壁や貧乏雪のしっかりと |
| 173 | しっくり | AッBリ | 1 | 態 | 文政4 | 拾ひ足袋しっくり合ふが奇妙也 |
| 174 | しとしと | ABAB | 1 | 態 | 文化1 | 汐干潟雨しとしとと暮かかる |
| 175 | しどろもどろ | ABロCBロ | 1 | 態 | 文政1 | 雨に雪しどろもどろのひがん哉 |
| 176 | しぶしぶ | ABAB | 9 | 態 | 文化3 | 春ぞとてしぶしぶ咲し椿哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 寛政1-文化6 | 春ぞとてしぶしぶ咲の椿哉 |
| | | | | 態 | 自筆本 | 春ぞとてしぶしぶに咲く椿哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 出始の蠅やしぶしぶ這畳 |
| | | | | 態 | 文化11 | 渋柿のしぶしぶ花の咲にけり |
| | | | | 態 | 希杖本 | 渋柿の花のしぶしぶ咲にけり |
| | | | | 態 | 発句鈔追加 | 渋柿のしぶしぶ花と成にけり |
| | | | | 態 | 嘉永版 | 渋柿のしぶしぶ花になりにけり |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化12 | 柿崎やしぶしぶ鳴のかんこ鳥 |
| 177 | しゃーしゃー | A―A―（漢） | 5 | 音・態 | 文政6 | 春雨やしあしあとして雪の山 |
| | | | | 音・態 | 文政7 | 春雨やしあしあとして山の雪 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 態 | 文化13 | 叱てもしやあしやあとして蛙哉 |
| | | | | 態 | 浅黄空 | 叱てもしやあしやあとして居蛙 |
| | | | | 態 | 文政3 | 屁をひつてしやあしやあとして草の虫 |
| 178 | じゃじゃ | AA | 1 | 音・態（複合名詞） | 文政7 | じやじや雨の降に御帰り貧乏神 |
| 179 | しゃしゃり | AAリ | 1 | 態（名詞用法） | 希杖本 | 蝶来るや何のしやしやりもない庵へ |
| 180 | しゃらり | ABリ | 3 | 音・態 | 文政6 | 大菊の天窓がぶらりしやらり哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | 時鳥にべもしやらりもなかりけり |
| | | | | 態 | 文政8 | 時鳥にべもしやらりもあればこそ |
| 181 | しゃん | AB | 3 | 態 | 文政2 | 涼しさにしやんと髪結御馬哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | 夕立やしやんと立てる菊の花 |
| | | | | 態 | 文化11 | しやんとした松と並ぶや男星 |
| 182 | しゃんしゃん | ABAB | 3 | 態 | 文政4 | 勝たきでしやんしやん力むわらは哉 |
| | | | | 音・態 | 文政7 | 本馬のしやんしやん渡る氷哉 |
| | | | | 音・態 | 文政1 | しやんしやんと虫もはたおりて星迎 |
| 183 | こしゃん | 接頭辞＋AB | 1 | 態 | 文化1 | 夏菊の小しゃんとしたる月よ哉 |
| 184 | しょぼ | AB | 1 | 態（複合名詞） | 文政1 | しょぼ濡の雁が帰るぞ九十川 |
| 185 | しょぼしょぼ | ABAB | 1 | 態 | 梅塵八番 | 雀子のしよぼしよぼぬれて鳴にけり |
| 186 | しょんぼり | AンBリ | 2 | 態 | 文政1 | しよんぼりと雀にさへもまま子哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | しよんぼりと鳩も五月雨じたく哉 |
| 187 | じろじろ | ABAB | 3 | 態 | 文化1 | 立雁のぢろぢろみるや人の顔 |
| | | | | 声 | 文化10 | 我杖としるやじろじろなく蛙 |
| | | | | 態 | 文化8 | 紅葉たく人をじろじろ仏哉 |
| 188 | しん | AB | 5 | 態 | 文化8 | 里しんとしてづんづと凧上りけり |
| | | | | 態 | 文政4 | 梅しんとしておのづから頭が下る |
| | | | | 態 | 文化9 | しんとして青田も見ゆる簾哉 |
| | | | | 態 | 文政5 | 行行し大河はしんと流れけり |
| | | | | 態 | 文化11 | しんとしてわか葉の赤い御寺哉 |
| 189 | しんかん | ABCB（漢） | 5 | 態 | 文政6 | 武士町やしんかんとして明の春 |
| | | | | 態 | 文政2 | かすむ日やしんかんとして大坐敷 |
| | | | | 態 | 文化11 | 下戸村やしんかんとして梅の花 |
| | | | | 態 | 文政6 | 堺丁やしんかんとして秋の立 |
| | | | | 態 | 文政7 | 凧や常灯明のしんかんと |
| 190 | しんしん | ABAB（漢） | 11 | 態 | 文政5 | 灯のしんしん今や寒が入 |
| | | | | 態 | 文政4 | 夜の霜しんしん耳は蝉の声 |
| | | | | 態 | 文政4 | しんしんとすまし雑煮や二人住 |
| | | | | 態 | 文化12 | しんしんとしんらん松の春の雨 |
| | | | | 態 | 文化7 | しんしんとゆりの咲けり鳴雲雀 |
| | | | | 態 | 文政5 | 石菖のしんしんとして鼾哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 行灯のしんしんとして夜寒哉 |
| | | | | 態 | 文化14 | 庵の夜はしんそこ寒ししんしんと |
| | | | | 態 | 文化14 | しんしんと心底寒し新坊主 |
| | | | | 態 | 文政5 | しんしんとしんそこ寒し小行灯 |
| | | | | 態 | 文政2 | 名月や下戸はしんしんしんの坐に |
| 191 | しんしんしーん | ABABA―B（漢） | 1 | 態 | 文化12 | 寒くなる秋をしんしんしいん哉 |
| 192 | ずい | Aイ | 3 | 態 | 文政3 | 畠並にずいと霜げし草家哉 |
| | | | | 態 | 文化12 | 田の中にづいと道つく十夜哉 |
| | | | | 態 | 文政6 | 大和路やづいと御免の長昼寝 |
| 193 | すいすい | ABAB | 3 | 声 | 希杖本 | 陽炎にすいすい猫の鼾かな |
| | | | | 態 | 文化3 | すいすいと蝶も嫌ひし都哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | すいすいと渡れば渡る氷哉 |
| 194 | ずかずか | ABAB | 1 | 態 | 文化10 | 大雪の山をづかづか一人哉 |
| 195 | すくり | ABリ | 1 | 態 | 文化6 | 夕立にすくりと森の灯哉 |
| 196 | すっくり | AッBリ | 5 | 態 | 文化13 | 夕立やすつくり立る女郎花 |
| | | | | 態 | 発句鈔追加 | 夕立やすつくり立し女郎花 |
| | | | | 態 | 文化5 | 名月にすつくり立し榎哉 |
| | | | | 態 | 享和3 | 夕時雨すつくり立や田鶴 |
| | | | | 態 | 享和3 | むら雨にすつくり立や大根引 |
| 197 | すじりもじり | ABリCBリ | 1 | 態 | 文政4 | すぢりもじりなりたきままや野なでしこ |
| 198 | すたすた | ABAB | 1 | 態（複合名詞） | 文化11 | 朝ッからすたすた坊が頭巾哉 |
| 199 | ずっ | Aッ | 1 | 態 | 文政7 | 目のさやをずつとはづしてとんぼ哉 |
| 200 | すっかり | AッBリ | 1 | 態 | 希杖本 | すつかりと見たばかりでも竹の子ぞ |
| 201 | ずっくり | AッBリ | 1 | 態 | 文化1 | 青柳のづつくりみゆる夜明哉 |
| 202 | すったもじった | AッBCDッB | 1 | 態 | 文政4 | 新米やすつたもぢつたいふうちに |
| 203 | すっぱり | AッBリ | 1 | 態 | 文政5 | 井の底もすつぱりかはく月よ哉 |
| 204 | ずぶ | AB | 4 | 態（複合名詞） | 文化13 | づぶ濡の仏立けりかんこ鳥 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化14 | づぶ濡にぬれてまじまじ蜻蛉哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政7 | づぶさしの馬除柳青みけり |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政3 | づぶ濡れの大名を見る巨燵哉 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 205 | ずっぷり | AッBリ | 6 | 態 | 文化11 | 陽炎にずつぷりぬれし仏哉 |
| | | | | 態 | 文化3 | 鶯にずつぷりぬれし垣ね哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | 大雨やずつぷり濡て帰る雁 |
| | | | | 態 | 文政5 | ずつぷりとぬれた所が春の山 |
| | | | | 態 | 文化11 | ずつぷりと濡て卯の花月よ哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | はつ雪やづつぷりと湯に入てから |
| 206 | すぽん | ABン | 1 | 態 | 文政1 | 月のさす穴やすぽんと厚衾 |
| 207 | すやすや | ABAB | 3 | 音・態 | 文化13 | 凧抱たなりですやすや寝たりけり |
| | | | | 音・態 | 浅黄空 | 凧抱てすぐにすやすや寝る子哉 |
| | | | | 音・態 | 文政2 | 蚊の声に馴てすやすや寝る子哉 |
| 208 | ずらり | ABリ | 6 | 態 | 文化9 | 松苗と見し間にづらり切られけり |
| | | | | 態 | 文政4 | 紅粉付てずらり並ぶや朝乙鳥 |
| | | | | 態 | 文化14 | 蚊の声やずらり並んで留主長屋 |
| | | | | 態 | 文化10 | 四五寸の鶏頭づらり赤らみぬ |
| | | | | 態 | 文化13 | 榾の火や仏もずらり並びつつ |
| | | | | 態 | 文化12 | 青嵐吹やずらりと植木売 |
| 209 | するする | ABAB | 1 | 音・態 | 文化11 | けふの日やするする粥もおがまるる |
| 210 | すれすれ | ABAB | 1 | 態 | 自筆本 | 振袖にすれすれ山の青むせ |
| 211 | ずん | Aン | 1 | 態 | 文化14 | 鳴立てずんと昔の夕かな |
| 212 | ずんず | AンA | 8 | 態 | 文化8 | 里しんとしてづんづと凧上りけり |
| | | | | 態 | 文化5 | 陽炎のづんづと伸る葎哉 |
| | | | | 態 | 文化6 | 有明のずんづとさして雪げ哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 戸を〆てづんづと寝たり蝸牛 |
| | | | | 態 | 文化11 | 棒きりのづんづと秋の夕哉 |
| | | | | 態 | 発句鈔追加 | 大菊の秋もずんずとくれにけり |
| | | | | 態 | 文化14 | うす壁にづんづと寒が入にけり |
| | | | | 態 | 自筆本 | うす壁にづんづと寒が入りけり |
| 213 | ずんずん | AンAン | 2 | 態 | 文政3 | 放れ家やずんずん別の寒が入 |
| | | | | 態 | 文政1 | ずんずんとぼんの凹から寒さ哉 |
| 214 | ずーんずーん | AーンAーン | 2 | 音・態 | 文政7 | 寝た下を凧づうんづうん哉 |
| | | | | 音・態 | 文政9 | 寝た下へ凧づうんづうん哉 |
| 215 | ずんぐり | AンBリ | 2 | 態（複合名詞） | 文政3 | 雪の日にづんぐり角力さかりけり |
| | | | | 態（複合名詞） | 梅塵八番 | 雪の日にづんぐり角力盛り哉 |
| 216 | そ | A | 5 | 態 | 文化7 | 花びらがそとさはつても涙哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | そと置て子に捨るはすや栗庭 |
| | | | | 態 | 文化10 | そとすればぐわくりと炭のくだけけり |
| | | | | 態 | 文化11 | そとすればくわつと千鳥の飛にけり |
| | | | | 態（複合名詞） | 享和3 | 古きてそ屁はよけ行烏瓜 |
| 217 | そっ | Aッ | 10 | 態 | 文政1 | 闇紛れそつと見に来る幟哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | そつと鳴け隣は武士ぞ時鳥 |
| | | | | 態 | 文政7 | 昼の蚊や几の下よりそつと出る |
| | | | | 態 | 文化10 | 雷もそつとおちにき女郎花 |
| | | | | 態 | 志多良 | 雷もそつとおちしか女郎花 |
| | | | | 態 | 文政2 | そつと申せばくつと立千鳥哉 |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | そつと申せばくはつと立千鳥哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 村千鳥そつと申せばはつと立 |
| | | | | 態 | 自筆本 | 村千鳥そつと申せばくはつと立 |
| | | | | 態 | 文化12 | 枯芦や身程にそつと三ヶの月 |
| 218 | そー | Aー | 1 | 態 | 嘉永版 | 若水やそうとつき込む梅の花 |
| 219 | ぞくぞく | ABAB（漢） | 6 | 態 | 文化3 | 葬のぞくぞく生て野分哉 |
| | | | | 態 | 享和2 | ぞくぞくと所むさいのわらび哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | 露ちるや若竹の子のぞくぞくと |
| | | | | 態 | 文化10 | ぞくぞくと自然生たる鶏頭哉 |
| | | | | 態 | 文化5 | ぞくぞくと人のかまはぬ茸哉 |
| | | | | 態 | 文化6 | ぞくぞくと鼠の穴もきのこ哉 |
| 220 | ぞくりぞくり | ABリABリ（漢） | 1 | 態 | 文政10 | 葬やぞくりぞくりと二番生へ |
| 221 | そこそこ | ABAB | 1 | 態 | 梅塵八番 | 蠅打ば蝶もそこそこ去にけり |
| 222 | ぞっ | Aッ | 8 | 態 | 文化10 | 秋の風俄にぞつとしたりけり |
| | | | | 態 | 文化10 | 後からぞつとするぞよ露時雨 |
| | | | | 態 | 文政4 | ぞつとした鹿から逃げてくれにけり |
| | | | | 態 | 文政4 | ぞつとして逃ればしかも追にけり |
| | | | | 態 | 文化14 | しなのぢやそばの白さもぞつとする |
| | | | | 態 | 文政7 | 山畠やそばの白さもぞつとする |
| | | | | 態 | 文化14 | そば咲やその白ささへぞつとする |
| | | | | 態 | 文政3 | 見るにさへぞつとする也寒の水 |
| 223 | そっくり | AッBリ | 8 | 態 | 文政7 | なりふりも親そつくりの子猫哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 法の世や蛇もそつくり捨衣 |
| | | | | 態 | 文政1 | 蚊柱のそつくりするや畠迄 |
| | | | | 態 | 文政1 | 蚊柱もそつくりするや畠迄 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 態 | 真蹟 | 蚊柱のそつくりするや隣迄 |
| | | | | 態 | 随斎筆紀 | 満月をそつくり置て冬籠 |
| | | | | 態 | 文政1 | そつくりと蛙の乗し一葉哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | そつくりと大津の鬼や寒念仏 |
| 224 | そっくりそっくり | AッBリAッBリ | 1 | 態 | 文政8 | 踊る声母そつくりそつくりぞ |
| 225 | そよ | AB | 4 | 音・態 | 文化12 | ねはん会やそよとなでしこ女郎花 |
| | | | | 態 | 文化13 | 茶けぶりのそよと不運のぼたん哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | 湯けぶりやそよとあしらふ初時雨 |
| | | | | 態 | 発句鈔追加 | 湯けぶりがそよとあしらふ初時雨 |
| 226 | そよそよ | ABAB | 24 | 音・態 | 文化9 | はこねぢや麦もそよそよ遠干潟 |
| | | | | 音・態 | 文化14 | 朝飯を髪にそよそよ猫の恋 |
| | | | | 音・態 | 文化13 | 汚坊が門もそよそよ青柳ぞ |
| | | | | 音・態 | 文政2 | 其次の稈もそよそよ青田哉 |
| | | | | 音・態 | 希杖本別本 | 下手植の稲もそよそよ青みけり |
| | | | | 音・態 | 文化7 | 風そよそよ今始たる鵜舟哉 |
| | | | | 音・態 | 文化7 | 草そよそよ簾のそよりそより哉 |
| | | | | 音・態 | 文化4 | 風そよそよ空しき窓をとぶ螢 |
| | | | | 音・態 | 文化7 | 陶の笹もそよそよ松魚哉 |
| | | | | 音・態 | 文化11 | 小ぼたんもそよそよ花の庵哉 |
| | | | | 音・態 | 文化7 | 古舟もそよそよ合歓のもやう哉 |
| | | | | 音・態 | 文政4 | こやし塚そよそよけむる野分哉 |
| | | | | 音・態 | 文化7 | 白露にそよそよ例のけぶり哉 |
| | | | | 音・態 | 文化10 | 盆が来てそよそよ草もうれしやら |
| | | | | 音・態 | 句稿消息 | 盆が来てそよそよ草もうれしかろ |
| | | | | 音・態 | 志多良 | 盆が来てそよそよ草もうれしさう |
| | | | | 音・態 | 文化7 | 草原にそよそよ赤い灯ろ哉 |
| | | | | 音・態 | 文政4 | ほすすきもそよそよ神もきげん哉 |
| | | | | 音・態 | 梅塵八番 | 穂芒のそよそよ神もきげん哉 |
| | | | | 音・態 | 文化7 | 四五本の稲もそよそよ穂に出ぬ |
| | | | | 音・態 | 文政7 | ひつぢ穂のそよそよ五尺ゆたかかな |
| | | | | 音・態 | 文政7 | そよそよと江戸気に染ぬ柳哉 |
| | | | | 音・態 | 文化6 | そよそよと世直し風やとぶ螢 |
| | | | | 音・態 | 文政1 | 七夕や人のなでしこそよそよと |
| 227 | そより | ABリ | 1 | 音・態 | 文化11 | 勝菊やそよりともせずおとなしき |
| 228 | そよりそより | ABリABリ | 1 | 音・態 | 文化7 | 草そよそよ簾のそよりそより哉 |
| 229 | そろそろ | ABAB | 8 | 態 | 文化5 | そろそろと蝶も雀も汐干哉 |
| | | | | 態 | 享和3 | そろそろとよそは旅立田植笠 |
| | | | | 態 | 文化3 | 見知られし雁もそろそろ立田哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | 下手植の稲もそろそろ青みけり |
| | | | | 態 | 文政版 | 蝸牛そろそろ登れ富士の山 |
| | | | | 態 | 文政4 | 子を連て猫もそろそろ御祓哉 |
| | | | | 態 | 文化6 | さらしなもそろそろ秋の雨よ哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | みだ頼めへびもそろそろ穴に入 |
| 230 | そろりそろり | ABリABリ | 2 | 態 | 文政7 | かはほりに夜ほちもそろりそろり哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 朝顔やそろりそろりと世を送り |
| 231 | ぞろぞろ | ABAB | 3 | 態 | 文政1 | 春風にぞろぞろうかれ参哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 虫ぼしの虫やぞろぞろ隣から |
| | | | | 態 | 文化11 | ぞろぞろと寒さまけせる蜻蛉哉 |
| 232 | ぞろり | ABリ | 7 | 態 | 希杖本 | 暑き日や蚕もぞろり食休 |
| | | | | 態 | 文化14 | 蓮ぞろり並や六の拍子木に |
| | | | | 態 | 文政8 | 稲妻やぞろり寝ころぶ六十顔 |
| | | | | 態 | 希杖本 | 伏見のやぞろりと霞む夕旅籠 |
| | | | | 態 | 文政7 | 目出度さはぞろりと並ぶ雲の峰 |
| | | | | 態 | 文化9 | 萍にぞろりと並ぶ乙鳥哉 |
| | | | | 態 | 文政6 | 煤過やぞろりととぼる朱蝋燭 |
| 233 | たっぷり | AッBリ | 3 | 態 | 文化5 | 草の葉やたっぷりぬれて蝉の鳴 |
| | | | | 態 | 文政7 | 月入て後もたっぷり一夜哉 |
| | | | | 態 | 浅黄空 | たっぷりと霞と隠れぬ卒塔婆哉 |
| 234 | だぶだぶ | ABAB | 2 | 声／態 | 文化13 | 常留主の門にだぶだぶ清水哉 |
| | | | | 音・態（複合名詞） | 文化11 | 赤椀のだぶだぶ酒を野分哉 |
| 235 | だぶり | ABリ | 2 | 音・態 | 文化14 | 露だぶりおくやことしも米の飯 |
| | | | | 音・態 | 文化14 | 露だぶり世がよい上に又よいぞ |
| 236 | だぶりだぶり | ABリABリ | 2 | 音・態 | 文政1 | 山の湯やだぶりだぶりと日の長き |
| | | | | 音・態 | 文化6 | 夕風呂のだぶりだぶりとかすみ哉 |
| 237 | たよたよ | ABAB | 1 | 態 | 享和2 | 片照りの軒にたよたよほたる哉 |
| 238 | たらたら | ABAB | 1 | 態（複合名詞） | 文政1 | 小便のたらたら下や杜若 |
| 239 | たらりたらり | ABリABリ | 1 | 態 | 文化12 | あまり湯のたらりたらりと日永哉 |
| 240 | だらだら | ABAB | 2 | 態 | 文化11 | 行雲やだらだら急に夜がつまる |
| | | | | 態（複合名詞） | 寛政中 | なの花にだらだら下りの日暮哉 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 241 | だらり | ABリ | 2 | 態 | 文化14 | 暇さうな里也梅のだらり咲 |
| | | | | 態 | 書簡 | 暇さうな門也梅のだらり咲 |
| 242 | たん | AB | 9 | 態 | 希杖本 | 御降りをたんといただく屑屋哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | 草茎をたんと加へよ此後は |
| | | | | 態 | 文化12 | 欲面の朝顔たんと咲にけり |
| | | | | 態 | 文化11 | 我塚にたんとさけよ女郎花 |
| | | | | 態 | 文政4 | 秋はぎやこぼしたよりはたんと咲 |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | 秋はぎやこぼれたよりはたんと咲 |
| | | | | 態 | 文政7 | 金のなる木をたんと持紙子哉 |
| | | | | 態 | 文化12 | 鴨も菜もたんとな村のみじめさよ |
| | | | | 態 | 栗本雑記五 | 鴨も菜もたんとな村のみじめ哉 |
| 243 | ち | A | 14 | 態 | 文政5 | ちとの間にはやわか水でなかりけり |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | かざり餅仏の膝をちとかりる |
| | | | | 態 | 文化8 | ちとの間にかすみ直すや山の家 |
| | | | | 態 | 文政4 | 蛙にもちとなめさせよ甘茶水 |
| | | | | 態 | 文政3 | ちとの間の名所也けり夕祓 |
| | | | | 態 | 文政4 | 両国やちと涼むにも迷子札 |
| | | | | 態 | 文政7 | 草庵にちと釣りあはぬぼたん哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | ちと計おれに打たせよ小夜砧 |
| | | | | 態 | 文政5 | えんま王笑い菌をちと進れ |
| | | | | 態 | 文政7 | ちとたらぬ僕や隣の雪もはく |
| | | | | 態 | 文政7 | ちとたらぬ僕か隣の雪もはく |
| | | | | 態 | 文化2 | ちとの間は我宿めかすおこり炭 |
| | | | | 態 | 文政8 | 長しけをちとも苦にせぬ水鶏哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | 洛陽やちとも曲らぬ初時雨 |
| 244 | ちち | AA（漢） | 3 | 声／名詞 | 享和3 | 露しもや丘の雀もちちとよぶ |
| | | | | 声／態 | 文政版 | みそさざいちちといふても日が暮る |
| | | | | 声／態 | 版本題叢 | みそさざいちちといふても日は暮る |
| 245 | ちちちち | AAAA | 1 | 声／名詞 | 寛政中 | ちちちちと鬼の子もなく雨夜哉 |
| 246 | ちい | Aイ | 1 | 態 | 梅塵八番 | はつ雪やあかれぬ内にちいと止 |
| 247 | ちっ | Aッ | 7 | 態 | 遺稿 | おちつきにちつと寝て見る小鴨哉 |
| | | | | 態 | 句稿消息他 | おちつきにちつと寝て見る小鴨哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | はつ雪やあかれぬ内にちつと止 |
| | | | | 声 | 文化1 | みそさざいちつといふても日の暮る |
| | | | | 声／態 | 文政4 | しんぼしてちつとも鳴ぬ蟷螂哉 |
| | | | | 態 | 文化12 | もちつとで手がとどく也天の川 |
| | | | | 態 | 文化12 | もちつとで乗れさう也月の雲 |
| 248 | ちくちく | ABAB | 1 | 態 | 梅塵八番 | ちくちくな露も呑さず菊の花 |
| 249 | ちぐはぐ | ABCB | 5 | 態 | 文化2 | ちぐはぐの下駄から春は立にけり |
| | | | | 態 | 文化11 | ちぐはぐの菜種も花と成にけり |
| | | | | 態 | 文化10 | ちぐはぐにつつさす稲も青みけり |
| | | | | 態 | 文化12 | 青ばしのちぐはぐなるも祭り哉 |
| | | | | 態 | 文化12 | ちぐはぐの芒の箸も祝哉 |
| 250 | ちぴちぴ | ABAB | 2 | 態 | 文政6 | せはしなや門をちぴちぴしぐれ捨 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化7 | 初時雨ちぴちぴ舞のよりにけり |
| 251 | ちーぴちーぴ | A—BA—B | 1 | 態 | 文政8 | ちいぴちいぴ天の雪迄ききん哉 |
| 252 | ちまぢま | ABA'B | 2 | 態 | 享和2 | ちまぢまと住すましたり梅わか菜 |
| | | | | 態 | 文化11 | ちまぢまとした海もちぬ石蕗の花 |
| 253 | ちやくや | ABCB | 2 | 声・態 | 文政7 | 門雀巣の披露かよちやくやと |
| | | | | 声・態 | 文化12 | 雀子や銭投る手もちやくやと |
| 254 | ちゃん | AB | 1 | 態 | 文政5 | 福助がちやんと居てぼたん哉 |
| 255 | ちよちよ | ABAB | 3 | 声 | 文政5 | 時鳥ちよちよ我をきめつける |
| | | | | 声 | 文化13 | 喰役や虫もはたおるちよちよと |
| | | | | 声 | 文政版 | きき給へ竹の雀もちよちよと |
| 256 | ちよちよちよ | ABABAB | 1 | 声／名詞 | 文化1 | 子雀はちよちよちよと鳴にけり |
| 257 | ちょ | A | 4 | 態 | 文政4 | かざり餅仏の膝をちよとかりる |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | 蛙にもちよとなめさせよ甘茶水 |
| | | | | 態 | 文化13 | 初蝉のちよと鳴て見し柱哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | 六ヅかしやちよとした山も時雨雲 |
| 258 | ちょい | Aイ | 25 | 態 | 文化13 | 鶯がちよいと隣の序哉 |
| | | | | 態 | あつくさ | 鶯のちょいと隣の序哉 |
| | | | | 声・態 | 文化13 | 菜の花やちよいと泊てなく鼠 |
| | | | | 態 | 文政5 | 菊畠の木札もちよいと夏書哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 花つむや扇をちよいとぼんの凹 |
| | | | | 態 | 文化13 | 今葺たあやめにちよいと乙鳥哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | 乙鳥のちよいと引つく幟哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | ぼのくぼに扇をちよいと小僧哉 |
| | | | | 態 | 文化12 | 菊せせる御尻へちよいと団扇哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | さく花もちよいと蚊やりのそよぐ哉 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 態 | 希杖本他 | す咄のあいそにちよいと蚊やり哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | 夜咄のあいそにちよいと蚊やり哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 大雨の敷居にちよいと蚊やり哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | 盃をちよいと置たるぼたん哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 盃をちよいと乗せたるぼたん哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 馬柄杓にちよいと葎咲にけり |
| | | | | 態 | 文政4 | 稲妻のちよいとあしらふ網火哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | 葬のちよいと咲たるかがし哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | 行灯にちょいと鳴けり蚕 |
| | | | | 態 | 文化11 | 菊垣にちよいとさしたり小脇差 |
| | | | | 態 | 文化14 | 鍔口にちよいと加へし紅葉哉 |
| | | | | 態 | 文化12 | はつ霜の草へもちよいと御酒哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | 門先にちよいとうづまく木のは哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | 猫の子のちよいと押へる木の葉かな |
| | | | | 態 | 文化12 | 猫の子がちよいと押へるおち葉哉 |
| 259 | ちょいちょい | AイAイ | 2 | 態 | 文化13 | かはほりのちよいちよい出たり米瓢 |
| | | | | 態 | 文化12 | 風のおち葉ちよいちよい猫が押へけり |
| 260 | ちょっ | Aッ | 18 | 態 | 文化12 | 野菜つみちよつとかすんでみせにけり |
| | | | | 態 | 文政2 | 藪の雪ちよつととけるもけむり哉 |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | 藪の雪ちよつととけるもけぶり哉 |
| | | | | 態 | 文政9 | 相伴に小僧もちよつと涅槃哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 鶯やちよつと来にも親子連 |
| | | | | 態 | 文政1 | 江戸蛙一寸も迹へ引ぬかや |
| | | | | 態 | 文政7 | 一寸寝てするべつたりの身寄虫哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 一寸寝るふりをしている身寄虫哉 |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | ぼのくぼに扇をちよつと小僧哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | 井の底をちよつと見て来る小てふ哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | はつ蝉や馬のつむりにちよつと鳴 |
| | | | | 態 | 文化14 | 行灯にちよつと鳴けり青い虫 |
| | | | | 態 | 文化14 | 湖をちよつと泳しいなご哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | 水鉢にちよつと泳ぎしいなごかな |
| | | | | 態 | 文化13 | 柊にちよつと春立月夜哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | 柊にちよつと春立ばかり哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | おちつきに一寸と寝て見る小鳴哉 |
| | | | | 態 | 発句集続篇 | 一寸とした藪も初午太鼓哉 |
| 261 | ちょっちょっ | AッAッ | 1 | 声/音 | 文化11 | みそざいちよつちよつと何がいまいまし |
| 262 | ちょん | Aン | 3 | 態 | 文政2 | ひな棚にちよんと直りし小猫哉 |
| | | | | 声・態 | 文政1 | 雀子や仏の肩にちよんと鳴 |
| | | | | 態 | 文化12 | 菜の花にちよんと蛙の居りけり |
| 263 | ちょんちょん | AンAン | 1 | 態 | 文化11 | 下手虫のちよんちよん機をおりにけり |
| 264 | ちょう | AB（漢） | 1 | 態 | 文化1 | 松の葉の丁と立けり百合の花 |
| 265 | ちょうちょう | ABAB(漢) | 1 | 態 | 志多良 | てうてうと大材木の下わらび |
| 266 | ちょこちょこ | ABAB | 3 | 態 | 文政9 | 筆の先ちよこちよこなめる小てふ哉 |
| | | | | 態 | 文政5 | 馬の耳ちよこちよこなぶるとんぼ哉 |
| | | | | 態 | 文政5 | ひよ鳥のちよこちよこ見廻ふかけ葉哉 |
| 267 | ちょぼちょぼ | ABAB | 9 | 態 | 文政1 | 鶴形の雪のちよぼちよぼわかなつみ |
| | | | | 音・態 | 文化10 | 片脇に雨のちよぼちよぼ日永哉 |
| | | | | 音・態 | 浅黄空 | 貝殻の不二がちよぼちよぼ春の雨 |
| | | | | 態 | 文政1 | 雪国の雪もちよぼちよぼ残りけり |
| | | | | 態 | 文化10 | 薪ちよぼちよぼ遠山作る秋の暮 |
| | | | | 態 | 志多良他 | 柴ちよぼちよぼ遠山作る秋の暮 |
| | | | | 態 | 文化12 | 焼みそをちよぼちよぼ乗せる紅葉哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | 炭竈のちよぼちよぼけぶる長閑さよ |
| | | | | 態 | 文化12 | ちよぼちよぼと小峰並べる小雲哉 |
| 268 | ちょんぼり | AンBリ | 6 | 態 | 文政4 | 掃切た庭にちよんぼりぼたん哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | 木兎が杭にちよんぼり夜寒哉 |
| | | | | 態 | 志多良他 | 木兎が株にちよんぼり夜寒哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | ちよんぼりと不二の小脇の柳かな |
| | | | | 態 | 文化13 | ちよんぼりと鷺も五月雨じたく哉 |
| | | | | 態 | 文化14 | ちよんぼりと雪の明りや後架道 |
| 269 | ちょぽちょぽ | ABAB | 1 | 態 | 文化12 | ちょぽちょぽと茶の子焼るる紅葉哉 |
| 270 | ちょっぽり | AッBリ | 1 | 態 | 文政7 | 大天狗の鼻やちよつぽりかたつむり |
| 271 | ちょろちょろ | ABAB | 4 | 態 | 文政4 | 御鼠ちよろちよろ萍渡り哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化2 | 酒冷すちよろちよろ川の槿哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 享和3 | 桶あてるちよろちよろ滝や蚊の声 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化1 | 捨杵のちよろちよろ水や春の雨 |
| 272 | ちらちら | ABAB | 17 | 態 | 梅塵八番 | どぶ板や火かげちらちら春の雪 |
| | | | | 態 | 文化3 | 染色の傘のちらちら汐干哉 |
| | | | | 態 | 文化3 | なの花や灯のちらちらに小雨する |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 態 | 文政4 | 香煎の足しにちらちら桜哉 |
| | | | | 態 | 浅黄空 | 門桜ちらちら散るが仕事哉 |
| | | | | 態 | 発句鈔追加 | 玉川の萩もちらちら夕祓 |
| | | | | 態 | 文化7 | 草花のちらちら見えてう舟哉 |
| | | | | 態 | 享和3 | 雨灰汁に月のちらちら茂り哉 |
| | | | | 態 | 享和3 | 灯ちらちらどの顔つきも夜寒哉 |
| | | | | 態 | 文化8 | 月ちらちら野分の月の暑哉 |
| | | | | 態 | 文化8 | 生あつい月がちらちら野分哉 |
| | | | | 態 | 我春集 | なまあつき月のちらちら野分哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | 稲妻やちらちら例の鳥辺山 |
| | | | | 態 | 文政4 | 雪ちらちら一天に雲なかりけり |
| | | | | 態 | 自筆本 | 雪ちらちら一天雲はなかりけり |
| | | | | 態 | 寛政6 | 灯ちらちら疱瘡小家の吹雪哉 |
| | | | | 態 | 文化14 | はつ空の祝儀や雪のちらちらと |
| 273 | ちらり | ABり | 5 | 態 | 文政3 | 御降りの祝儀に雪もちらり哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | 月ちらり鶯ちらり夜は明ぬ |
| | | | | 態 | 浅黄空 | 月ちらり鶯ちらり夜が明る |
| | | | | 態 | 文政2 | 人ちらり木の葉もちらりすがれ栗 |
| | | | | 態 | 文政2 | 人ちらり木の葉もちらりほらり哉 |
| 274 | ちらりちらり | ABりABり | 4 | 態 | 文政7 | さくら葉もちらりちらりや鮎さびる |
| | | | | 態 | 文政2 | 雪ちらりちらり冬至の祝儀哉 |
| | | | | 態 | 文政6 | 雪ちらりちらり見事な月夜哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | 汁鍋にちらりちらりと螢かな |
| 275 | ちらほら | ABCB | 1 | 態 | 文化14 | 梅さくやちらほらちゑの文殊村 |
| 276 | ちらりほらり | ABりCBり | 6 | 態 | 文政7 | 挑灯もちらりほらりやはつ烏 |
| | | | | 態 | 文政6 | 出代のより屑ちらりほらり哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 蚊もちらりほらり是から老が世ぞ |
| | | | | 態 | あつくさ | 蚊ちらりほらり是から老が世ぞ |
| | | | | 態 | 文政2 | 落る葉もちらりほらりやすがれ栗 |
| | | | | 態 | 文政2 | 人ちらり木の葉もちらりほらり哉 |
| 277 | ちん | AB | 1 | 音 | 文政5 | 風鈴はちんとも云ず蝉の声 |
| 278 | ちんちん | ABAB | 2 | 音・態 | 文政7 | 埋火や白湯もちんちん夜の雨 |
| | | | | 音（複合名詞） | 文政6 | 雪ちるやちんちん鴨の神参 |
| 279 | ちんちんころりん | ABABCDリン | 1 | 声／態 | 文政8 | 松虫や素湯もちんちんころりんと |
| 280 | つい | AB | 22 | 態 | 文化1 | 蚊いぶしのつひ聳えけり角田川 |
| | | | | 態 | 文化13 | はつ螢ころぶはずみについそれる |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政7 | 痩脛は蚊も嫌ふやらつい通り |
| | | | | 態 | 浅黄空 | へろへろの神や雛についとむく |
| | | | | 態 | 文政4 | 鶯や一鳴半でついと立 |
| | | | | 態 | 自筆本 | 鶯や一声半でついと立 |
| | | | | 態 | 文化11 | まめな尻ついと並る乙鳥哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | 加賀どのの御先をついと雉哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 親蛙ついと横坐に通りけり |
| | | | | 態 | 文政5 | 野談義をついととりまく小蝶哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 棚捜してついと行く小てふ哉 |
| | | | | 態 | 文政5 | わか草やついとほけたる町の縁 |
| | | | | 態 | 文化13 | 三ヶ月や梅からついと本尊へ |
| | | | | 態 | 文政1 | はつ螢ついとそれたる手風哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | あばれ蚊のついと古井に忍びけり |
| | | | | 態 | 文化12 | 鳴蝉や袂の下をついととぶ |
| | | | | 態 | 文化13 | 笋のついと揃も揃たよ |
| | | | | 態 | 文化3 | 雁下りてついと夜に入る小家哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | 戸口迄ついと枯込野原哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | 御烏もついと並ぶや煤祝 |
| | | | | 態 | 享和3 | あたら日のついと入けり帰り花 |
| | | | | 態／名詞 | 文化3 | 古垣や朔日しまの秋の風 |
| 281 | ついつい | ABAB | 19 | 態 | 文化9 | 掌についつい育つ雀哉 |
| | | | | 態 | 文化14 | 恥かかぬうちについつい帰る雁 |
| | | | | 態 | 文化7 | 五本草のついつい夜はへりぬ |
| | | | | 態 | 文化7 | 藪竹もついつい四月八日哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | 萍のついつい人がきらひやら |
| | | | | 態 | 文政7 | 蟻塚の中やついついことし竹 |
| | | | | 態 | 文化12 | 蜩やついつい星の出やうに |
| | | | | 態 | 文化9 | 竹ついつい天にさはらぬ気どり哉 |
| | | | | 態 | 文化6 | 薮入や桐の育ちもついついと |
| | | | | 態 | 文政2 | ついついと棒を引ても吉書哉 |
| | | | | 態 | 文化4 | ついついと草に立たる春日哉 |
| | | | | 態 | 文化7 | ついついと常正月ややもめ蝶 |
| | | | | 態 | 文政5 | 草蔓や向うの竹へついついと |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 態 | 文化3 | ついついと藪の中より菜種哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | 蛍火や転ぶはづみについついと |
| | | | | 態 | 文化10 | うつくしや若竹の子のついついと |
| | | | | 態 | 文化12 | 笋の兄よ弟よついついと |
| | | | | 態 | 文化13 | ついついとから身でさわぐ蜻蛉哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | 大井川ついつい虫が澄しけり |
| 282 | つ―いつ―い | A―BA―B | 2 | 態 | 文政8 | 小藪よりやり梅つういつうい哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | 時鳥小舟もつういつうい哉 |
| 283 | ついついつい | ABABAB | 2 | 態 | 文政8 | 猪牙舟もついついついぞ時鳥 |
| | | | | 態 | 文化14 | 短夜や草はついついついと咲 |
| 284 | つかつか | ABAB | 1 | 態 | 文化5 | つかつかとちり恥かかぬ桜哉 |
| 285 | つくつく | ABAB | 1 | 態/動詞 | 文政8 | 一つ雁ぐづつくつくと急ぐ哉 |
| 286 | つくづく | ABA'B | 10 | 声/態 | 文政2 | せみなくやつくづく赤い風車 |
| | | | | 声/態 | 文政5 | 行秋やつくづくおしと蝉の鳴 |
| | | | | 声/態 | 文政5 | 行秋やつくづくおしと鳴せみか |
| | | | | 声/態 | 文化10 | 秋(の)蝉つくづく寒し寒しとな |
| | | | | 声/態 | 文政1 | 夕立のつくづくほしと蝉のなく哉 |
| | | | | 声(名詞用法) | 文化3 | 今尽る秋をつくづくほうし哉 |
| | | | | 声(名詞用法) | 文化6 | 苦のさばをつくづく法師法師哉 |
| | | | | 声/態 | 文化7 | ぼた餅を蝉もつくづくほしき哉 |
| | | | | 態/動詞 | 文政2 | 鍬を杖につくづく菊の主哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 苦竹の子や幸つくつくと |
| 287 | つくねん | AB＋接尾辞 | 6 | 態 | 文化9 | じやじや馬のつくねんとしてかすむ也 |
| | | | | 態 | 文政6 | つくねんと愚を守る也引がへる |
| | | | | 態 | 文化11 | うそ寒や如意輪さまもつくねんと |
| | | | | 態 | 文化9 | 柿一つつくねんとして時雨哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | 鶏頭のつくねんとして時雨哉 |
| | | | | 態 | 発句鈔追加 | かくれ家や猫つくねんともちのばん |
| 288 | つっ | Aッ | 1 | 態 | 文化1 | 菊薗につつと出たる葎哉 |
| 289 | つぶつぶ | ABAB | 4 | 態 | 文化7 | 白露につぶつぶ並ぶ仏哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 丸いみがつぶつぶ露と並びけり |
| | | | | 態 | 享和3 | 赤い実も粒粒転る粉炭哉 |
| | | | | 態 | 享和3 | 赤い実の粒粒転るたどん哉 |
| 290 | つやつや | ABAB | 5 | 態 | 文化3 | 人しらぬ藪もつやつや木の芽哉 |
| | | | | 態 | 文化1 | 夏山やつやつやしたる小順礼 |
| | | | | 態 | 文政1 | 草もちの草よりにくしつやつやし |
| | | | | 態 | 文政1 | 草もちの草より青しつやつやし |
| | | | | 態 | 享和2 | つやつやと露のおりたるやけ野哉 |
| 291 | つらつら | ABAB | 2 | 態 | 文政7 | 寝て起て我もつらつら椿哉 |
| | | | | 態 | 文政6 | 紅い花につらつら毛虫哉 |
| 292 | つるつる | ABAB | 2 | 態 | 文化7 | 春の日のつるつるこる椹哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | 古鍋のつるつる出る月夜哉 |
| 293 | つん | AB | 23 | 態 | 文政8 | つんとしてかざりもせぬやでかい家 |
| | | | | 態 | 浅黄空他 | 陽炎や有明つんと藪先に |
| | | | | 態 | 文化11 | 草蔭につんとしている蛙哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | つんとして白梅咲の不二派寺 |
| | | | | 態 | 浅黄空他 | 白梅のつんと立けり不二派寺 |
| | | | | 態 | 文政5 | 白菊のつんと立たる土用哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 女郎花つんと立けり虎が雨 |
| | | | | 態 | 文政4 | 芍薬のつんと咲けり禅宗寺 |
| | | | | 態 | 文化10 | はす池やつんとさし出ル乞食小屋 |
| | | | | 態 | 享和3 | 麻一本つんと延たる茨哉 |
| | | | | 態 | 文化14 | 草の穂のつんと立たる夜寒哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | 草花のつんと立たる夜寒哉 |
| | | | | 態 | 文化5 | 夕月につんと立たるしをん哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | おとなしや白朝顔のつんと咲 |
| | | | | 態 | 享和3 | からめしにつんと立たる冬木立 |
| | | | | 態 | 文政1 | 片隅につんと立けり女郎花 |
| | | | | 態 | 文化11 | 桐の木やてきぱき散てつんと立 |
| | | | | 態 | 文化10 | 炭竈や師走の隅につんとして |
| | | | | 態 | 享和3 | 鷹それし木のつんとして月よ哉 |
| | | | | 態 | 享和3 | 売家につんと立たる冬木哉 |
| | | | | 態 | 享和3 | 火のけなき家つんとして冬椿 |
| | | | | 態 | 享和3 | 世にあはぬ家のつんとして冬椿 |
| | | | | 態 | 文化4 | 湯けぶりのつんとかかる庵哉 |
| 294 | つんつるてん | ABACDB | 1 | 態 | 文政版 | たのもしやつんつるてんの初袷 |
| 295 | てかてか | ABAB | 1 | 態 | 文政7 | かが山の雪てかてかと暑かな |
| 296 | てきぱき | ABCB | 5 | 態 | 文化13 | 汚れ雪てきぱきとけもせざりけり |
| | | | | 態 | 文化12 | 捨かがしてきぱき転もせざりけり |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 態 | 文化11 | 桐の木やてきぱき散てつんと立 |
| | | | | 態 | 文政4 | 下手しぐれてきぱきふりもせざりけり |
| | | | | 態 | 文政8 | 夕立のてきぱきヤメもセざりけり |
| 297 | てくてく | ABAB | 4 | 態 | 文化5 | 蜂の巣のてくてく下る清水哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 草原にてくてくーツいな穂哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | てくてくと大材木の下わらび |
| | | | | 態 | 文政4 | 薮原やてくてくとした稲一穂 |
| 298 | てっくてっく | AッBAッB | 1 | 態 | 希杖本 | 餅つきや大黒さまもてつくてつく |
| 299 | でくでく | ABAB | 1 | 態 | 文政4 | でくでくと蚤まけせぬや田舎猫 |
| 300 | てっきり | AッBリ | 2 | 態 | 発句鈔追加 | むつかしやてつきり雪と見ゆる空 |
| | | | | 態 | 文化11 | わら苞はてつきり馥でありしよな |
| 301 | ててっぽ | AAッB | 1 | 声（名詞用法） | 文政4 | ててつぽが片はなもつや閑古鳥 |
| 302 | ててっぽー | AAッBー | 1 | 声（名詞用法） | 文化14 | ててつぽう声が高いぞ夏の始 |
| 303 | ててっぽーててっぽー | AAッBーAAッBー | 1 | 声 | 文化10 | 窓先やててつぽふてててつぽふと時鳥 |
| 304 | てらてら | ABAB | 4 | 態 | 文政1 | 内中にてらてら鍬の初日哉 |
| | | | | 態 | 浅黄空 | 家内中てらてら鍬の初日哉 |
| | | | | 態 | 自筆本 | 家内にてらてら鍬の初日哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | 馬柄杓の月のてらてら夜川哉 |
| 305 | てんつるてん | ABCDAB | 2 | 態 | 文化11 | 金時がてんつるてんの袷かな |
| | | | | 態 | 文化13 | たのもしやてんつるてんの初袷 |
| 306 | てんてん | ABAB | 7 | 声 | 文化9 | 雉なくやてんてん天下太平と |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | 蜻蛉や犬をてんてん打てとぶ |
| | | | | 態 | 文化12 | 綿弓やてんてん天下太平と |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化11 | 菜よ梅よ蝶がてんてん舞をまふ |
| | | | | 態 | 文化14 | 下闇や精進犬のてんてんと |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化11 | 麦に菜にてんてん舞の小てふ哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 句稿消息他 | 田に畑にてんてん舞の小てふ哉 |
| 307 | てんでん | ABA'B | 1 | 態 | 文化13 | てんでんに遠夕立の目利哉 |
| 308 | てんでんわれわれ | ABA'BCDCD | 1 | 態 | 文化12 | 虫鳴くやとぶやてんでん我々に |
| 309 | とうとう | ABAB（漢） | 1 | 態 | 文化2 | とうとうと紅葉吹つけるかがし哉 |
| 310 | どー | Aー | 1 | 音 | 文政4 | 白露やどふと流るる山の町 |
| 311 | どーんどーん | Aーー BAーー B | 1 | 音 | 文政4 | 手枕に花火のどうんどうん哉 |
| 312 | どーんどんどん | Aーー BABAB | 1 | 音 | 文政4 | どうんどんどんとしくじり花火哉 |
| 313 | とかとか | ABAB | 1 | 態 | 梅塵八番 | 霜柱風とかとかと吹にけり |
| 314 | どかどか | ABAB | 2 | 態 | 文政9 | 穀値段どかどか下るあつさ哉 |
| | | | | 音・態 | 文化9 | どかどかと花の上なる馬ふん哉 |
| 315 | とくとく | ABAB | 2 | 音・態 | 文政1 | 米炊ぐ水とくとくや秋の暮 |
| | | | | 音・態 | 文化5 | とくとくと水の涼しや蜂の留主 |
| 316 | どさどさ | ABAB | 2 | 音・態 | 梅塵八番 | 小むしろや花草臥のどさどさと |
| | | | | 音・態 | 発句鈔追加 | どさどさと木曽茶煎けり秋の雨 |
| 317 | どさり | ABリ | 7 | 音・態 | 文化14 | 烏帽子きてどさり寝ころぶ子の日哉 |
| | | | | 音・態 | 浅黄空 | 薄縁やどさり居て鳴く蛙 |
| | | | | 音・態 | 文化6 | 馬屋ごひをどさりかぶりて梅の花 |
| | | | | 音・態 | 文化13 | 大猫のどさりと寝たる団扇哉 |
| | | | | 音・態 | 文政8 | 玉棚にどさりとねたりどろぼ猫 |
| | | | | 音・態 | 文化5 | 狗のどさりとねまる一葉かな |
| | | | | 音・態 | 文政4 | いがぐりやどさりと犬の枕元 |
| 318 | どさりどさり | ABリABリ | 1 | 音・態 | 文政5 | めでたしやどさりどさりと捨さ苗 |
| 319 | どっさり | AッBリ | 5 | 態 | 文政5 | 是きりと見えてどつさり春の霜 |
| | | | | 態 | 文政3 | 大将の前やどつさり初松魚 |
| | | | | 態 | 文化6 | うの花にどつさりかかる柳哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 我やうにどつさり寝たよ菊の花 |
| | | | | 態 | 文政8 | どつさりと居り込だる蛙哉 |
| 320 | どっさりどさり | AッBリABリ | 1 | 態 | 文政8 | 壁もりやどつさりどさり露時雨 |
| 321 | どっしり | AッBリ | 2 | 態 | 文政8 | どつしりと藤も咲也田植唄 |
| | | | | 態 | 文政5 | どつしりと居るつぎ穂のわか葉哉 |
| 322 | どたどた | ABAB | 6 | 音 | 文化9 | 大びらの雪のどたどた長閑さよ |
| | | | | 音 | 文化11 | わか草にどたどた馬の灸かな |
| | | | | 音（名詞用法） | 文化14 | どたどたは婆が砧よいとしさよ |
| | | | | 音（複合名詞） | 文政3 | 小むしろや花くたびれがどたどた寝 |
| | | | | 音（複合名詞） | 浅黄空他 | 花を見たわらぢながらやどたどた寝 |
| | | | | 音（複合名詞） | 文政6 | 花踏んだわらぢながらやどたどた寝 |
| 323 | どたり | ABリ | 2 | 音・態 | 文政3 | 曲水やどたり寝ころぶ其角組 |
| | | | | 音・態 | 文化13 | うんつくやどたり転んであれ螢 |
| 324 | どたりばたり | ABリCBリ | 1 | 音 | 享和3 | 日中にどたりばたりと砧哉 |
| 325 | どたばた | ABCB | 1 | 音・態（名詞用法） | 文化12 | どたばたは婆が砧としられたり |
| 326 | どたばたどたばた | ABCBABCB | 1 | 音・態 | 発句鈔追加 | 餅どたばたどたばたどこがけかちやら |
| 327 | とちとち | ABAB | 2 | 態 | 文政4 | 栃の実や人もとちとちとび歩く |
| | | | | 態 | 文政4 | とちとちと角兵衛獅子もぼたん哉 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 328 | どっ | Aッ | 9 | 態 | 文政4 | 島原やどつと御影供のこぼれ人 |
| | | | | 態 | 文化5 | 白魚のどつと生るるおぼろ哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | 花ちつてどつとくづるる御寺哉 |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | 花ちつてどつとくつろぐ御寺哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 夕立がどつと腹立まぎれかな |
| | | | | 態 | 文化10 | 麦の葉のどつとかすみてかんこ鳥 |
| | | | | 態 | 希杖本 | 一押にどつと藪蚊も江戸気哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 白露やどつと流るる山の町 |
| | | | | 態 | 文化6 | 鼻唄にどつといなごのきげん哉 |
| 329 | とっと | AッA | 1 | 態 | 文政4 | 山の町とつとと露の流れけり |
| 330 | とっぷり | AッBリ | 1 | 態 | 文化4 | とっぷりと草をぬらして切籠哉 |
| 331 | とぼとぼ | ABAB | 4 | 態 | 文化13 | 連もたぬ雁もとぼとぼ帰りけり |
| | | | | 態 | 句稿消息他 | 連のない雁もとぼとぼ帰りけり |
| | | | | 態 | 文化10 | うの花にとぼとぼ臼の目きり哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | とぼとぼと足よわ雁の一つ哉 |
| 332 | とろとろ | ABAB | 3 | 態 | 文化14 | 雪ちりてとろとろ御堂参哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | 霜がれにとろとろせいび参り哉 |
| | | | | 態 | 文化12 | とろとろと尻やけ千鳥又どこへ |
| 333 | どろどろ | ABAB | 1 | 態 | 文政2 | 暑き夜をどろどろ善光寺詣り哉 |
| 334 | とん | AB | 1 | 音 | 文化12 | 七草やとんともいはぬ藪の家 |
| 335 | どんちゃん | ABCB | 2 | 音・態 | 文政1 | 宇治山や寺はどんちやん夕雲雀 |
| | | | | 音・態 | 発句集続篇 | 夕雲雀寺はどんちゃん始りぬ |
| 336 | とんちん | ABCB | 1 | 音・態 | 文政1 | 夕雲雀寺のとんちん始りぬ |
| 337 | とんちんかん | ABCBDB | 1 | 態 | 随斎筆紀 | 花のなんのとんちんかんで五十年 |
| 338 | どんど | AンA | 7 | 音・態（名詞用法） | 文化11 | ちさいのはおれが在所のどんど哉 |
| | | | | 音・態（名詞用法） | 文化13 | ちさいのがおらが在所のどんど哉 |
| | | | | 音・態（複合名詞） | 文化11 | 山添えやはやしてもなきどんどやき |
| | | | | 音・態（複合名詞） | 文化13 | 御祝儀に雪も降也どんどやき |
| | | | | 音・態（複合名詞） | 文政1 | どんど焼どんどと雪の降りにけり |
| | | | | 音・態（名詞用法） | 文化11 | 世の中はどんどと直るどんど哉 |
| | | | | 音・態（名詞用法） | 発句集続篇 | 世の中がどんどと直るどんど哉 |
| 339 | なむなむ | ABAB | 6 | 声 | 文化8 | 蓬莱に南無南無といふ童哉 |
| | | | | 声 | 文化13 | なむなむと口を明たる蛙かな |
| | | | | 声 | 文政5 | なむなむと蛙も石に並びけり |
| | | | | 声 | 文政5 | なむなむと田にも並んでなく蛙 |
| | | | | 声 | 文化13 | なむなむと桜明りに寝たりけり |
| | | | | 声 | 文政8 | なむなむと名月おがむ子ども哉 |
| 340 | なんむなんむ | AンBAンB | 1 | 声 | おらが春他 | 蓬莱になんむなんむといふ子哉 |
| 341 | にこにこ | ABAB | 4 | 態 | 文化3 | 彦星のにこにこ見ゆる木間哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | 逢ふ夜迚にこにこきげん哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | にこにこと御若い顔や夫婦星 |
| | | | | 態 | 文政2 | もちつきや棚の大黒にこにこと |
| 342 | にっこにこ | AッBAB | 1 | 態 | 文政8 | につこにこ上きげん也二ツ星 |
| 343 | にゃんにゃん | AンAン | 1 | 声 | 文政4 | 呼猫の萩のうらからにやんにやん哉 |
| 344 | にょい | Aイ | 1 | 態 | 文政5 | によいと立田舎葵もまつり哉 |
| 345 | にょっ | Aッ | 1 | 態 | 文化14 | 芒からによつと出たる坊主哉 |
| 346 | にょきにょき | ABAB | 2 | 態 | 寛政中 | こぼれ種草ににょきにょき茸哉 |
| | | | | 態 | 文化14 | いなや風穂のない黍のにょきにょきと |
| 347 | にょろり | ABリ | 1 | 態 | 発句鈔追加 | 芦の葉やにょろり顔出す沼太郎 |
| 348 | ぬくぬく | ABAB | 6 | 態 | 文化14 | ぬくぬくと元日するや寺の縁 |
| | | | | 態 | だん袋他 | ぬくぬくと乗らぱぼたんの台哉 |
| | | | | 態 | 発句鈔追加 | ぬくぬくとよらぱぼたんの台哉 |
| | | | | 態 | 自筆本 | ぬくぬくと雪にくるまる小家哉 |
| | | | | 態 | 文化8 | としとるや竹に雀がぬくぬくと |
| | | | | 態 | 文政5 | ぬくぬくと一人立たる冬木哉 |
| 349 | ぬっ | Aッ | 1 | 態 | 文政1 | 田鼠の穴からぬつとつくし哉 |
| 350 | ぬっぽり | AッBリ | 2 | 態 | 文化12 | ぬつぽりと立や夜寒の大入道 |
| | | | | 態 | 寛政中 | ぬつぽりと月見顔なるかがし哉 |
| 351 | のうのう | ABAB | 3 | 態 | 文化13 | うしろ見せ給ふなのうのう時鳥 |
| | | | | 態 | 文化5 | のうのうと山も立らんかへる雁 |
| | | | | 態 | 文化11 | わか草ののうのうとする葉ぶり哉 |
| 352 | のさのさ | ABAB | 6 | 態 | 文政5 | 小莚にのさのさ彼岸虱かな |
| | | | | 態 | 文政5 | 大蟾ものさのさ出たり田植酒 |
| | | | | 態 | 文化13 | のさのさと汐干案内や里の犬 |
| | | | | 態 | 文化10 | のさのさと恋をするかの蛙哉 |
| | | | | 態 | 文政5 | のさのさとさし出て花見虱かな |
| | | | | 態 | 文政8 | のさのさと憎れ蛇よ蚯蚓鳴 |
| 353 | のたりのたり | ABリABリ | 1 | 態 | 文化11 | あはう鶴のたりのたりと秋の暮 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 354 | のっぺり | AッBリ | 3 | 態 | 文化12 | さぼてんののつぺり長くなる木哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | さぼてんののつぺり長くなる日哉 |
| | | | | 態 | 浅黄空 | さぼてんののつぺり長く咲く日哉 |
| 355 | のほほん | 接頭辞＋AAン | 2 | 声／態 | 文化10 | 梟よのほほん所か年の暮 |
| | | | | 声／態 | 文化10 | 梟よのほほん所か大卅日 |
| 356 | のら | AB | 1 | 態（複合名詞） | 文政5 | のらこきもあればある也大卅日 |
| 357 | のらのら | ABAB | 3 | 態 | 文化13 | 連のない雁ののらのら日永哉 |
| | | | | 態（名詞用法） | 文化13 | のらのらの丈の高さよ烏麦 |
| | | | | 態 | 文化11 | のらのらとべら棒桐の月よ哉 |
| 358 | のらくら | ABCB | 14 | 態（名詞用法） | 文政5 | のらくらや勿体なくも日の長き |
| | | | | 態（名詞用法） | 文政1 | のらくらが三人よれば接木哉 |
| | | | | 態（名詞用法） | 文化14 | のらくらも御代のけしきぞ更衣 |
| | | | | 態（名詞用法） | 文政2 | のらくらが遊びかげんの夜寒哉 |
| | | | | 態（名詞用法） | 文化13 | のらくらや花の都も秋の風 |
| | | | | 態（名詞用法） | 文化14 | のらくらもよい程にせよ秋の蝶 |
| | | | | 態 | 文化10 | のらくらに寒をしゆる芒哉 |
| | | | | 態（名詞用法） | 発句鈔追加 | のらくらの遊びかげんの寒さ哉 |
| | | | | 態（名詞用法） | 文政7 | のらくらもあればあるぞよとしの暮 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化12 | けふもけふものらくら鴛のくらし哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化10 | 時鳥のらくら者を叱るかや |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化9 | 秋風やのらくら者のうしろ吹 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化11 | 秋風やのらくら者のとぼけ顔 |
| | | | | 態（名詞用法） | 文政5 | 大晦日大のらくらが通りけり |
| 359 | のらりくらり | ABリCBリ | 4 | 態 | 文化13 | 日が長いなんのとのらりくらり哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | 日が長い長いとのらりくらり哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | 長き日や日やとてのらりくらり哉 |
| | | | | 態 | 文化12 | 秋風が吹くにものらりくらり哉 |
| 360 | のりつけおほんおほん | 特殊型 | 1 | 声（複合名詞） | 真蹟 | 梟がのりつけおほんおほんかな |
| 361 | のりつけほほん | 特殊型 | 2 | 声 | 文化13 | 秋寒し鳥も糊つけほほん哉 |
| | | | | 声 | 文化13 | 夜寒とて鳥も糊つけほほん哉 |
| 362 | のりつけほほんほほん | 特殊型 | 1 | 声 | 稲永句帖 | 秋日和糊つけほほんほほん哉 |
| 363 | のろのろ | ABAB | 1 | 態 | 文政4 | 穴撰してやのろのろ野らの蛇 |
| 364 | のろり | ABリ | 1 | 態 | 文化11 | 朝寝坊が窓からのろり雉哉 |
| 365 | ぱかり | ABリ | 3 | 音 | 文政8 | 愛想にぱかり口明く木通哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | 棚へ来てぱかり口明く木通哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | 木がらしやぱかりと口を松の疵 |
| 366 | ぱっかり | AッBリ | 2 | 態 | 文化11 | 陽炎にぱつかり口を蜊哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | 釣棚にぱつかり口を木通哉 |
| 367 | ぱくり | ABリ | 1 | 態 | 文政9 | 棚へ来てぱくり口明く木通哉 |
| 368 | ぱっくり | AッBリ | 3 | 態 | 自筆本 | 陽炎にぱつくり口を蜊哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | 大げしをぱつくり咥へかへる哉 |
| | | | | 態 | 自筆本 | 餅とぶやぱつくり犬の明く口へ |
| 369 | ばさばさ | ABAB | 2 | 音 | 文化4 | ばさばさと古びし芦を春の雨 |
| | | | | 音 | 文化1 | ばさばさと木曽茶をはかる秋の雨 |
| 370 | はたはた | ABAB | 4 | 音・態 | 文化11 | 大蚤の中にはたはた蚕哉 |
| | | | | 音（名詞用法） | 文政2 | はたはたははは砧としられけり |
| | | | | 音・態 | 文化1 | はたはたと螢とぶ夜の桶茶哉 |
| | | | | 音（複合名詞） | 文化9 | 玉棚やはたはた虫も茶をたてる |
| 371 | はたりはたり | ABリABリ | 1 | 音・態 | 文政5 | はたりはたりが一芸か大の虫 |
| 372 | ばたり | ABリ | 2 | 音・態 | 文化12 | むくむくとだまつてばたりばつた哉 |
| | | | | 音・態 | 文化13 | 世の中をさうしてばたりばつた哉 |
| 373 | ばたりばたり | ABリABリ | 2 | 音・態 | 文政4 | ばつた虫ばたりばたりが一芸か |
| | | | | 音・態 | 文化11 | 菰簾ばたりばたりとしぐれかな |
| 374 | ばったり | AッBリ | 2 | 態 | 文政5 | 大きなる形でばつたりばつた哉 |
| | | | | 態 | 文化7 | 行きあたりばつたり雁の寝所哉 |
| 375 | ばったりばたり | AッBリABリ | 1 | 態 | 文化13 | 行あたりばつたりばたり団扇哉 |
| 376 | ぱたり | ABリ | 1 | 音・態 | 文政6 | 煤さわぎぱたりと過て朝御灯 |
| 377 | ぱったり | AッBリ | 1 | 態 | 発句鈔追加 | 犬の声ぱつたり止で蓮の花 |
| 378 | ぱちぱち | ABAB | 4 | 音 | 文政3 | 煩悩の腹をぱちぱち扇かな |
| | | | | 音(名詞用法) | 文政4 | ぱちぱちは栗としらるる雨夜哉 |
| | | | | 音 | 文化10 | 朝晴にぱちぱち炭のきげん哉 |
| | | | | 音 | 享和3 | ぱちぱちと椿咲けり炭けぶり |
| 379 | ぱちりぱちり | ABリABリ | 1 | 音 | 文化1 | 豆殻のぱちりぱちりと野分哉 |
| 380 | はっ | Aッ | 2 | 態 | 文化11 | はつとして丸屋丸屋の夜寒哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 村千鳥そつと申せばはつと立 |
| 381 | はっくしょう | AッBC一 | 1 | 声／名詞 | 文政2 | 芋の安売ぞ嚏んも八九升 |
| 382 | はっし | AッB | 1 | 態 | 文化10 | ぽんぽりにはつしとあたる木の実哉 |
| 383 | はった | AッB | 2 | 態 | 文政5 | 散花をはつたとにらむ蛙哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | 蜻蛉やはつたとにらむふじの山 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 384 | はは | AA | 1 | 声 | 自筆本 | けふハハ畳の上の雪見哉 |
| 385 | ぱっ | Aッ | 11 | 態 | 文政3 | 死花をぱつと咲せる仏哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | 一番の弥陀からぱつと桜哉 |
| | | | | 態 | 志多良 | 麦の葉のぱつとかすみてかんこ鳥 |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | 馬の背の螢もぱつと掃れけり |
| | | | | 態 | 文化11 | 汁椀にぱつと夕顔明り哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 見ろとてやぼたんの富貴ぱつとちる |
| | | | | 態 | 文化12 | 突さした柳もぱつと茂哉 |
| | | | | 態 | 発句題叢他 | 秋霧や河原なでしこぱつと咲 |
| | | | | 態 | 文政6 | 左右へぱつと散るや数万の渡り鳥 |
| | | | | 態 | 文政2 | 朝顔や一霜過てぱつと咲 |
| | | | | 態 | 文化1 | 痩山にぱつと咲けりそばの花 |
| 386 | ぱっぱ | AッA | 8 | 態 | 文政9 | 散花のぱつぱと春はなくなりぬ |
| | | | | 態 | 文化11 | 門番が小菜もぱつぱと咲にけり |
| | | | | 態 | 文化12 | 夕立と加賀もぱつぱと過にけり |
| | | | | 態 | 文政4 | 馬の背の螢ぱつぱと掃れけり |
| | | | | 態 | 文化9 | 庵の松ぱつぱと芥子に咲れけり |
| | | | | 態 | 文政6 | 笠で顔ぱつぱとあをぐ木陰哉 |
| | | | | 態 | 文化14 | 垣際のぱつぱとはしやぐ霰哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | 夷講ぱつぱと梅のちり出しぬ |
| 387 | ぱっぱっ | AッAッ | 1 | 態 | 文化12 | ぱつぱつと螢掃おろす庇哉 |
| 388 | はつはつ | ABAB | 2 | 態 | 文化1 | はつはつに松島見へて行々し |
| | | | | 態 | 文化1 | はつはつに親里見ゆるかがし哉 |
| 389 | はらはら | ABAB | 37 | 態 | 文政4 | どぶ板や火かげはらはら春の雪 |
| | | | | 態 | 文化2 | 山やくや眉にはらはら夜の雨 |
| | | | | 態/態 | 文化7 | はんの木のはらはら雁の別哉 |
| | | | | 態 | 文化4 | 能因が雨もはらはら蛙哉 |
| | | | | 態 | 文化6 | ただ頼め花ははらはらあの通 |
| | | | | 態 | 文政版 | ただ頼め花もはらはらあの通 |
| | | | | 態/態 | 文政1 | はらはらの飯にまぶれる桜哉 |
| | | | | 態 | 自筆本 | 門桜はらはら散るが仕事哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | 大川へはらはら蚤を御祓哉 |
| | | | | 態 | 享和2 | 雨はらはら荒鵜の親よ朶に鳴 |
| | | | | 態 | 文化8 | 植る田やけふもはらはら帰る雁 |
| | | | | 態 | 享和3 | 草の蚤はらはらもどる火かげ哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 猫の蚤はらはら戻る夜さり哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 捨藪の蚤やはらはらとびもどる |
| | | | | 態 | 文化2 | 青柳の門にはらはら夜寒哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | 賀星やはらはら竹に水祝 |
| | | | | 態 | 文化12 | 鵲や人もはらはらさらば垣 |
| | | | | 態 | 文化6 | そば咲て菊もはらはら新酒哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | 掌へはらはら雪の降りにけり |
| | | | | 態（複合名詞） | 遺稿 | 古草のはらはら雨やなく蛙 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化2 | 夕陰のはらはら雨に団扇哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化5 | 夕顔やはらはら雨も福の神 |
| | | | | 態 | 文政2 | はらはらと誰が出代のなみだ雨 |
| | | | | 態 | 文化9 | 喰屑の菜もはらはらと咲にけり |
| | | | | 態 | 文政1 | はらはらと畠のこやしや桜花 |
| | | | | 態 | 文政8 | 涼しさや切紙の雪はらはらと |
| | | | | 態 | 文化6 | はらはらと汗の玉ちる稲葉哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | 蝉鳴や赤い木の葉のはらはらと |
| | | | | 態 | 文政7 | 人のまふ獅子やぼたんのはらはらと |
| | | | | 態 | 文化9 | はらはらと麦の四月五月哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | 卯の花の垣根に吹雪はらはらと |
| | | | | 態 | 文化2 | はらはらと朝茶崩や蔦の窓 |
| | | | | 態 | 享和3 | はらはらと紅葉ちりけり鰒と汁 |
| | | | | 態 | 文化1 | はらはらと木槿にかかる木の葉哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 享和3 | 鳴鶏のはらはら時の炭火哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化7 | 葬のはらはら星のきほひ哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政1 | 梅どこかはらはら雪のむら雀 |
| 390 | はらり | ABリ | 3 | 態 | 文化13 | かじけ坊が門もはらりと青柳ぞ |
| | | | | 態 | 発句集続篇 | 夕立のはらりと酒の肴程 |
| | | | | 態 | 文政2 | 夕立やはらりと酒の肴程 |
| 391 | はらりはらり | ABリABリ | 8 | 態 | 文化13 | 五月雨も仕廻のはらりはらり哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | さみだれの仕廻のはらりはらり哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | 露はらりはらり大事のうき世哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | 露はらりはらり世の中よかりけり |
| | | | | 態 | 文化14 | 三絃のはらりはらりや蓮の露 |
| | | | | 態 | 文化5 | 菜の花もはらりはらりとこき茶哉 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 態 | 文化12 | 門桜はらりはらりとかきま哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | 大般若はらりはらりと扇哉 |
| 392 | ぱらぱら | ABAB | 6 | 態 | 文政7 | 蚤ぱらぱら足にとりつく川原哉 |
| | | | | 音・態（複合名詞） | 文化3 | 片袖はぱらぱら雨や花がすみ |
| | | | | 音・態（複合名詞） | 文化5 | 朝ぐせのぱらぱら雨や桐一葉 |
| | | | | 態 | 文化11 | ぱらぱらと目をつく程の小てふ哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | ぱらぱらと夜永の蚤のきげん哉 |
| | | | | 態 | 寛政中 | ぱらぱらと臑に飛つく蟲哉 |
| 393 | ぱらり | ABり | 2 | 音・態 | 文政2 | 一あられぱらり江戸気の霰哉 |
| | | | | 音・態（複合名詞） | 文化11 | 芦の家や千鳥が降らすぱらり雨 |
| 394 | ぱらりぱらり | ABりABり | 3 | 音・態 | 文化11 | 野畠へぱらりぱらりと扱茶哉 |
| | | | | 音・態 | 文政5 | ぬり笠へぱらりぱらりと扱き茶哉 |
| | | | | 音・態 | 文化5 | 草の蚤ぱらりぱらりともどる哉 |
| 395 | ぱらぱら | ABAB | 1 | 音・態 | 梅塵八番 | ぱらぱらは栗としらるる雨夜哉 |
| 396 | ぱらりぱらり | ABりABり | 1 | 態 | 文化11 | 夕立は是切とぱらりぱらり哉 |
| 397 | ひーそひそひそひそ | A—BABABAB | 1 | 声・態 | 文政7 | ひひそひそひそひそすがれ螢哉 |
| 398 | ぴーぴー | A—A— | 2 | 声 | 文化13 | 笛ぴいぴい杖もかちかち冬の月 |
| | | | | 声（名詞・複合名詞 | 文化14 | がらがらやぴいぴいうりや梅の花 |
| 399 | ぴかぴか | ABAB | 1 | 態 | 希杖本 | 黒塗の馬もぴかぴか梅の花 |
| 400 | びく | AB | 2 | 態 | 文政4 | 大なゐにびくともせぬや松の花 |
| | | | | 態 | 文政4 | 大鐘にびくともせぬや蓮の露 |
| 401 | びくり | ABり | 1 | 態 | 文政6 | 鉄砲をびくりともせぬ毛虫哉 |
| 402 | ひた | AB | 10 | 態 | 文化2 | 簀のへりにひたとひつつく小てふ哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 親蜂や蜜盗まれてひたと鳴 |
| | | | | 態 | 文政1 | 烏帽子着てひたと寝並ぶ菫哉 |
| | | | | 態 | 文政5 | 身一ツをひたと苦になる暑哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | のら猫が夜永仕事かひたと鳴 |
| | | | | 態 | 発句鈔追加 | 夕蝉の翌ない秋をひたと鳴 |
| | | | | 態 | 文政8 | 茶けぶりや鳴恋鴫のひたと鳴 |
| | | | | 態 | 文政4 | じれ虫や身をゆすぶってひたと鳴 |
| | | | | 態 | 文化12 | 逃しなもひたと鳴也蚤 |
| | | | | 態 | 文化10 | 栗の峰ひたとおち込坐敷哉 |
| 403 | ひたひた | ABAB | 5 | 音・態 | 文政1 | 六尺の暖簾ひたひた雪げ哉 |
| | | | | 音・態（複合名詞） | 文化2 | 草の葉のひたひた汐や飛ぶ乙鳥 |
| | | | | 音・態 | 文政6 | 道心坊や草履ひたひたむら時雨 |
| | | | | 音・態 | 文化6 | ひたひたと日永の汐の草葉哉 |
| | | | | 音・態（複合名詞） | 文化5 | 顔ぬらすひたひた水や青芒 |
| 404 | ひたりひたり | ABりABり | 1 | 音・態 | 文政7 | 大草履ひたりひたり村時雨 |
| 405 | ぴたり | ABり | 1 | 態 | 文化13 | 餅とぶやぴたりと犬の大口へ |
| 406 | ひひ | AA | 1 | 声 | 文政2 | 不精鹿寝て居てひひと答へけり |
| 407 | ひや | AB | 1 | 態 | 文政1 | 暑き日やひやと算盤枕哉 |
| 408 | ひやひや | ABAB | 1 | 態 | 文化11 | 冷冷と蕗の葉かぶる袷かな |
| 409 | ひやり | ABり | 1 | 態 | 文化13 | 草笛のひやりと五月晴にけり |
| 410 | ひーやり | A—Bり | 2 | 態 | 文政4 | 冷やりと居り心や苔の花 |
| | | | | 態 | 文政8 | ひいやりと一葉の上の安坐哉 |
| 411 | ひやりひやり | ABりABり | 2 | 態 | 文政7 | 風ひやりひやりからだの〆り哉 |
| | | | | 態 | 文化2 | 蕣に背中の冷り冷り哉 |
| 412 | ひやりひーやり | ABりA—Bり | 1 | 態 | 文政6 | 風冷りひひやり秋や辰のとし |
| 413 | ひょい | Aイ | 2 | 態 | 文化3 | 鶯もひよいと来て鳴く柚みそ哉 |
| | | | | 態 | 文化7 | 御頭にひよいと御綿のけしき哉 |
| 414 | ひょいひょい | AイAイ | 8 | 態 | 文化3 | はんの木のひよゐひよゐ先は春辺哉 |
| | | | | 態 | 文化2 | はんの木のひよゐひよゐ先は春日哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 一雨のひよいひよい道や鳴雲雀 |
| | | | | 態 | 文政8 | 菜畠のもやうにひよいひよい菊の花 |
| | | | | 態 | 文政8 | とぶ蚤のひよいひよい達者じまん哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | ひよいひよいと藪にかけるや余り注連 |
| | | | | 態 | 文化2 | ひよいひよいと痩菜花咲く日永哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | ひよいひよいとぶつ切棒の柳哉 |
| 415 | ひょいひょいひょい | AイAイAイ | 1 | 態 | 文政7 | 菜畠やひよいひよいひよいや菊の花 |
| 416 | ひょいひょいひょいひょい | AイAイAイAイ | 2 | 態 | 文政8 | 蚤ひよいひよいひよいひよい過て火にはまる |
| | | | | 態 | 文政8 | 蚤ひよいひよいひよいひよい達者じまん哉 |
| 417 | ひょうひょう | ABAB（漢） | 1 | 態 | 文化2 | ひやうひやうと瓢の風も九月哉 |
| 418 | ひょく | AB | 1 | 態 | 文化2 | 行秋にひよくと立る田ひえ哉 |
| 419 | ひょっくり | AッBり | 1 | 態 | 文政5 | 乗掛のひよつくり出たるわか葉哉 |
| 420 | ひよろひよろ | ABCABC | 1 | 声 | 文政版他 | 鳶ひよろひよろ神の御立げな |
| 421 | ひよろひーよろ | ABCA—BC | 3 | 声 | 文化12 | 鳶ひよろひひよろ神の御立げな |
| | | | | 声 | 発句鈔追加他 | 鳶ひよろひひよろ神も御立げな |
| | | | | 声 | 発句類題集 | 鳶ひよろひひよろ神のお立やら |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 422 | ひょろひょろ | ABAB | 9 | 態 | 発句鈔追加 | 草麦のひょろひょろのびる日ざし哉 |
| | | | | 態 | 享和3 | しの竹のひょろひょろ暮る穂麦哉 |
| | | | | 態 | 文化7 | 秋の夜のひょろひょろ長き立木哉 |
| | | | | 態 | 享和3 | 虫除の札のひょろひょろかれの哉 |
| | | | | 態 | 遺稿 | ひょろひょろと痩菜花咲く日永哉 |
| | | | | 態 | 文化7 | ひょろひょろと磯田の鶴も日永哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | ひょろひょろと草の中よりかきつばた |
| | | | | 態 | 文政8 | 雪ちるや一本草のひょろひょろと |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化11 | 秋風やひょろひょろ山の影法師 |
| 423 | ひょろり | ABリ | 1 | 態 | 文化11 | 綿くりやひょろりと猫の影法師 |
| 424 | ひら | AB | 1 | 態 | 文化7 | 穂芒やひらと附木の釣法度 |
| 425 | ひらひら | ABAB | 26 | 態 | 文政1 | 馬の背の幣のひらひら春の風 |
| | | | | 態 | 文化3 | 蝶ひらひら仏のひざをもどる也 |
| | | | | 態 | 文化7 | はづかしや蝶はひらひら常ひがん |
| | | | | 態 | 文政2 | 蝶ひらひら庵の隅々みとどける |
| | | | | 態 | 文政6 | とぶや蝶ひらひら金ぴら大権現 |
| | | | | 態 | 文政7 | おんひらひら蝶も金比羅参哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | おんひらひら金比羅道の小てふ哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | 笄の蝶にひらひらとぶ小蝶 |
| | | | | 態 | 文政8 | 湯の滝のうらをひらひら小てふ哉 |
| | | | | 態 | 文化8 | 萩の葉にひらひら残る暑哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 古札の藪にひらひら寒さ哉 |
| | | | | 態 | 文政6 | 木の七五三のひらひら残る寒さ哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 棒先の紙のひらひら小春哉 |
| | | | | 態 | 嘉永版 | 棒先の紙もひらひら小春哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | 金比羅の幟ひらひら冬の月 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化12 | 飴店のひらひら紙や先かすむ |
| | | | | 態（複合名詞） | 浅黄空 | 直道のひらひら紙や春がすみ |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化12 | 山藪のひらひら紙も陽炎ぞ |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政7 | 蝶々やひらひら紙も藪の先 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政8 | 蝶とぶやひらひら紙も藪の先 |
| | | | | 態 | 文政3 | ひらひらとつむりにしみる梅の花 |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | ひらひらとつぶりにしみる梅の花 |
| | | | | 態 | 享和3 | 萍や黒い小蝶のひらひらと |
| | | | | 態 | 文政1 | 名月やおんひらひらの流し樽 |
| | | | | 態 | 文化12 | おんひらひら金比羅声よ冬の月 |
| | | | | 態 | 文化13 | 金比良やおんひらひらとちる木の葉 |
| 426 | ひらり | ABリ | 1 | 態 | 文政1 | かいだんの穴よりひらり小てふ哉 |
| 427 | ひらりひらり | ABリABリ | 1 | 態 | 文化12 | 闇がりにひらりひらりと扇哉 |
| 428 | ひりひり | ABAB | 1 | 態 | 文政4 | ひりひりとつむりにしみる梅の花 |
| 429 | ひわひわ | ABAB | 1 | 態 | 希杖本 | 秋風の吹やひはひは日割戸に |
| 430 | ぴん | AB | 1 | 態 | 文政8 | 杉の葉のぴんとそよぐや新酒樽 |
| 431 | ぴんしゃん | ABCB | 1 | 態 | 文化11 | 鵙よ鵙ぴんしゃんするなかかる代に |
| 432 | ふ | A | 4 | 態 | 文政4 | まりそれてふと見付たる雲雀哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | 初蝉のふと鳴て見し柱哉 |
| | | | | 態 | 寛政12 | 麦秋やふと居馴染る伊勢参 |
| | | | | 態 | 文化8 | きりぎりすふと鳴出しぬ鹿の角 |
| 433 | ふい | Aイ | 6 | 態 | 文化11 | 寝る隙にふいとさしても柳哉 |
| | | | | 態 | 文化14 | うしろからふいと巧者な藪蚊哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 秋風にふいとむせたる峠かな |
| | | | | 態 | 文化12 | 蟀のふいと乗けり茄子馬 |
| | | | | 態 | 文政1 | ふいと立おれをかがしの替哉 |
| | | | | 態 | 発句集続篇 | ふいと来て親子のごとし雪の宿 |
| 434 | ふいふい | AイAイ | 2 | 態 | 文化8 | 鶯のふいふい何が気にくわぬ |
| | | | | 態 | 文化11 | 鶯のふいふい田舎かせぎ哉 |
| 435 | ふっ | Aッ | 2 | 態 | 文化9 | はつ蝉や臼に泊てふつとなく |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | 秋風にふつとむせたる峠かな |
| 436 | ぷいぷい | AイAイ | 1 | 態 | 文化10 | 水鳥よぷいぷい何が気にいらぬ |
| 437 | ふーわりふわり | A―BリABリ | 1 | 態 | 文化10 | むまさうな雪がふうはりふはり哉 |
| 438 | ふーわりふーわり | A―BリA―Bリ | 1 | 態 | 自筆本 | むまさうな雪やふうはりふうはり哉 |
| 439 | ふくふく | ABAB | 2 | 態 | 文政3 | ふくふくと乗らばぼたんの台哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | 福福といせ屋が奥の炭火哉 |
| 440 | ぶくぶく | ABAB | 1 | 声・態 | 文化10 | ぶくぶくと衾のうちの小言哉 |
| 441 | ぶくりぶくり | ABリABリ | 2 | 音・態 | 文化12 | 柴漬に古椀ぶくりぶくり哉 |
| | | | | 音・態 | 文化4 | 痩萩やぶくりぶくりと散にけり |
| 442 | ふさふさ | ABAB | 1 | 態（複合名詞） | 文政4 | 並べけりふさふさ餅も夜の体 |
| 443 | ぶつぶつ | ABAB | 5 | 声・態 | 文政5 | 出代やぶつぶつ江戸にこりと蓙 |
| | | | | 声・態 | 文化12 | ぶつぶつと大念仏でつむ茶哉 |
| | | | | 声・態 | 文化4 | ぶつぶつと鳩の小言や衣配 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 声・態 | 自筆本 | ぶつぶつと衾のうちの小言哉 |
| | | | | 声/名詞 | 文化1 | 秋の風蝉もぶつぶつおしと鳴 |
| 444 | ぶつくさ | ABCD | 5 | 声・態 | 文化2 | 草蔭にぶつくさぬかす蛙哉 |
| | | | | 声・態 | 文化2 | 草かげや何をぶつくさゆふ蛙 |
| | | | | 声・態 | 文化13 | 逃しなに何をぶつくさタ蛙 |
| | | | | 音・態 | 文化11 | 婆婆どのや榾のいぶるもぶつくさと |
| | | | | 声・態 | 文化11 | 蛙等も何かぶつくさタはらい |
| 445 | ぶっつり | AッBリ | 1 | 態 | 享和3 | 一本の鶏頭ぶつつり折にけり |
| 446 | ぶつぶつ | ABAB | 1 | 態 | 文政1 | 蚊いぶしにぶつぶつと煮る土瓶哉 |
| 447 | ふわ | AB | 3 | 態 | 文化12 | 菜の花やふはと鼠のとまりけり |
| | | | | 態 | 文化11 | 寝た犬にふはとかぶさる一葉哉 |
| | | | | 態 | 文政6 | かんざしでふはと留たり雪礫 |
| 448 | ふわふわ | ABAB | 11 | 態 | 文政1 | 大丸の暖簾ふはふは雪解哉 |
| | | | | 態 | 文化3 | 風ふはふは木曽鶯も今やなく |
| | | | | 態 | 文政9 | 湯けぶりのふはふは蝶もふはり哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 塵の身もともにふはふは紙帳哉 |
| | | | | 態 | おらが春他 | ちりの身とともにふはふは紙帳哉 |
| | | | | 態 | 文化2 | 草の家や霧がふはふは蟹がはふ |
| | | | | 態 | 享和3 | 初雪のふはふはかかる小鬢哉 |
| | | | | 態 | 真蹟 | ふはふはと出たは御堂の藪蚊哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | 大仏や鼻より霧はふはふはと |
| | | | | 態 | 享和3 | ふはふはとしていく日立一葉哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | はつ雪や軒の菖蒲もふはふはと |
| 449 | ふわり | ABリ | 8 | 態 | 文政9 | 湯けぶりのふはふは蝶もふはり哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 萍にふはり蛙の遊山かな |
| | | | | 態 | 文化8 | 三日月やふはりと梅にうぐいすが |
| | | | | 態 | 文政2 | てふてふのふはりととんだ茶釜哉 |
| | | | | 態 | 文化14 | 瘤岩にふはりと立る日傘哉 |
| | | | | 態 | だん袋他 | 葬をふはりと浮す茶碗哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | 入相をふはりとうける芒哉 |
| | | | | 態 | 文化14 | 鳴蝉も連てふはりと一葉哉 |
| 450 | ふわりふわり | ABリABリ | 4 | 態 | 文化13 | ちりの身のふはりふはりも花の春 |
| | | | | 態 | 浅黄空他 | ちりの身のふはりふはりと春の花 |
| | | | | 態 | 文政2 | 痩螢ふはりふはりとながらふる |
| | | | | 態 | 文政1 | 新わらにふはりふはりと寝楽哉 |
| 451 | ふやふや | ABAB | 1 | 態 | 文化7 | ふやふやの餅につかるる草葉哉 |
| 452 | ふらふら | ABAB | 3 | 態 | 文化13 | 下闇や虫もふらふら蓑作 |
| | | | | 態 | 文化5 | ふらふらと瓢のやうに夜寒哉 |
| | | | | 態 | 文化5 | ふらふらと盆も過行虫籠哉 |
| 453 | ふらしゃら | ABCB | 1 | 態 | 文政7 | うき雲や峰ともならでふらしやらと |
| 454 | ぶらぶら | ABAB | 9 | 態 | 文政8 | 脇差の柄にぶらぶら若菜哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | 茨藪に紙のぶらぶら日永哉 |
| | | | | 態 | 文化8 | 涼しさにぶらぶら地獄巡り哉 |
| | | | | 態 | 文政6 | 涼しさにぶらぶら下る毛虫哉 |
| | | | | 態 | だん袋他 | 涼んとぶらぶら下る毛虫哉 |
| | | | | 態 | 文政6 | 祭り見にぶらぶら下る毛虫哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | ぶらぶらと歩きでのある日あしかな |
| | | | | 態 | 文政7 | ぶらぶらと不断の形で花見哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | むだ人や冬の月夜をぶらぶらと |
| 455 | ぶらり | ABリ | 7 | 態 | 発句鈔追加 | 山吹へ片手でぶらり蛙哉 |
| | | | | 態 | 文政5 | 蜂の巣のぶらり仁王の手首哉 |
| | | | | 態（名詞用法） | 文政5 | 虫籠の軒にぶらりや冬木立 |
| | | | | 態 | 文化1 | 大原やぶらりと出ても梅の月 |
| | | | | 態 | 文化11 | 売わらじぶらりと下る桜哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | 山吹にぶらりと牛のふぐり哉 |
| | | | | 態 | 文化7 | 行秋をぶらりと大の男哉 |
| 456 | ぶらりぶらり | ABリABリ | 1 | 態 | 文化11 | 本町をぶらりぶらりと螢哉 |
| 457 | ぶらりん | ABリン | 1 | 態（名詞用法） | 文政5 | わか葉して中ぶらりんの曇り哉 |
| 458 | ぶらりしゃらり | ABリCBリ | 1 | 態 | 文政6 | 大菊の天窓がぶらりしやらり哉 |
| 459 | ぶん | AB | 2 | 音 | 文政5 | 巣の蜂やぶんともいはぬ御法だん |
| | | | | 音 | 文政2 | 闇の蚊のぶんとばかりに焼れけり |
| 460 | ぶんぶん | ABAB | 1 | 音 | 文政3 | ぶんぶんと虫も屁をひる山家哉 |
| 461 | べそべそ | ABAB | 1 | 態 | 享和3 | べそべそと花火過けり角田川 |
| 462 | へた | AB | 1 | 態 | 文化5 | ぬれ臑にへたとひつつく藪蚊哉 |
| 463 | へたへた | ABAB | 3 | 態 | 文政2 | 人をさす草もへたへた枯にけり |
| | | | | 態 | 文政1 | へたへたと蛙が笑ふさし木哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | へたへたと酔倒たる藪蚊哉 |
| 464 | べたり | ABリ | 4 | 態 | 文化11 | 蝶べたりみだ如来の頬べたへ |
| | | | | 態 | 文政6 | 藪菊や親にならふてべたり寝る |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 態 | 文政5 | わか草にべたりと寝たる袴哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | 傘にべたりと付し桜哉 |
| 465 | べたりべたり | ABリABリ | 2 | 態 | 文化10 | 傘にべたりべたりと桜哉 |
| | | | | 態 | 文化12 | 土べたにべたりべたりと夕涼 |
| 466 | べったり | AッBリ | 9 | 態 | 文化10 | 丸く寝た犬にべったり小てふ哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 一寸寝てするべったりの身寄虫哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 飴ン棒にべったり付し桜哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | 湯上りの尻にべったりせうぶ哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 茂士の飯にべったり螢かな |
| | | | | 態 | 文化12 | さをしかの尻にべったり紅葉哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | べったりと蝶の善行寺平哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | べったりと蝶の咲たる枯木哉 |
| | | | | 態 | 文化14 | べったりと人のなる木や宮角力 |
| 467 | べちゃくちゃ | ABCB | 2 | 声・態 | 文化9 | 乙鳥や小屋の博奕をべちやくちやと |
| | | | | 声・態 | 株番 | 乙鳥や里の博奕をべちやくちやと |
| 468 | ぺちゃくちゃ | ABCB | 1 | 声・態 | 文政9 | 乙鳥やぺちやくちやしやべるもん日哉 |
| 469 | へなへな | ABAB | 1 | 態 | 文政2 | 稲妻にへなへな橋を渡りけり |
| 470 | へらへら | ABAB | 4 | 態 | 文政8 | 紅葉火のへらへら過る月日哉 |
| | | | | 態/態(複合名詞) | 文化7 | わらの火のへらへら雪はふりにけり |
| | | | | 態(複合名詞) | 梅塵八番 | 焼栗やへらへら神の向方に |
| | | | | 態(複合名詞) | 文化9 | 同じ世をへらへら百疋小ばん哉 |
| 471 | べらべら | ABAB | 1 | 態 | 文化11 | べらべらと三百五十九日哉 |
| 472 | へろへろ | ABAB | 7 | 態 | 文政4 | へろへろの神が雛につんむきぬ |
| | | | | 態 | 浅黄空他 | へろへろの神が雛についとむく |
| | | | | 態 | 文政2 | へろへろの神向方に来よ螢 |
| | | | | 態 | 梅塵八番 | へろへろの神むく方へ来よ螢 |
| | | | | 態(複合名詞) | 文政2 | 焼栗やへろへろ神の向方に |
| | | | | 態(複合名詞) | 文政2 | 霰来よへろへろ神の向方に |
| | | | | 態(複合名詞) | 株番 | 同じ世をへろへろ百疋小ばん哉 |
| 473 | べんべん | ABAB(漢) | 1 | 態 | 自筆本 | べんべんと何をしなのの冬の蠅 |
| 474 | べんべんだらり | ABABCDリ(漢) | 2 | 態 | 浅黄空 | 藪梅の散もべんべんだらり哉 |
| | | | | 態 | 発句集続篇 | 藪の梅散もべんべんだらりなり |
| 475 | ぺんぺん | ABAB | 3 | 態 | 文政8 | 大川やぺんぺんすがる渡し綱 |
| | | | | 態(複合名詞) | 文政8 | 行灯やぺんぺん草の影法師 |
| | | | | 態(複合名詞) | 文化10 | 夕さればぺんぺん草も御祓哉 |
| 476 | ほー | Aー | 1 | 声 | 文化11 | 浅黄空ほうとばかりも鶯ぞ |
| 477 | ほかほか | ABAB | 3 | 態 | 文化2 | 朝顔にほかほかとして寒哉 |
| | | | | 態 | 享和3 | かくれ家に日のほかほかとかれの哉 |
| | | | | 態 | 文化7 | ほかほかと煤がかすむぞ又打山 |
| 478 | ほかりほかり | ABリABリ | 2 | 態(名詞用法) | 文政10 | やけ土のほかりほかりや蚤さはぐ |
| | | | | 態 | 希杖本 | 焼迹やほかりほかりと蚤さはぐ |
| 479 | ぽかんぽかん | ABンABン | 1 | 音・態 | 文政8 | 外堀におち栗ぽかんぽかん哉 |
| 480 | ぽきりぽきり | ABリABリ | 1 | 音・態 | 文化12 | 褶ぽきりぽきりなむあみだ仏哉 |
| 481 | ぽっきり | AッBリ | 4 | 態 | 浅黄空 | ちる桜鹿はぽっきり角もげる |
| | | | | 態 | 自筆本 | ちる桜鹿はぽっきり角を折る |
| | | | | 態 | 文化7 | 鬼の角ぽっきり折るる桜哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 箏の千世もぽっきり折にけり |
| 482 | ほくほく | ABAB | 5 | 音・態 | 文政7 | 杖ほくほく団扇はさむや尻の先 |
| | | | | 態 | 文化10 | ほくほくとかすみ給ふはどなた哉 |
| | | | | 態 | 浅黄空他 | ほくほくと霞んで来るはどなた哉 |
| | | | | 態 | 真蹟 | ほくほくと花見に来るはどなた哉 |
| | | | | 音・態 | 文化8 | 霜がれや木辻の鹿のほくほくと |
| 483 | ぼくぼく | ABAB | 1 | 態 | 寛政中 | 只居よふよりはぼくぼく落ぼ哉 |
| 484 | ぽくぽく | ABAB | 1 | 態 | 文政7 | 杖ぽくぽく拾ひ日和の小春哉 |
| 485 | ほけきょー | ABCー | 8 | 声/名詞 | 文政2 | 涅槃会や鳥も法華経法華経と |
| | | | | 声/名詞 | 文化13 | 雀程でもほけ経を鳴にけり |
| | | | | 声/名詞 | 文政2 | 今の世も鳥はほけ経鳴にけり |
| | | | | 声/名詞 | 希杖本 | 今の世は鳥はほけ経鳴にけり |
| | | | | 声/名詞 | 文政2 | 君が代は鳥も法華経鳴にけり |
| | | | | 声/名詞 | 文政8 | ほけ経を鳴ば鳴也辻ばくち |
| | | | | 声/名詞 | 文化10 | ほけ経の一葉投ればとぶ螢 |
| | | | | 声/名詞 | 文政3 | ほけ経と鳥もばせうの法事哉 |
| 486 | ほっけきょー | AッBCー | 2 | 声/名詞 | 文化13 | 鶯や糞しながらもほつけ経 |
| | | | | 声/名詞 | 句稿消息 | 鶯や尿しながらもほつけ経 |
| 487 | ほーほけきょー | AーABCー | 4 | 声/名詞 | 文化10 | 人のするほふほけ経も梅の花 |
| | | | | 声/名詞 | 文化8 | 人のいふ法ほけ経や春の雨 |
| | | | | 声/名詞 | 文化8 | 鶯の法ほけ経を信濃哉 |
| | | | | 声/名詞 | 文化8 | 信濃なる鶯も法ほけ経哉 |
| 488 | ほこりほこり | ABリABリ | 1 | 態 | 文政10 | 痩蚤にやけ石ほこりほこり哉 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 489 | ぼたぼた | ABAB | 6 | 態 | 文化10 | 大ぴらな雪のぼたぼた長閑さよ |
| | | | | 態 | 文化13 | 草もちや臼にぼたぼた梅の花 |
| | | | | 態 | 文化6 | ただ頼め桜ぼたぼたあの通 |
| | | | | 態 | 文政1 | 長閑しやぼた餅雪のぼたぼたと |
| | | | | 態 | 文政6 | 雪ちるや内にも煤のぼたぼたと |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政1 | 我村はぼたぼた雪のひがん哉 |
| 490 | ぽたり | ABリ | 1 | 態 | 文政8 | 今掃た迹から煤がぽたり哉 |
| 491 | ぽたりぽたり | ABリABリ | 1 | 態 | 文政1 | 内は煤ぽたりぽたりや夜の雪 |
| 492 | ぽったり | AッBリ | 1 | 態 | 文政1 | 先明た口へぽったり桜哉 |
| 493 | ぽたぼた | ABAB | 1 | 態 | 文化6 | 餅草のぽたぼたほけて秋の雨 |
| 494 | ぽたりぽたり | ABリABリ | 1 | 態 | 文政4 | もち花のぽたりぽたりとちる日哉 |
| 495 | ぽったりぽたり | AッBリABリ | 1 | 態 | 文政8 | 汗の玉砂ニぽったりぽたり哉 |
| 496 | ほちほち | ABAB | 2 | 態 | 寛政中 | ほちほちとよべの雨落るわか葉哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | ほちほちと雪にくるまる在所哉 |
| 497 | ぽちぽち | ABAB | 2 | 態 | 文化11 | 雨だれのぽちぽち朧月夜哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | 寝むしろや雨もぽちぽちとぶ螢 |
| 498 | ぽちり | ABリ | 1 | 態 | 文政8 | なでしこにぽちりと虎が泪哉 |
| 499 | ぽっちり | AッBリ | 1 | 態 | 文政7 | 白妙の土蔵ぽつちり青田哉 |
| 500 | ぽちりぽちり | ABリABリ | 3 | 態 | 文化3 | 軒の雨ぽちりぽちりと暮遅き |
| | | | | 態 | 文化1 | 松の露ぽちりぽちりと蚊やり哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | 雨ぽちりぽちりとふける灯ろ哉 |
| 501 | ほちゃほちゃ | ABAB | 10 | 態 | 文政1 | 雁行な小菜もほちやほちやほけ立に |
| | | | | 態 | 文化3 | ほちやほちやと藪蕣の咲にけり |
| | | | | 態 | 文化6 | 苦桃の花のほちやほちや咲にけり |
| | | | | 態 | 文政8 | 麦などもほちやほちや肥て桃の花 |
| | | | | 態 | 文政8 | 汁のみのほちやほちやほけて夜寒哉 |
| | | | | 態 | 文政4 | 餅草のほちやほちやほけて秋の雨 |
| | | | | 態 | 文化3 | ほちやほちやと吹侍ひし木の芽哉 |
| | | | | 態 | 句稿消息他 | ほちやほちやと雪にくるまる在所哉 |
| | | | | 態 | 文政1 | ほちやほちやと菜遣しぬ煤払 |
| | | | | 態 | 文化8 | 冬ごもり菜はほちやほちやとほけ立ぬ |
| 502 | ほっ | Aッ | 6 | 声／態 | 文化10 | 鶯の逃おふせてやほつと鳴 |
| | | | | 態 | 文政7 | ほつとして壁にすがるやタ小てふ |
| | | | | 態 | 享和2 | ちる花やほつとして居る太郎冠者 |
| | | | | 態 | 文化11 | 人声にほつとしたやら夕桜 |
| | | | | 態 | 浅黄空 | 一声にほつとしたやらちる桜 |
| | | | | 態 | 文政7 | 町を出てほつと息する螢哉 |
| 503 | ぽっ | Aッ | 3 | 態 | 寛政中 | 東西の人顔ぽつと花火哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化14 | ぽつと出やえどへえどへと時鳥 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化14 | ぽつと出にえどを目がけて時鳥 |
| 504 | ぽっくり | AッBリ | 1 | 態 | 文政9 | ぽつくりと死が上手な仏哉 |
| 505 | ほっそり | AッBリ | 1 | 態 | 文政7 | おぼろ夜やほつそり人の立田山 |
| 506 | ほつほつ | ABAB | 1 | 態 | 享和3 | ほつほつと二階仕事や五月雨 |
| 507 | ぽつぽつ | ABAB | 5 | 態 | 文政1 | 虎の門蝶もぽつぽつ這入けり |
| | | | | 態 | 文化1 | 痩土にぽつぽつ菊の咲にけり |
| | | | | 態 | 文化13 | ぽつぽつと猫迄帰る夜寒哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | ぽつぽつと花のつもりの茶の木哉 |
| | | | | 態 | 文化1 | ぽつぽつと痩けいたうも月夜哉 |
| 508 | ぽつぽつ | ABAB | 2 | 態 | 文政8 | 桃咲くやぽつぽつとけぶることし塚 |
| | | | | 音・態 | 文化1 | ぽつぽつと馬の爪切る野分哉 |
| 509 | ぽっぽ | AッA | 2 | 音・態 | 文政2 | 昼顔やぽつぽと燃る石ころへ |
| | | | | 態 | 文化12 | 酒飯のぽつぽとけぶるはつ時雨 |
| 510 | ぽて | AB | 1 | 態（複合名詞） | 文化11 | ぽて腹へ茨がそれそれ蕃 |
| 511 | ほのぼの | ABA'B | 15 | 態 | 文化5 | 吹下手の笛もほのぼのかすみ哉 |
| | | | | 態 | 文化6 | 蚊の声やほのぼの明し浅間山 |
| | | | | 態 | 文政5 | 夕顔にほのぼの見ゆる夜たか哉 |
| | | | | 態 | 文化7 | 十月やほのぼのかすむ御綿売 |
| | | | | 態 | 文化7 | 初雪やほのぼのかすむ御式台 |
| | | | | 態 | 文化10 | なら坂やほのぼの煤の横がすみ |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政1 | ぬれ色やほのぼの明のとそ袋 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政1 | 饅頭のほのぼの明や青簾 |
| | | | | 態 | 文化9 | ほのぼのと乞食の小菜も咲にけり |
| | | | | 態 | 文化10 | ほのぼのと蕣がさくし水哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | ほのぼのと棚引すすや江戸見坂 |
| | | | | 態 | 文化14 | ほのぼのと棚引すすや寛永寺 |
| | | | | 態 | 文政1 | ほのぼのと明わたりけり煤の顔 |
| | | | | 態 | 文化11 | ほのぼのと明石が浦のなまこ哉 |
| | | | | 態 | 発句鈔追加 | ほのぼのと明石の浦のなまこ哉 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 512 | ほほ | AA | 2 | 声 | 文化13 | 鶯がほほと覗くや花御堂 |
| | | | | 声 | 句稿消息他 | 鶯のほほと覗くや花御堂 |
| 513 | ほろほろ | ABAB | 7 | 声（複合名詞） | 文化3 | 昼此やほろほろ雉の里歩き |
| | | | | 声／態（複合名詞） | 文化5 | 山鳥のほろほろ雨やとぶ小蝶 |
| | | | | 態 | 文化10 | 咲そうもなくてほろほろ椿哉 |
| | | | | 態 | 文政7 | 男といはれて涙ほろほろたうがらし |
| | | | | 態 | 文化9 | 五寸釘松もほろほろ涙哉 |
| | | | | 態 | 文政8 | 永き日や嬉し涙がほろほろと |
| | | | | 態／態 | 文化2 | ほろほろとむかご落けり秋の雨 |
| 514 | ほろり | ABリ | 3 | 態 | 文化11 | 露ほろり気の短さよ短さよ |
| | | | | 態 | 文政1 | 露ほろりまてもしばしもなかりけり |
| | | | | 態 | 文化11 | 勝菊にほろりと爺が涙哉 |
| 515 | ほろりほろり | ABリABリ | 7 | 態 | 文化10 | 身にならぬ夕立ほろりほろり哉 |
| | | | | 態 | 文政2 | 卯の花もほろりほろりや墓の塚 |
| | | | | 態 | 発句鈔追加 | 卯の花もほろりほろりと墓の塚 |
| | | | | 態 | 文化2 | 鳴鹿に紅葉もほろりほろり哉 |
| | | | | 態 | 文化9 | 生若い紅葉もほろりほろり哉 |
| | | | | 態 | 発句集続篇 | 雨の柳でで虫ほろりほろり哉 |
| | | | | 声／態 | 文化7 | 露ほろりほろりと鳴の念仏哉 |
| 516 | ぼろ | AB | 2 | 態（名詞用法） | 文化1 | うしろからぼろを笑ふよ梅の花 |
| | | | | 態（名詞用法） | 文化2 | 袖口は去年のぼろ也梅の花 |
| 517 | ぼろぼろ | ABAB | 1 | 態（複合名詞） | 文化13 | 門並にぼろぼろ衣替にけり |
| 518 | ぼん | AB | 1 | 音 | 文化12 | 蕗の葉にぼんと穴明く暑哉 |
| 519 | ほんのり | AンBリ | 2 | 態 | 文政2 | ほんのりと麴の花や春の雨 |
| | | | | 態 | 文政2 | ほんのりと煤竹染の氷柱哉 |
| 520 | ぼんやり | AンBリ | 2 | 態 | 文化13 | ぼんやりとしてもさすがに名月ぞ |
| | | | | 態 | 文化12 | 大柳なんぼ枯れてもぼんやりと |
| 521 | まごまご | ABAB | 1 | 態 | 文政4 | 雨雲やまごまごしては峰と成 |
| 522 | まじまじ | ABAB | 10 | 態 | 文化12 | 起番の雁のまじまじ日永哉 |
| | | | | 態 | 文化7 | えた寺の桜まじまじ咲にけり |
| | | | | 態 | 文化10 | 人さした虻のまじまじ蓮の花 |
| | | | | 態 | 文化14 | づぶ濡にぬれてまじまじ蜻蛉哉 |
| | | | | 態 | 享和2 | 陽炎や小藪の雪のまじまじと |
| | | | | 態 | 文化6 | まじまじと竹のうしろや小山吹 |
| | | | | 態 | 享和3 | まじまじと稲葉がくれの蓮哉 |
| | | | | 態 | 文化8 | まじまじと梁上君の夜寒哉 |
| | | | | 態 | 文化10 | まじまじと達磨もどきのふとん哉 |
| | | | | 態 | 享和句帖 | とら鰒の顔まじまじと葉かげ哉 |
| 523 | まじり | ABリ | 1 | 態 | 文政5 | 長の夜にまじりともせぬ山家哉 |
| 524 | まじりまじり | ABリABリ | 1 | 態 | 文政7 | 店先の木兎まじりまじりかな |
| 525 | まんまん | ABAB（漢） | 1 | 態 | 梅塵八番 | 雨雲やまんまんしては峰と成 |
| 526 | みりみり | ABAB | 1 | 音・態 | 文政6 | 宵過や柱みりみり寒が入 |
| 527 | みんみんみーん | ABABA―B | 1 | 声／動詞 | 文政2 | はつ蝉のうきを見ん見んみいん哉 |
| 528 | むっ | Aッ | 1 | 態 | 文化11 | 我顔にむつとしたやら帰る雁 |
| 529 | むく | AB | 8 | 態（複合名詞） | 文化9 | むく犬や蝉鳴く方へ口を明 |
| | | | | 態（複合名詞） | 株番 | むく犬や蝉鳴く空へ口を明 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政7 | むく起の小便ながら御慶哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 寛政10 | むく起の鼻の先よりかすみ哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 寛政中 | むく起に蚤はなちやる川辺哉 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政1 | むく起や蚤を放に川原迄 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政1 | むく起や蚤をとばせに川原迄 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文化10 | むく起や蚤を飛ばする角田川 |
| 530 | むくむく | ABAB | 2 | 態 | 文化8 | 梟のむくむく氷る支度哉 |
| | | | | 態 | 文化12 | むくむくとだまつてばたりばつた哉 |
| 531 | むっくり | AッBリ | 1 | 態 | 享和3 | 二番のむつくり見ゆるたばこ哉 |
| 532 | むざむざ | ABAB | 1 | 態 | 文政8 | 若草をむざむざふむや泥わらぢ |
| 533 | むしゃくしゃ | ABCB | 1 | 態 | 文政3 | 画団扇をむしやくしやしやぶるわらは哉 |
| 534 | むしゃむしゃ | ABAB | 1 | 態 | 文化11 | 赤い花むしやむしやしやぶる鴉哉 |
| 535 | むちゃくちゃ | ABCB | 2 | 態 | 文化5 | ちる桜けふもむちやくちやくらしけり |
| | | | | 態 | 文政1 | むちやくちややあはれことしも暮の鐘 |
| 536 | むつむつ | ABAB | 1 | 態 | あつくさ | 寒しこゆし虱むつむつむつかしや |
| 537 | めそめそ | ABAB | 1 | 態 | 文政1 | めそめそと年は暮けり貧乏樽 |
| 538 | めらめら | ABAB | 2 | 態 | 文化7 | わらの火のめらめら暮ることし哉 |
| | | | | 態 | 文化2 | 冬枯にめらめら消るわら火哉 |
| 539 | もうもうもう | ABABAB（漢） | 1 | 声／態 | 文化13 | 牛もうもうもうと霧から出たりけり |
| 540 | やっさ | AッB | 1 | 態 | 自筆本 | 連のない雁ややつさと帰りけり |
| 541 | やんさ | AンB | 2 | 態（複合名詞） | 文政1 | 陽炎ややんさぐらしの千軒家 |
| | | | | 態（複合名詞） | 文政8 | 朝顔やうしろは市のやんさ声 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 542 | ゆうゆう | ABAB（漢） | 3 | 態 | 文化14 | いういうと茨のおくの野梅かな |
| | | | | 態 | 文政2 | ゆうゆうと大名縞の芒かな |
| | | | | 態 | 文政4 | ゆうゆうと犬めがそりの上荷哉 |
| 543 | ゆうぜん | AB＋接尾辞（漢） | 3 | 態 | 文化10 | ゆうぜんとして山を見る蛙哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | 短夜やゆうぜんとして桜花 |
| | | | | 態 | 文政7 | 桐の木の悠然としてわか葉哉 |
| 544 | ゆうゆうぜん | ABAB＋接尾辞（漢） | 1 | 態 | 文政7 | 桐の木の悠々然とわか葉かな |
| 545 | ゆさゆさ | ABAB | 2 | 態 | 文化13 | 蟷螂がゆさゆさ罷出候 |
| | | | | 態 | 文化8 | ゆさゆさと春が行ぞよのべの草 |
| 546 | ゆらゆら | ABAB | 2 | 態 | 文化9 | 吉原をゆらゆら油扇かな |
| | | | | 態 | だん袋他 | ゆらゆらと大名縞の芒かな |
| 547 | ゆらりゆらり | ABりABり | 3 | 態 | 文政2 | 大螢ゆらりゆらりと通りけり |
| | | | | 態 | 文政2 | 大螢せかずにゆらりゆらり哉 |
| | | | | 態 | 文化13 | 本通りゆらりゆらりと螢哉 |
| 548 | ゆるゆる | ABAB | 1 | 態 | 享和3 | 行て来て朝顔見るやゆるゆると |
| 549 | ゆるり | ABり | 3 | 態 | 発句鈔追加 | はつ午や御鍵のゆるり浜屋敷 |
| | | | | 態 | 文化13 | 凧上てゆるりとしたる小村哉 |
| | | | | 態 | 文化1 | 雁鴨にゆるりとかさん畠も哉 |
| 550 | ようよう | ABAB（漢） | 1 | 態 | 寛政中 | マヤの雲捐やふやふ野分哉 |
| 551 | よちよち | ABAB | 1 | 態 | 文化2 | 春雨や家鴨よちよち門歩き |
| 552 | よろ | AB | 1 | 態（複合名詞） | 文化5 | よろ法師梅を淋しくしたりけり |
| 553 | よろよろ | ABAB | 3 | 態（名詞用法） | 文化7 | よろよろは我もまけぬぞ女郎花 |
| | | | | 態 | 文化10 | 痩草のよろよろ花と成にけり |
| | | | | 態 | 希杖本 | 痩菊もよろよろ花となりにけり |
| 554 | らくらく | ABAB（漢） | 10 | 態 | 文政2 | 幸にらくらく咲や屋草菊 |
| | | | | 態 | 文化12 | 楽楽と梅の伸たる田舎哉 |
| | | | | 態 | 句稿消息 | 楽楽と梅も伸たる田舎哉 |
| | | | | 態 | 文化14 | 楽楽と御成太郎の桜哉 |
| | | | | 態 | 文化8 | 楽楽と家鴨の留主の柳哉 |
| | | | | 態 | 文化11 | 楽楽と喰うて寝る世や秋の露 |
| | | | | 態 | 文化14 | 楽楽と寝聳てさく菊の花 |
| | | | | 態 | 文政5 | 楽楽と寝かしもせぬ菊の花 |
| | | | | 態 | 希杖本 | 垣並に楽々と咲屋草菊 |
| | | | | 態 | 文政2 | らくらくと寝て咲にけり名無菊 |
| 555 | りん | AB（漢） | 7 | 態 | 文化11 | 大凧のりんとしてある日暮哉 |
| | | | | 態 | 希杖本 | 大凧やりんとうごかぬ角田川 |
| | | | | 態 | 文政7 | 日蝕の盥にりんと暑哉 |
| | | | | 態 | 連句稿裏書 | 秋霧や河原なでしこりんとして |
| | | | | 態 | 文化1 | 朝顔や藪蚊の中にりんとして |
| | | | | 態 | 文化11 | 本町の木戸りんとして寒さ哉 |
| | | | | 態 | 文化12 | 外堀にりんといのこのかがり哉 |
| 556 | りんりん | ABAB（漢） | 1 | 態 | 文化13 | りんりんと凧上りけり青田原 |
| 557 | わやわや | ABAB | 6 | 声・態 | 文化9 | 雁わやわやおれが噂を致す哉 |
| | | | | 声・態 | あつくさ | わやわやと若い同士の帰雁 |
| | | | | 態 | 文化7 | 蜂のわやわや這入衾かな |
| | | | | 声・態 | 文政2 | わやわやとみやげをねだるうの子哉 |
| | | | | 声・態 | 文政2 | わやわやと土産をねだる鹿の子哉 |
| | | | | 態 | 文政3 | わやわやと虫の上にも夜なべ哉 |
| 558 | わやくや | ABCB | 4 | 態（名詞用法） | 文化13 | わやくやは若い同士よ帰る雁 |
| | | | | 態（名詞用法） | 句稿消息 | わやくやは若い同士が帰る雁 |
| | | | | 態（名詞用法） | 自筆本他 | わやくやは若い同士や帰る雁 |
| | | | | 態 | 文化7 | わやくやと霰を侘る雀哉 |
| 559 | わん | AB | 3 | 声 | 文政版 | わんといへさあいへ犬も年のくれ |
| | | | | 声 | 文化14 | わんといへさあいへ犬もとし忘 |
| | | | | 音・態 | 文政4 | つり鐘の中よりわんと出る蚊哉 |
| 560 | わんわん | ABAB | 1 | 音・態 | 文化13 | わんわんと江戸生抜の藪蚊哉 |
| 561 | わーんわんわん | A—BABAB | 1 | 音・態 | 文政1 | 酒過し藪蚊やわあんわんわんと |